
薦姫の箱庭

くる ひなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鳶姫の箱庭

【Nコード】

N0638N

【作者名】

くる ひなた

【あらすじ】

『鳶王』の番外編集。少し先の未来か、それともパラレルか。

薫姫の王宮行脚 1

「クロちゃん、こんにちは」

「

」

「クロちゃん？ おねえちゃまですよ」

「 どこから、突っ込めばよいのやら 」

こんこんと執務室の扉をノックする音に、部屋の主であるグラディアトリアの宰相クロヴィス・オル・リユネブルクが誰何すると、重厚な扉の向こうから返って来たのは小鳥の囀りように愛らしい声。クロヴィスが慌てて開けた扉の向こうには、思い描いた通りの客人が佇んでいた。

肩に付くか付かないか程度の短さの、黒いふわふわの髪を可憐な花々で飾り、稀なる紫の瞳は光を湛得て真っ直ぐに相手を見据え、白い肌にふつくらとした薔薇色の頬、小振りな鼻にぷるんと瑞々しい小さな唇、化粧気のない顔はされど何処をとっても息を呑む愛らしさ。

年齢的には既にグラディアトリアの成人にあたるのだが、全体的にひどく小柄で幼い子供のように見えて仕方ない彼女が、実は既婚者であるというのは周知の事実である。

スマレ・ルト・レイスウエイク

クロヴィスの兄であり、グラディアトリアの先の皇帝でもあった、ヴィオラント・オル・レイスウェイク大公爵の奥方だ。

十以上も年上の美貌の大公閣下が溺愛するのも頷ける、稀なる魅力満載の小さな淑女は、本日もシフォンと繊細なレースをふんだんに駆使したワンピースドレスをお召しである。

それはまだ身体の凹凸の少ない彼女によく似合うスタイルだが、実はどうも夫であるレイスウェイク大公が、身体の線が出やすい一般的なスタイルのドレスを許さないかららしいのだ。

彼の意見ばかり聞いて服を作ると、どんどん肌の露出が少なくなつて最終的には修道服になつてしまうと、先日レイスウェイク家を訪ねたおりに、旧知の女官長がばやいていた。

「まっ、クロちゃん。おねえちゃまにご挨拶は？」

「どうしても、言わせたいのですね。分かりました　こ
んにちは、義姉上」

「うむ、クロちゃん、いいこいいこ」

執務室に詰めていた文官たちは、目の前の光景に啞然とした。中には、せっかく揃えた書類をばさばさとばらまいてしまう者までいる。

それもそうだろう。

氷の微笑みに泣く子も黙ると恐れられる宰相閣下が、その美貌に疲労を滲ませながらも、あどけない少女に大人しく頭を撫でられているのだから。

そんな部下達の衝撃を背中に感じていたクロヴィスだったが、特に取り繕う訳でもなく、溜息一つにくるりと室内に向き直すと、少し

休憩を入れましよう」と告げて彼らを部屋から追い出した。

そして、すれ違い様隠し切れない戸惑いの眼差しを向けてくる文官達を、大猫被りな微笑みで蕩けさせた董を室内に促し、自らお茶の用意を始めた。

勧められたソファにちょこんと座った少女は、書類に埋もれた宰相の執務室を物珍しそうに見回しながら、大人しく給仕されるのを待っている。

行儀良く膝に揃えて置かれた手は指先まで磨き上げられ、薄い貝殻のように艶やかな爪など見ると、彼女が本当に深窓の令嬢であるかのような錯覚に陥る。

もしくは、それこそ皆が口を揃えて似ていると謳う、精巧な愛玩人形のように思えてならない。

実際には快活な少女であり、大の男を手玉に取って振り回しても無邪気な顔をしていられる、魔性の化身であると知っている身としては、馬鹿馬鹿しい錯覚であるが。

程よく茶葉が解けると、クロヴィスは二つのカップにそれを注ぎ入れ、一つを世界を越えて兄に嫁いできた少女に手渡す。

温かい湯気になり、香しく上質な香りにが辺りに漂い、彼は満足げに溜息を吐いた。

「????それで?　なぜ、スマレが一人でこんな所に?」

「おねえちゃまってちゃんと呼ばなきゃ、答えてあげませーん」

「では、義姉上。兄上は一緒ではないのですか?」

悶々とする心情を誤魔化すように目頭の間を揉む彼を見て、「書類の見過ぎで目がお疲れなのね。時々遠くの緑を見て目を休めなきゃだめよ」などと大人ぶって注意するうんと年下の義姉に、クロヴィスはいろいろ諦めの境地で再度溜息を吐いた。

「ヴィーは、皇太后様のところで足止めされてます」

「はあ、皇太后陛下の。それにしても、貴女が一人で出歩くのを兄上がよく許しましたね？」

レイスウェイク大公閣下の妻に対する独占欲はそれはそれは凄まじく、彼女の可憐すぎる容姿に惑わされて寄ってくる男達を嫌って、屋敷の外に出す時は少女から目を離さないのが常だった。

しかも、肝心の妻には危機感が全くないのだから、大公閣下の苦勞も一入だろう。

「うん、まあ、足止めされてますから？」

「それは、兄上のお許しなしに出歩いていると思って、宜しいのでしょうか？」

「うふふふ」

「うふふふ」じゃないですよ。いいのですか、後が怖いですよ

？」

皇太后陛下だからこそまだ足止めできているのだろうが、兄は董のこととなると普段の穏やかな態度が180度ひっくり返るので、今までの例から言って大変危険な状況になりつつあるに違いない。

自分達はのんびりティータイムなんぞ楽しんでいるが、これはもしや嵐の前の静けさではなからうか。

しかし、そんな魔王召還の種である少女は暢気なもので、クロヴィスの入れた紅茶をゆっくり上品に飲み干したかと思うと、ふわりと蝶が舞う様に立ち上がった。

「ごちそうさまでした」

「どこへ行く気ですか？ 悪い事は言いません、兄上が来るまでここに居なさい」

「だめだよー、使命があるのです」

「使命？ なんですか、それは」

自ら宰相執務室の重厚な扉を開いた董は、引き留めるクロヴィスにつこりと愛らしく微笑み、彼の高い位置にある肩をぽんぽんと叩いて言った。

「慰問」

「

そう言つて彼女が身を翻した廊下の先が、現皇帝陛下であり彼らの弟であり、そしてレイスウエイク大公夫人に今だ未練を残す男の執務室であることに気付き、クロヴィスは口を噤んだ。

この時間、皇帝はまだ執務の真つただ中だろう。

真面目過ぎる感がある彼は、きつと休憩も入れずに机に向っているに違いない。

なるほど、それでは董の訪問は確かに慰問になる。

それが、たとえ弟の心を掻き乱す存在でも、無邪気で飾らず、そして愛らしい彼女の訪問は、彼に一時でも安らぎと慰めを与えるだろう。

グラディアトリアの王城は、先帝であるヴィオラントの大粛正の功勞で、今は隅々まで光が通り安穩としている。

騎士団も常駐してはいるが、實際剣を抜かねばならないような事件もここ数年起きてはおらず、至極平和と言つていい。

しかも董が歩いて行く廊下は、皇太后陛下のおわす後宮と皇帝陛下や宰相以下文官の各々の執務室を繋ぐものであり、王城内でも特に部外者の立ち入りが禁止されている区域。

いつぞや董本人が公爵令嬢とその騎士に浚われるという事件以降警備も強化され、今や国内で最も安全な場所と言っても過言ではないだろう。

それでもせめて皇帝の執務室まで送ろうと申し出たクロヴィスに、董は必要ないと告げ、それからふわりと花が綻ぶように微笑んだ。

「お仕事お疲れさま、クロちゃん」

媚びも打算もない純粋な労いの言葉に、クロヴィスは自身も昼餉の後からずっと休憩も取らずに、書類を睨みつけていたことに気付いた。

董が部屋を訪れなかったら、きっと夕餉の用意を知らされるまでその調子だっただろう。

そして、上司を差し置いて休憩できるはずもない文官達を、必要以上疲労させるところだった。

「ありがとうございます、スミレ。もう少し休憩したら、また頑張りますよ」

「おねえちゃまって呼ばなきゃ、もう来てあげないよ！」

「ああ、はいはい」

可愛らしい眉間に皺を寄せて振り返り、びしりと人差し指を突きつけてくる少女に苦笑しつつ、クロヴィスは胸に片手を当てて恭しくその長身を折り曲げた。

「では、義姉上。次においでになる時は是非先触れを。珍しい菓子

を用意してお持て成しさせていただきます」

「うむ。苦しゅう無い。では、ごきげんよう」

偉そうな言葉を愛らしい声で述べながら、彼女が“珍しい菓子”のくだりに頬を上気させたのを見逃さず、その小さな後ろ姿を見守るクロヴィスは目を緩めた。

よくよく見れば、董の頭を飾る髪飾りの花々の合間で、レイスウエイク家の執事の眷属と思わしき、ハートの葉が数枚揺れている。

この上ない護衛が彼女に付いていることに安心しつつ、おそらく時を経たずしてこの廊下をやって来るであろう彼女の夫を、自分も足止めすべきかどうかと悩むところだ。

「兄上、怖いんですけどね」

皆に愛される奇跡の少女をいつも独り占めしている兄に、すこし位意地悪してもいいのではないかと、働き過ぎの宰相閣下は笑った。

薫姫の王宮行脚2

さすがに大国の長たる皇帝陛下の執務室の前には、見張りが立っている。

それでも、甲冑を着込んだり槍を構えたりという物々しさはなく、彼らの制服ともいえる騎士服を纏い腰に剣を携えて、宰相室よりも更に重厚な扉の左右に陣取っていた。

皇帝陛下の周囲で勤務する近衛騎士の間で、薫の認知度はなかなか高い。

この時間が当番の近衛の二人も、黒髪の小柄な少女の正体を知っていたらしく、ひとり廊下を渡ってきたのを見付けても警戒する様子はなかった。

貴族の姫君達が愛でる精巧なドールのように可憐な少女は、実は彼らが仕える皇帝陛下の長兄にして偉大なる先代の皇帝、現レイスウエイク大公閣下の唯一の奥方であり、皇太后陛下をはじめ皇族の方々がそれはそれは大事にしていらっしゃる至宝である。

それは若き皇帝にとっても例外ではなく、兄の後を継いで重圧にも負けずに見事に大国を治める彼が、大公夫人の前では年相応のまだ少年らしさの抜け切らない青さを見せる事があり、彼を守る年嵩の近衛の目にはそれがとても微笑ましく映るのだ。

薫が皇帝陛下の執務室の前まで辿り着き、淑女らしくちょこんとドレスを摘んで挨拶すると、扉を背に立つ二人の近衛騎士達は厳つい顔を和ませて、入室を断られるはずもない彼女の訪問を主に知らせる為に、扉をノックした。

すると、誰何の声が掛かる前にがちやりとそれが開き、中から出て

来た者があつた。

「?????おや」

皇帝陛下の第一護衛騎士の名誉を預かり、同時にグラディアトリアの騎士団長を務める、ジヨルト・クル・オルセオロ。

皇帝家への忠誠も厚い大貴族オルセオロ公爵家の現当主であり、董の養母となったシュタイアー公爵夫人の甥でもある彼は、物静かで穏やかな普段の雰囲気には騙されやすいが、実は大国最強の騎士である。

同じく最凶と名高いレイスウェイク大公閣下と唯一互角に戦える男であり、誰よりも冷静で思慮深く、それでいて一緒にいて和む彼は、董の大のお気に入りだった。

シュタイアー家側の立場で見ると、彼は董にとって従兄。

レイスウェイク家側の立場で見ると、彼は夫の妹である第二王女ミリアニスを妻に頂いているので、董にとって義理の弟ということになる。

しかし、董は親愛を込めて彼をこう呼ぶ。

「ジヨル兄」

「やあ、スミレちゃん。一人で来たのかい？ 偉いねえ」

ジヨルトの方は董を完璧に“可愛い親戚の子”扱いだが、何故か彼には腹が立たないから不思議だ。

ほわほわとした微笑みを端整な顔に浮かべて場を和ませた騎士団長は、何故か手付かずのティーセットを乗せたワゴンを押して来た。董がそれを見ているのに気付いたジヨルトは、いいことを思いついたとばかりに徐に長身を折り曲げ、彼女の小さな耳にこっそり耳打

ちをした。

こんこんこん

山積み書類に埋もれ、その中の一枚を睨み付けるように読んでいた男は、軽いノックの音に気付いて眉を顰めた。

ルドヴィーク・フィア・グラディアトリア

齢十八にして、大国グラディアトリアを治める皇帝である。

何事も真面目で妥協を許さない彼は、長兄ヴィオラントが整え繋いでくれた祖国の安穩を守る為に、毎日誰よりも多くの時間を執務室に籠っている。

今日も休憩時間といえば昼餉を食べる間だけで、それから一時も休まず書類にサインを繰り返していた。

あまり根を詰めるのを心配した護衛騎士のジョルトが、女官の用意したお茶のワゴンを引っ張ってきて休憩を促したが、その時間も惜しいと素気無く断った所だった。

仕事は嫌いではないがそれなりに疲労し始めていたルドヴィークは、そのノックの音になげやりに返事を返した。

どうせ、更なる書類を抱えた宰相かその部下だろうと思って。

「入れ」

「はい。お邪魔します」

「?????????!!?」

断つたはずのお茶のワゴンを押して現れたのは、ルドヴィークの心臓の隅に今も居場所を持つ、可憐な少女であった。

「??あつ！ なっ！ なんでスミレが!?!」

「まあ、おねえちゃまを呼び捨てするなんて、生意氣い!」

予想もしなかった人物の登場に、がたと大きな音を立てて椅子から立ち上がったルドヴィークは、その衝撃で机の端に積んでいたサイン済み書類の山が崩れて頭を抱えた。

仕方がないので、凝り固まった首をこきりと鳴らして深く溜息を吐くと、絨毯の床に膝を付いてばらまかれた書類を拾い始める。

すると華奢な足首が滑るように側にやってきて、シフォンのドレスの裾をふわりと靡かせてしゃがんだ黒髪の少女が、一緒になって拾うのを手伝ってくれた。

幸いすぐに纏まったそれらを机の上でとんとん揃えて、董は束にしてルドヴィークに差し出す。

「はい、ルド」

「あ、ああ、悪い」

ところが、何が気に入らなかったのか、董は大きな目を半分に眇めてじとりと彼を睨み上げた。

「な、何だ ?」

「“ ありがとうございます、おねえちゃま” でしょう?」

「???? なっ !?」

「ちゃんとおねえちゃまって呼べなきゃ、返してあげませーん」

そう言つて、董は大事な書類の束を自らの胸にぎゅうと抱き締めました。

華奢な少女の細腕から紙の束を奪うくらい、ルドヴィークにとっては簡単過ぎる事だったが、そもそも腕力の問題ではない。

淑女の、しかも好いた娘の胸元深く抱き込まれた物を力づくで奪うなど、意外に初心な皇帝陛下には無理な話だ。

「呼べるかつ、そんな　　！　馬鹿なこと言つてないで、さつさと返せ！！」

「人にものを頼む態度もなつてないね。おねえちゃまはかなしい」
「なっ！　な　な？？？　っ！」

頭に血が上つて口をばくばくさせるルドヴィークに、董は憂いたつぷりの溜息を吐き、そしてぼそりと「クロちゃんはちゃんと言つてくれたのにな　」と、わざと彼に聞こえるほどの小さな声で呟いた。

そして、まんまと乗せられた素直な皇帝陛下はむっと口を嚙み、しばし葛藤するかのように眉間に皺を寄せ床を睨みつけていたが、意を決したように顔を上げ目の前の少女に向つて口を開いた。

「　それを、お返し下さい。お、お　おねえ　ちゃま」

「ぶふっ！　おねえちゃまって！！」

「？？？なっ！　お前がそう呼べつて言つたんじゃないかつ！！」

「ルドのそういう馬鹿正直なところ、おねえちゃまはとつてもきやわいと思うのよ　ぷぷぷっ！」

「？？？くそっ　　！！」

からかわれたと知つたルドヴィークは豪奢な金髪をぐしゃぐしゃと掻き回し、悔しさと恥ずかしさに散々身悶えたかと思うと、遂には執務用の椅子に後ろ向きに座つて黙り込んでしまった。

一方、一頻り腹を抱えて笑って満足した董は、拗ね拗ねモードの皇帝陛下をとりあえずそつとしておいて、ジョルトから預かったワゴンの上でお茶の用意を始める。

彼女は最近趣味と花嫁修業を兼ねて、大陸一と名高い老舗茶葉屋フリードに紅茶の入れ方を習っている。

ポットのお湯は少しばかり冷めてはいるかもしれないが、それでもゆっくりと解ける茶葉の香りは鼻腔に心地よい。

「ルド。紅茶入ったよ」

「いらん」

「冷めちゃうよー、渋くなっちゃうよー？」

「」

こちらを向きもしないルドヴィークを呼びつつ、董は二人分の紅茶に温めたミルクとスプーン2杯分の蜂蜜を入れた。

先程宰相執務室で既に一杯いただいてきたのだが、一言に紅茶と言っても茶葉のブレンドの仕方では大いに異なるし、ミルクを入れたり柑橘類を絞ったりといろんな楽しみ方があって、日本にいるときはどちらかというと珈琲派だった彼女もすっかり馴染んでしまった。

「ルドー」

クロヴィスが入れてくれた紅茶も美味しかったし、自分で入れた甘い紅茶も美味しいが、一人で飲むのはつまらないので、もう一度ルドヴィークを呼んだ。

答えは返らなかったが、彼が椅子の背に埋めていた顔を上げてちらっとこちらを見たので、董は意識して極上の微笑みを浮かべ、蜂蜜よりも甘い声で更に誘いをかけた。

「一緒に飲も？」

「

」

「ここ、おいで。ルド」

青い瞳を泳がせて逡巡する素振りを見逃さず、董はとどめとばかりにソファに腰掛けた自分の横をぽんぽん叩いた。

「

」

心持ち頬を赤めた若き皇帝は、洩々という雰囲気醸し出しつつ自らの椅子からのろのろと立ち上がり、長い足ではほんの数歩の距離を緩慢に歩いてきたかと思うと、わざと乱暴な所作で示された席にどさりと腰を下ろした。

そして、董のほうを見ない様にしながら、用意された紅茶に口を付けた。

「甘い」

「蜂蜜入れたからねえ」

実は猫舌のルドヴィークでもそのまま飲める丁度良い温度の紅茶は、ミルクのまるやかさと蜂蜜のこくのある甘さが混ざり合い、とても優しい味わいになっていた。

女官や侍従はポットから紅茶を注ぐ所まではするが、恐れ多くも皇帝陛下のカップに好き勝手ミルクや蜂蜜を足して、スプーンでぐるぐる掻き混ぜて差し出すことはない。

そんなことをするのは、彼女ただ一人。

ルドヴィークは甘い紅茶を口に含みながら、ちらりと隣に座る少女に視線だけ向けた。

小柄な彼女との身長差は、当然座ってもそのままであり、彼からは

ふわふわの黒髪に包まれた頭の天辺が見えた。

そのまま視線を降ろすと、伏し目がちに紅茶を飲む少女の輪郭が見え、驚く程長く黒い睫毛と、ふつくらと愛らしい薔薇色の頬に視線が釘付けになった。

よく考えれば、ソファはテーブルを挟む形で大きいのが二脚あるというのに、何故かルドヴィークは董と同じソファに、しかも尻がくっ付きそうな程接近して座っている。

いや、それは董にここに座れと呼び寄せられたからなのだが、それにしてもこの近さは不自然だと座る前に気付くべきだっただろう。

左隣に、今だ恋心を諦め切れない愛しい娘。

カップを持つのと逆の手を、そろりと伸ばせばすぐそこに彼女は居て、そのまま引き寄せれば容易に腕の中に捕らえてしまえるに違いない。

そこまで考えて、ルドヴィークははっと我に返った。

「????ルド?」

何を、馬鹿な事を。

彼女は既に長兄に娶られ、その寵愛の深さをいやと言う程知っているといるのに。

ルドヴィークは董がびっくりする程の勢いでカップの紅茶を飲み干すと、大きな瞳をぱちくりさせながら見上げてくる彼女にそれを見つけた。

「?????おかわり」

「はいはい」

薦姫の王宮行脚3

宰相クロヴィスが後宮にある皇太后陛下の私室を尋ねると、麗しき女主人は日の当たるテラスで盤上遊びに興じていた。

既に歳は四十を過ぎているというのに、彼女の女神の如き美しさは衰えを知らず、豪華な金髪は日差しに溶けてまるで太陽の光そのものようだ。

染み一つない白く優美な手に顎を寄せ、赤く艶やかな唇を笑みの形に吊り上げて、サファイアのように青い瞳は楽しそうに盤の上を眺めていた。

対して、その向いの席に長い足を組んで座るのは、皇太后陛下と対照的な美貌の男だ。

艶やかな銀髪は最高級の絹糸のように透き通り、緩い曲線を描いて高い位置にある肩を流れる。

様々な色合いを持つグラディアトリア人でも、ほんの僅かな確率でしか生まれ得ない稀なる色彩、高貴なるアメジストを抱いた彼の瞳は涼やかで、こちらはただ無感動な様子で盤の上を眺めていた。

現グラディアトリア皇帝ルドヴィークの生母、エリザベス・フィア・グラディアトリア皇太后陛下。

並びに、二年前に退位した先代の皇帝で、現在は皇帝に続く最高位の爵位を冠した、ヴィオラント・オル・レイスウェイク大公爵。

「
おや、いやに落ち着いていらっしやる。これは意外でしたね」

「あら、クロヴィスいらつしゃい。貴方もちよつとお座りなさいな」
溺愛する幼妻から引き離されて、さぞ荒れているであろうと思われる。
たクロヴィスの兄は、意外にも普段どおり冷静な様子に見える。
後宮付きの女官がクロヴィスにも紅茶を用意しようとするのを断り、
優雅に手招きをする義母に従い、彼もテラスに出た。

「チェスですか」

「ええ。なかなか、いい勝負ですよ」

「義母上、存外にお強い」

だが、と呟いて、ヴィオラントは長い指で気怠げに駒を摘み上げ、
それをこつんと音を立てて盤の上に置き直した。
それで、勝負はついたようだ。

「???あら、いやだわ。またですか?」

「お約束通り五戦しました。もう気が済んだでしょう」

「五戦全部貴方の勝ちじゃない。つまらないですわ」

「ですが、約束は約束です」

そう言くと、ヴィオラントはテーブルの横に立ったままの弟に目を
向けた。

「クロヴィス。スマレがそなたの所に行っただろう」

「ええ、いらつしゃいましたよ。部下達を和ませて、お行儀良くお
茶を飲んで行かれました」

「そうか」

“部下達を和ませ”の部分で、僅かにヴィオラントの眉間がびくり

としたのを、クロヴィスは見て見ぬ振りをした。

「一人でいらつしやったので驚きましたが、兄上がお許しになったのですか？」

「許すと言ったわけでもないが、あの娘が私の言う事を大人しく聞くはずもない」

「ですが、追い掛けなかったのですね？」

「たまには好きにさせよと、義兄上がおっしゃるので堪えたのだ」

ヴィオラントが言う義兄上とは、もちろん妻である董の実兄のことである。

レイスウェイク家の当主の私室と、奥方の故郷たる異世界は“通じて”おり、時折彼らは酒を呑み交わす仲であるらしい。

ただし、“壁”を隔ててではあるが。

董の兄優斗はヴィオラントより二つばかり年下だが、実質妹を嫁に出すまで親代わりに育てただけあり、彼女のことに関してはこの上ない相談相手だった。

「あの子は昔から、押え付け過ぎれば極度に反抗したくなる質だから、時々掌の上で好きにさせよと仰せだ。あどけないふうに見えるても確と己のことを弁えているから心配ないと　だが??」

そこまで言って、ヴィオラントは徐に椅子から立ち上がった。

「そろそろ我慢がなくなってきたので、捕まえに行くでしょう」
「まあ、あなた程の男が余裕のないこと。可愛い子には旅をさせよと言つでしょう?少し位遊ばせて、どんと構えていらつしやいな」

「余裕がないと言われても結構です。それに、可愛い子とは子供のことでしょう。あれは私の子供ではなく、妻です」

手に入れたばかりの愛妻を、本当なら屋敷に閉じ込めておきたい位なのにと、恥ずかし気もなく言つてのける兄は、ある意味すごいなと思いつつクロヴィスが眺めていると、彼が再びこちらに向き直った。

「それで、クロヴィス。スマレはそなたの部屋を出て何処に行ったのだろうか？」

「ルドのところですよ。廊下のすぐ先でしたからお一人で行かせましたが、ちゃんと中に入るまで見届けましたから大丈夫ですよ」

「そうか」

「ルドも真面目に仕事するのはいいのですが、融通が利かないのがたまに傷でしてね。スマレ 否、“おねえちゃま”が上手く息抜きさせてくれていると有難いです」

「 なんだ、その脱力する呼び方は」

「先程スマレにそう呼ぶ様に強要されました。私は適当に躲しましたが、馬鹿正直な我らの弟は」

「 そのまま、呼ばされていそうだな」

「ですね。ああ、弄ばれている光景が目には浮かぶ」

「ルドヴィークが再起不能になる前に、スマレを回収するでしょう」

一致団結して立ち上がったそんな息子達を、この部屋の主であり皆の母である皇太后陛下は、女官が新しく入れた紅茶に舌鼓を打ちつつ眺めていた。

普段は同じ城内に居ても滅多に顔を合わすことのない子供達が、董が関わりと途端につるむので彼女は楽しいのだ。

いつも難しい顔して部屋に籠ってばかりいるクロヴィスも、こんな

時は表情も生き生きと晴れやかで、気軽に義母の部屋を訪ねて来てくれるし、ルドヴィークの方もおそらく董の訪問で休憩を余儀なくされていることだろう。

董に、“慰問”という名の使命を与えた張本人としては、満足のいく結果であつたようだ。

温い微笑みを浮かべる皇太后陛下に見送られて御前を辞したヴィオラントとクロヴィスは、結局兄弟仲良く末弟たる皇帝陛下の執務室を訪ねることになった。

彼らが目的の部屋まで来ると、扉の前に立つ二人の近衛騎士達は、緊張した面持ちで新たな皇帝への客人を迎え受けた。

畏怖と尊敬の象徴ともいえる偉大なる先帝と、若き現帝を支え国を動かす厳格な宰相が、先触れもなく揃ってやって来たのだから、緊張するなという方が無理だろう。

畏まり縮こまる彼らに苦笑しつつ、クロヴィスがドアをノックし訪問を告げると、中から皇帝本人の声で入室を許可する声が返ってきた。

「?????ルド? 何をしているのですか?」

「クロヴィス 、兄上も!」

ヴィオラントとクロヴィスが部屋の中に入ると、ルドヴィークは執務机の背後に位置する窓際に佇み、外を眺めていた。

そして、室内に居たのは彼ただ一人で、目的の少女の姿は何処にも見えなかった。

それを認識した途端、クロヴィスは体感温度が確実に下がったのを感じた。

それはルドヴィークも同じだったようで、口の端が少々引き攣っている。

「ルドヴィーク、スマレはどうした」

いつそ穏やかにも聞こえる長兄の静かな声に、実は盛大な不機嫌さが滲み出している事を、ヴィオラントの聡い弟達は当然気付いている。

窓辺に貼付いた末弟に向ってゆっくり歩を進めた彼は、途中のテーブルに置かれた二つのティーカップに片眉を上げ、立ち止まった。

ルドヴィークも董も利き手は右。

それと置かれたカップの持ち手の方向を見れば、彼らが同じソファに座ってお茶を飲んだということも、そして不自然な程くっついて座っていたということも、容易に想像できる。

「おや。貴方達、わざわざ並んで座ったのですか？　こんなに席があるのに？」
ふうん

そして、長兄に続いてテーブルの所までやってきた次兄が、余計な状況分析をして意味深な笑みを向けてくるのに、疾しい事など何もないはずなのにあたふたと挙動不審になる皇帝は、やはりまだまだ人生経験が足りないと言われても仕方ないだろう。

「ス、スマレが、そこに座れとっ！」

「はあ、素直ですねルドは。では素直なルドちゃんは言われるままに呼んじやいました？　???彼女を“おねえちゃま”と」
「????????っ!!」

「しっかり、呼んじやったみたいですな」

「う、う、うるさいよっ！」

ご愁傷様と生暖かい笑みを浮かべるクロヴィスに、顔を真っ赤にして叫んだルドヴィークだったが、近くまでやってきたヴィオラントの無表情を見てうつと口を噤んだ。

「スマレは、何処へ行った」

「あ　か、彼女なら騎士の寄宿舎に行くと　」

「寄宿舎だ?????」

ヴィオラントの紫の瞳が、更に剣呑な光を宿して眇められた。それもそうだろう。

今でこそミリアニスのような女性騎士も何人か入団しているが、もともと騎士団は究極の男所帯だ。

しかも寄宿舎など、血気盛ん精力旺盛な独身男性の巣窟ではないか。そんな所に、董のような可憐な少女が訪ねていくなどと、想像するだけでも恐ろしい。

猛獣の群れに子兎を放り込むようなものだ。

ヴィオラントに至っては、総毛立つ程の胸くそ悪さに襲われ、無言でくるりと踵を返すと、盛大に冷気をまき散らしつつ皇帝の執務室を出て行ってしまった。

「ああ、兄上の堪忍袋の緒がついに　。しかし、寄宿舎はさすがにスマレのような娘が行く所ではないでしょう。知っていてよく送り出しましたね、ルドは」

一緒に長兄を見送ったクロヴィスの丁寧な言葉の端々に、ちくちくとした非難を感じたルドヴィークは慌てて弁解をする。

「ジョルトが付いていると言うので行かせたんだ。それに、あそこ

にはシュタイアー公爵家の嫡男　スミレの義理の兄のカーティスとディクレスが居る。シュタイアー家絡みで彼らに用があると言われれば、仕方ないだろう」

「なるほど。確かに騎士団長であるジョルトと一緒になら、問題も起きないでしょうし、第一騎士隊長と第二騎士隊長の縁者と分かつて不埒な真似をする愚か者もないでしょうね」

「そうだろう」

「しかし、それでも行かせては駄目だったんですよ」

「？」

「一緒に行くのは、ジョルトではなく兄上でなければならなかった。言っている意味が、分かりますか？」

「分かった、何となく」

少し考えれば分かる事だった。

欲しくて欲しくて堪らなかった娘をようやく妻とした長兄は、信頼出来るオルセオ公爵とはいえ彼女を預けたいとは思わないだろう。

「私が、浅慮だった」

「まあ、スミレもやりますね。とことん兄上を振り回す魂胆でしょうか。これはちよつと、今日こそ兄上の雷が落ちるのでは？」

「えっ！？　兄上が、スミレを叱るのか？」

「さあ？　ただ、上手く対処しなければ、今後しばらく屋敷から出してもらえない位の仕置きは受けるでしょうね」

さあ、彼女はどうするのかなと思いつつ、窓際のルドヴィークに並んだクロヴィスは、何げに見た眼下の景色に片眉を上げた。

「なんだ、ルド。特等席じゃないですか」

皇帝陛下の執務室の窓からは、地階の片隅にある騎士団寄宿舎の入り口がよく見える。

ちょうどそこに、ジョルトを伴った董が到着した所だった。

薦姫の王宮行脚4

その日、カーティス・ルト・シュタイアーは休暇をいただく予定だった。

しかし数日前、急遽新しく騎士を迎え入れる旨を団長より知らされ、新人は彼が隊長を務める第一騎士隊に配属が決まり、この午前中に様々な手続きに付き合わされたのだ。

現在シュタイアー家の当主は父であるヒルディベルだが、あと2、3年もすれば彼も引退し、長男であるカーティスが爵位を継ぐ事に決まっている。

今は寄宿舎に部屋を貰って寝起きし、父母にも年老いた執事にも干渉されない生活は自由で楽しいが、当主ともなればそういうわけにはいかないだろう。

そもそも、職場である王城とシュタイアー公爵家は馬に乗れば大した距離でもない。

現にカーティスは最近、休日は生家で過ごす事がほとんどだった。

そして、カーティスの足を頻繁に生家に向けさせるきっかけとなった張本人が、今彼の前にっこりと佇んでいる。

「???????スミレっ!??」

「隊長にお客様です」と部下に知らされ、寄宿舎の玄関に出てみると、カーティスの母方の従兄であり、尊敬してやまない騎士団長ジ

ヨルトと、男臭いこの場に恐ろしい程不釣り合いな存在が彼を出迎えた。

「おにいさま」

もろもろの事情と思惑と趣味により、父母があつさりと養女に迎え入れた為、突然カーティスの妹となった少女。

柔らかな曲線を描く黒髪をふわふわさせ、かの貴人と揃いの稀なる紫の瞳をきらきらと輝かせ、愛らしい頬は薔薇色に、瑞々しい唇を微笑みの形にして、極上の美少女はふわりと腕の中に飛び込んだ。た。

小柄で華奢な身体は危なげなく義兄に抱きとめられて、純粹無垢な愛らしい微笑みが胸元から彼を見上げた。

義妹が、実はものすごく大きな猫を被っていると知っているカーティスでさえ、一瞬くらりとしてしまいそうな壮絶な可憐さだった。しかし董は、呆然としている野次馬の目を盗んで、隠密のごとき素早さで自分の袂から取り出した封書を、衝撃と戸惑いに沈黙する義兄の胸元に忍び込ませた。

優秀な騎士たるカーティスがそのことに気付かぬはずもなく、更に優れた動体視力で表にシユタイアー家の刻印があるのを確認し、それが生家からの内密の文書であると判断した。

何らかの理由で、父か母が董にそれを託したのだろうか。

こんなことは、初めてだった。

「カーティス兄様が帰ってらっしゃらないから、寂しくて。勝手に来ちゃいました、ごめんなさい」

「

しかし、無事文書をカーティスに渡し任務を完了しても、何故か董の大猫被り芝居はまだ続いている。

見た目に釣り合う幼げな言葉に、鈴の鳴るような澄んだ高い声。
世間知らずで無垢な令嬢を演じる彼女が、実は既に成人を迎えた既婚者であり、少々世間ずれはしていても頭のいい少女であることは良く知っていたので、カーティスはまだ何かあるのかもしれないと思つて、その芝居に乗る事にした。
周囲の野次馬が、彼女に盛大に熱っぽい視線を向けている事に、義兄としてはかなり苛立ちながら。

「????団長、妹がお世話になったようで。ありがとうございます」
「いやなに、彼女は私にとっても可愛い従妹だ。では、私は陛下の所に戻るからね。後はよろしく」

「?????あとはよろしく」

「」

何げないジョルトのその言葉の背後に、何かとてつもなく背筋の凍るものを感じ、カーティスは上司の見送りもそこそこに、傍らで己の袖口をちゃんと掴んでにこにこしている義妹を凝視した。
よくよく考えてみれば、いつも彼女の側に寄り添っているはずの、かの御方がおいででない。

「 スミレ。閣下は、一緒ではないのか?」

「はい。偉い方とご会談でしたので、席を外して参りました」

有り得ない、とカーティスは心中突っ込んだ。
かの御方が、溺愛するこの少女を自ら一人にするとはい到底思えない。

もしも本当に董が遠慮して席を外そうものなら、どんな大事な内容でも迷わず会談の方を中断し、何よりも彼女を優先するだろう。

董の、カーティスの義妹の夫、ヴィオラント・オル・レイスウェイク大公閣下とは、そういうお人だ。

しかし、実際義妹は彼の手を離れてカーティスの元までやってきた。それはつまり、大公閣下の目を盗んでこっそり、彼の承諾も得ずにやってきてしまったということだろうか。

「私が送って行くから、即刻閣下の元に戻れ」

「おにいさま？」

可愛らしく小首を傾げる義妹に、見蕩れている場合ではない。

住人たるカーティスでさえも、義妹をこれ以上留まらせるのは堪え難い、男だらけの騎士寄宿舎。

王城に召されるだけの騎士達であるから、腕っ節がいいだけのならず者のような卑猥な野次などは上がらないが、それでも極上の美少女に物欲し気な視線を向けてしまうのは、悲しい哉男の性である。最初は遠巻きに義兄妹のやりとりを眺めていたはずが、二人を取り囲む男達の輪がだんだん小さくなってきているように見えるのは、決してカーティスの気のせいではないだろう。

騎士の中でも、公爵家の夜会の招待状が来る位の家の者は、この義妹の正体及びその伴侶の正体を知っている。

しかし、寄宿舎に住む者の多くは、実力のみでのし上がった一般階級出身者だ。

貴族社会の常識には縁もゆかりも、興味さえもない者達である。

つまりほとんどの者が、目の前の最高に愛らしい少女が既に人妻で、その相手というのが皆が寄ってたかって逆立ちしても敵わぬ最強の剣の使い手であり、祖国グラディアトリアを平定した偉大な先帝、現レイスウェイク大公閣下だとは知らないのだ。

そしてかの貴人が、こと妻のこととなると凄まじいまでの執着をみせ、それを邪魔する如何なる者に対しても、不正貴族の生首をばっさばっさと飛ばしていた頃を思い起こさせる、激しく酷薄な視線を向けなされることも、彼らは知らないのだ。

いろいろな事態を想像して、胃の辺りがきりきりと痛んだカーティスは、とにかく早急に董をこの場から遠ざけ、出来るだけ早くヴィオラントの手に返さねばならないと思った。

周囲の野獣共を刺激しないように細心の注意を払いながら、無邪気な笑顔を浮かべて何を考えているのか分からない義妹を促し、騎士達の描いた人垣を突破しようとした、その時???

「お待ち下さい、隊長」

無視出来ない程凜と響いたのは、まだ少年の雰囲気抜け切れていない若い男の声。

カーティスの休暇を潰させた要因たる、本日付けでグラディアトリア第一騎士隊に配属された、新しい騎士の声だった。

騎士団とは、その性質上上下関係の非常に厳しい世界である。究極の体育会系だ。

故に、新人も新人、騎士団一の下っ端であるはずの彼が、一個隊を率いる隊長であるカーティス呼び止めるなどという無礼は、相当の用件がない限り許されない行為なのだ。

しかし、彼はおそらくそんなことを知りもしないのか、冷めた視線を向ける先輩騎士達の人垣を堂々とくぐり抜け、自らが配属になった隊長とその妹君の目の前に立った。

この新人騎士、実はシュタイアー・オルセオロ・リュネブルクと並ぶ四大公爵家の一つ、ロートリアス公爵家の嫡男である。

ロートリアス公爵家といえば、長女であるソフィリアが董を誘拐まがいに連れ去って皇族家の輦轡を買った、あの一族だ。

幸い、彼女の父親であり財務相を務める現当主の日頃の貢献のおかげと、被害者である董が特に処罰を望まなかった為に大事にはならず済んだが、仕事人間であつたロートリアス公爵の父親としての力不足が明るみになった事件だつた。

そして、この跡取り息子もまた、多くの問題を抱えていた。

歳は、成人を迎えたばかりの16才。董と同じ年である。

姉ソフィリアの二年後に生まれた彼は、待望の跡取り息子として、それはそれは大事に育てられた。

特に母親は、仕事で家庭を顧みない夫の代わりにと、子供達を溺愛した。

その結果、姉ソフィリアは美しく穏やかな淑女に成長したが、何でも己の思い通りになると思っている傲慢な一面を持つてしまう。

そして、弟ユリアス・ビス・ロートリアスは、それに輪をかけて傲慢で利己的な少年に成長してしまった。

長女ソフィリアの不祥事をきっかけに、己の家族と真摯に向き合う機会を持ったロートリアス公爵は、そんな息子の由々しき問題に付き、恥を承知で他の三公爵に相談を持ちかける。

そうして、ユリアスの剣の腕がなかなか優れていることに注目したオルセオロ公爵が、自らが長である騎士団への入団を勧め、それならばとシュタイアー公爵が第一騎士隊長を務める長男カーティスを指南役として推したのだ。

騎士団では、生まれ持った身分は関係なく、才能と努力で出世が決まる。

公爵家の跡取りとして何不自由なくぬるま湯に浸かって生きてきたユリアスの、庶民を見下し傲慢でひ弱な根性を叩き直すには、騎士

団で揉まれるのが一番手っ取り早いだろうと意見が一致した。

そうして、本日第一騎士隊に入隊してカーティスに身柄を預けられた少年は、しかしまだ自分のおかれた状況が理解出来ていないらしく、午前中の同隊騎士との顔合わせの際には、庶民出の先輩騎士達を見下すような態度を取って早速反感を買っていた。

おそらく後で呼び出されて制裁を受けるだろうが、己の隊の騎士達には加減を弁えていると信じているので、教育的指導の一環として知らぬ振りをするとカーティスは決めていた。

「初めまして、姫。シュタイアー公爵家にこんな可憐な方がいらっしやるとは、知りませんでした」

そんなことは露とも知らないこの暢気なお坊ちゃまは、突然目の前にやってきたとびつきりの美少女がシュタイアー家の令嬢と知ると、自分と身分が釣り合うし年齢も相応しいと判断し、こともあるうにアタックを始めたのだ。

こいつは真性のばかだと、カーティスは思った。

四大公爵家であるにも関わらず、董の正体を知らないことには呆れ返る。

社交界の情報をいち早く仕入れ世の機微に目を光らせるのも、いずれ当主となるものの責務である。

それに関してはカーティスもあまり得意ではないが、最低限の責任は果たしているつもりだ。

貴族たちを騒がせたレイスウェイク大公閣下の伴侶の姿も知らず、己の姉が起こした不祥事の被害者の姿を知らず、ただその生まれ持った身分を奢るばかりで慎む事を知らない少年の傲慢さに、カーテ

イスはひどく苛立った。

そして、それは彼の聡い義妹にも伝わったようで、小さな手がシャツの裾をつんと引くので視線下ろすと、不思議そうに小首を傾げてこちらを見上げていた。

こういう時の計算していない仕草はまた、本当に堪らなく可愛らしいと、兄バカ街道まつしぐらのカーティスは思う。

その可憐な耳に愚かな少年の名前を入れるも疎ましく、カーティスが無視を決め込んで董を促し通り過ぎようとする、自尊心を傷付けられた少年は上司に向けるとは思えない剣呑な目で彼を睨み、行く手を阻む様に彼らの前に躍り出ると、事も有るうに強引に董の手を取ろうとしたのだ。

この時ばかりはあまりの無礼さに、沸点が高いと定評があるカーティスの怒りが、一気に最高位まで達した。

しかし?????

カーティスが董に伸ばされる少年の手を叩き落とす前に、彼らの間を蝶のようにすり抜け、少女はワンピースの裾をふわりと風に靡かせ舞い上がった。

「ヴィー」

飛び付いてきた少女の軽い身体を、先程のカーティスと同じく危ない気なく抱きとめた腕は、更にそのまま軽々と彼女を抱き上げてしまふ。

幼い子供のように片腕一本で抱えられた少女は、散々相手を振り回しておきながら悪びれる様子もなく、華奢な両腕を彼の首筋に巻き

付けて薔薇色の頬を寄せた。

董の夫は腕の中の存在を確かめる様に、彼女の柔らかな黒髪に鼻先を埋め、それから擦り寄った頬に唇を押し当てた。

「?????閣下」

カーティスは、ほっと息を吐いた。

こんなにすぐ近くまでいらしていたのに、気配の欠片さえ感じさせない所には、相変わらず平伏させられる気分だったが、とにかく董は無事大公閣下の腕の中に戻ったのだ。

心中はどうであれ、彼女を抱かせておけば、だいたい彼の周囲は平和である。

カーティスは、けして長くはない義妹夫婦との付き合いの中で、それを正しく学習していた。

しかし、レイスウェイク大公閣下の登場で肩の力を抜けたのは、カーティスだけだったようだ。

グラディアトリアの騎士団において、この御方を知らない者はまずいない。

眩いばかりの白銀の髪。

最も高貴で稀なる紫の瞳。

完璧に整いたる美貌と神々しく強靱な肢体。

ほんの二年前まで、彼ら騎士が忠誠と命を捧げていた畏怖と尊敬の象徴、先帝ヴィオラント・オル・レイスウェイク。

退位して以来、拝顔することも叶わなかった貴き御方が、突然目の前にやって来たのだ。

彼はただ一瞬ちらりと寄宿舍の方を見遣っただけで、後の関心は全て腕の中の少女に向けられているというのに、騎士達は弾かれたように揃って背筋を伸ばした。

そして、命じられたわけでもないのに、全員が示し合わせたかのようにその場に膝を付く。

主君に対する、騎士の礼式である。

その場に立っているのは、礼を受けたレイスウェイク大公爵夫婦と苦笑いを浮かべる第一騎士隊長、そして取り残された愚かで幼い新人騎士だけだった。

いくら愚鈍とはいえ、腐っても四大公爵家の跡取り息子。

さすがに、父公爵が命をもって仕えた偉大なる先帝の事は知っていた。

呆然と、しばしの間彼を見つめていたユリアスだったが、周囲の騎士達の異様な雰囲気戸惑い、そして何故かひしひしと我が身に押し掛かる威圧感に屈する様に、生まれて初めて地べたに膝を付いたのだった。

そして、それが合図であつたかのように、ヴィオラントがふっと息を吐いた。

「そなた達の心遣い、痛み入る。しかし、膝を付くべき相手は、今はもう私ではないはずだ」

凜と響く、美しく無表情の支配者の声。

騎士達がかつて崇めた主君の声は、しかし二年前よりもずっと穏やかになったように聞こえる。

膝を付く必要はないと言われても、彼らは誰一人としてそれを解こうとはしなかった。

ヴィオラントはそれに対して苦笑するかのように瞳を眇め、肩を竦めているカーティスを見遣り、そして青い顔で膝を付く少年騎士の上を視線が滑った。

「せっかくの休憩中、妻が邪魔をして申し訳なかった」

そう言うと、優雅な足取りで踵を返し、愛らしい細君を猫の子のように腕に抱いたまま、レイスウェイク大公閣下は寄宿舎を後にしたのだった。

騎士達がようやく立ち上がったのは、かつての主君の姿が王宮の中に完全に消えてからであった。

ざわつく周囲に我に返ったユリアスも、痺れる足を叱咤して立ち上がろうとすると、頭上にゆらりと影が差した。

思わず見上げた彼を見下ろしていたのは、直属の上司である第一騎士隊長。

次期ロートリアス公爵を約束された我が身に奢り、他者を見下す傾向にあるユリアスでも、身分的に同等なカーティス・ルト・シユタイーアを愚弄するつもりはないし、誠実で生真面目な彼とは上手くやっていけそうな気がしていたが、その考えが恐ろしく甘く稚拙だったことを、こちらを見下ろす目を見て思い知った。

「世間を舐めるのも大概にしろ。???小僧」

「夕餉まで暇だろう、これから特別に稽古をつけてやる。剣を持って裏庭に出ろ」と、厳しい声で告げられ震え上がった少年騎士は、その言葉通り夕刻まで隊長の容赦ないしごきを受けた。

しかし結果的には、そのおかげで先輩方からの制裁は免れたし、人間として必要なものの一端を学ぶ事ができた。

ただ、途中思い出したように休憩を告げ、立ち上がれない程疲弊したユリアスに背中を向けて、何やら懷から取り出した封書に目を通した後からは、隊長の稽古に八つ当たりめいた乱暴さが見えたというのが、一部始終を見守っていた副隊長の感想であった。

薦姫の王宮行脚5

皇帝の執務室、デスクの後ろに位置する窓からは、階下の騎士寄宿舎の玄関がしっかりと見下ろせた。

董の訪問に驚いた様子だったシュタイア家のカーティスが、他の騎士達から彼女を守るように足早にその場を離れようとしたところ、いやに身形の整った少年騎士が行く手を阻んだ。

その様子を階上から眺めながら訝し気に眉を顰めたルドヴィークに、傍らの兄クロヴィスは「ああ」と思い出したように溜息を吐いた。

「ロートリアスの馬鹿息子。そういえば、今日城に上がる事になってましたね」

「ロートリアス 財務相のご息か。????馬鹿なのか？」

「ええ、それはもう。世間知らずもいいところで。ロートリアス公爵もご自身は大変優秀でいらっしゃるのに、長女といい長男といい本当にお気の毒なことで」

「

」

宰相クロヴィスは四大公爵家の一つ、リュネブルク公爵家の現当主である。

彼もロートリアス公爵に跡取り息子の事で相談を受けた一人であるので、当然彼が騎士団に入った経緯を知っていた。

皇帝ルドヴィークは、ロートリアスの次期当主とはまだ面識がないが、その姉ソフィリアには何度か会ったことがあるし、何より彼女

が董を誘拐した事実は忘れようもなく、当然それに対する心象は最悪であつた。

そんなことを考えている間に、階下の情景に大きな動きがあつた。

「????ああ、兄上のご到着ですよ」

「早すぎないか？」

「まあ、兄上ですから。スマレのことですから」

「」

急いで駆付けたとは到底思えない優雅な長身に、いち早く気付いた黒髪の少女が、対峙する二人の次期公爵の間をすり抜けふわりと彼に飛び付いたのが見えた。

当然難なくそれを受け止めた長兄は、一瞬深く彼女の小さな身体を抱き込み、それから片腕に軽々と抱き上げてしまう。

それら一連の動作には、少女に対する深い執着と厚い愛情が否が応にも見受けられ、ルドヴィークの中に今だひっそりと燦る思いを刺激した。

「あゝ　ルド？　慰めてほしいですか？　それとも、そつとしておいてほしい？」

「何が？」

長兄夫婦からクロヴィスの示す先に視線を向けると、寄宿舎の前に屯しあれだけ騒いでいた騎士達、カーティスと件のロートリアス公爵の子息を除く全員が、地面に片膝を付き静まり返っていた。

「悔しいでしょうが、兄上が相手なら諦めもつくでしょう」

「別に、悔しくない」

皇帝陛下に忠誠を誓ったはずの騎士団が、皇帝陛下以外の者に膝を付く。

本来ならば、それは皇帝に対する裏切りともとれる、許されない行為だ。

しかし、彼らが膝を付いた相手は二年前に退位したばかりの先代皇帝。

騎士団の中枢を担う者達にとっては、激動の時代を命を懸けて仕えた主君であり、故国を安泰させた英雄でもある。

彼に対する深い尊敬と忠誠が、新しい皇帝を迎えたからといって消えて無くなるはずもなく、その事をルドヴィークは先帝の弟として誇らしく思う。

「私は、兄上にはまだまだ敵うとも思っていないし、だからと言って騎士達の忠誠を疑う気もない」

「そうですね」

そして、清々しい表情でそう述べるルドヴィークのことを、クロヴィスも兄ヴィオラントを思うのと同じ位、誇らしく思った。

そうこうしているうちに、董を寄宿舎まで送った皇帝の護衛騎士であり、クロヴィスと同じく四大公爵家の一つオルセオロ公爵家当主ジオルトが、執務室に戻ってきた。

彼も先の二人と同じように窓際までやって来て階下を見下ろすと、ちょうどロートリアス公爵の子息が周囲に気圧されたように片膝を付いた所だった。

「ああ、あの坊ちゃん。閣下の気に当てられて、初日から気の毒なことですねえ」

「いや、いい経験になったでしょう。世の中にはけして逆らっては

ならないものがあると、若い内に気付けばこの先伸びますよ。

うん？ 珍しい。カーティスが怒っているようですね」

「おや、本当だ。だが、カーティスはどれだけ怒っていても過ぎた指導はしないでしょう。彼に任せて正解でしたねえ」

「そうですね」

はっはっはっはっ　と、満足気に笑い合う公爵達を他所に、ルドヴィークの視線は長兄に抱かれたまま去っていく少女に向けられていた。

もう一度、顔を見せに来てはくれないだろうか？？？と、思いながら。

そして、ルドヴィークの願い虚しく、董を抱いたヴィオラントの足は、己の侍従長であるサリバンに用意させた馬車の方に向っていた。

「ねえ、ねえ、ヴィー。怒ってるの？」

「怒られるようなことをした、自覚はあるのか？」

ヴィオラントの表情がないのも口数が少ないのもいつものことだが、抱き上げられて目線の高さと同じになった彼のアメジストは、明らかに不機嫌な様相を呈していた。

他の者なら凍り付きそうな形相だが、彼の唯一の妻はそんなことを露程も気にしない。

相変わらず全開の可愛らしさで、柔らかな黒髪をふわりと揺らし、無邪気な様子で夫の冷厳な美貌を覗き込んだ。

「別に、何にも危ないこともなかったよ。実に平和な午後でしたけど?」

「その平和な午後に、少なくとも二回拉致されたことを忘れたか?」

「忘れてないけど、私、根に持たないタイプだから」

「そういう問題ではない」

最近頓に眉間の筋肉の動きが良くなってきたヴィオラントの、ぴしりと刻まれた縦の皺を、ピンク色のふつくらと柔らかい指先がこしこしと撫でる。

「兄上のご苦勞が、骨身に応えるな」

「あにうえ? どの? 今スミレには、おにいちゃまが三人ばかりいるんですが?」

「そなたの、血の繋がった、実の兄上だ」

「あ、そう」

どれだけ擦っても、今日はヴィオラントの眉間の皺は消えてくれな

い。
早々にそれを諦めた董は、自分で歩くから降ろしてくれと彼に頼んだが、勿論にべなく却下された。

「ヴィーもお兄ちゃんだから、うちのお兄ちゃんの気持ち分かるんでしょ? 私は下の子だから、ヴィーの下の子の兄弟の気持ちが分かるんだよ」

「うん?」

「例えばねえ、お兄ちゃんのお嫁さんの事、すごく優しいし大好きなんだけど、でも心の何処かで私のお兄ちゃん盗ったな〜って恨めしく思ってるの。だからね、時々お義姉ちゃん抜きで兄妹水入らずで居たいって、思う時があったの」

「ヴィー、私を捜してくれてる時、クロちゃんとルドのとこ寄ったでしょ。兄弟だけで集まるのって、久しぶりじゃない。いっぱいお話できた？」

「そなたのことが気になって、兄弟水入らずなど考えもしなかった。

まさか、その為に一人で出歩いていたのか？」

「そりゃちよつとは、私も義弟君たちで遊びたかったからつてもあるけどね。皇太后様ともゆつくり出来たでしょ？ 喜んでた？」

「確かに。あんなに長い時間、義母上とチェスをする機会は、今までなかったな。楽しそうでいらつしやった」

「ね？ ほら、よかった」

そう言つて、董は再びヴィオラントの眉間を撫でる。

先程よりは幾分解れたようだが、それでもやはり皺がすっかり消える事はなかった。

「もしかして。一緒にいなかったから、ヴィー寂しかったの？」

「おーよしよし。可哀想に。この胸で、たーんとお泣きなさい」

口を嚙んだヴィオラントの頭を両腕で引き寄せ、本当にその慎ましやかな胸元に抱き締めてしまう董に、もはや敵う者はいないであろう。

少なくとも、この国には。

ささやかながら柔らかな膨らみの感触と、何よりも心地よい甘い香りに包まれて、燦っていた男の焦燥と苛立と微かな嫉妬は急速に形を潜めた。

誤魔化されている感是多々あるが、今確かに腕の中に戻ってきた愛おしい存在に、これ以上説教を垂れるのはとてもつまらない行為に

感じてしまった。

それよりも、滑らかなシフォンと繊細なレースで飾られた清純な少女のデコルテに、鼻先を擦り付けてはその奥の血潮の香りまで感じようと鼻腔に吸い込み、控え目な谷間に唇を寄せてそこを強く吸い上げた。

「?????うわんっ!?! おいたはダメでしょ」

「慰めてくれるのだろう?」

「だから、よしよししてあげるからっ。 わっ、こらあ」

「寂しくて死にそうだった。頭を撫でられた位では泣き止めぬな」

白い肌の上にくっつきりと残ったキスの跡に満足気に目を細めたヴィオラントは、馬車を待たせている王城の玄関に向っていた足を徐に方向転換し、かつて慣れ親しんだ庭園の方に向って歩き出した。

「ヴィー、どこ行くの?」

「庭園に、秘密の場所がある。私とルータスと亡きロバートしか知らない」

「何しに、行くの?」

「勿論、そなたに慰めてもらうのだ。誰もこない、ちょうどいい東屋だから安心しなさい」

そして、そのまま一時間程庭園の中に消えていたヴィオラントと董を、優秀な侍従長は何事もなく馬車の御者台で迎えるのだった。

帰りの馬車の中、幾分ぐったりとお疲れのレイスウェイク大公爵夫人は、大人しく夫の膝の上に収まっていた。

寵愛する彼女を捕らえて、心身ともに満足したヴィオラントだったが、自身の気に障った事柄だけはこの妻に注意しておかなければと、口を開いた。

「それにしても、騎士の寄宿舎を訪ねるのは行過ぎだっただろう。王城の主殿とはわけが違うぞ」

その言葉に、董は気怠気に閉じていた瞳を開いて、目の前の端正な男の顔を見上げた。

「それはねえ、仕方なかったんですよ。どうしてもカーティス兄に会って渡さなきゃいけない物があったの」

「ほう？」

「スミレはなんと、ダディとマミィから密命を受けたエージェントだったのだ」

「で、何を渡したんだ？」

「それはシュタイアー家のトップシークレットです。まあ、ヴィーは口が堅そうだから教えてあげよう」と、偉そうに告げて、両掌で囲いを作ってヴィオラントの耳に囁かれた内容を要約すると

秘密文書の正体は、次期公爵でありながら今だ独身を貫くカーティスに宛てられた、見合い書の数々である。

父であるシュタイアー公爵は叡智に富んだ美しい女性を、母である公爵夫人は穏やかで慎ましく裁縫が得意な女性を、そして何故か義

兄の見合い相手選びに参加した堇は、胸が大きく弾力がありそうな女性を選んだ。

堇が彼の懷に忍び込ませた封書には、それらの女性のプロフィールと身辺調査の書類と姿絵がセットで納められ、三人の内の最低誰か一人とは会うようにと、父公爵からの命令書も添えられていたのだ。

件の愚鈍な新人騎士のせいで、機嫌が最悪だった時にそれを読んだカーティスが、ちよっとくらいしごきに私情を挟んでも、笑って許してやってほしい。

薦姫の王宮行脚5（後書き）

「薦姫の王宮行脚」おわり

薦姫の余興 (Halloween) 1

「で？ 今日是一体何処に隠したんだい？」

「何をでしょうか」

そろそろ長男のカーティスに家督を譲る準備をしていると噂の、グラディアトリア四大公爵家の一つ、現シュタイアー公爵ヒルディベルは、レイスウエイク家の侍従長サリバンに客間に通され、当主であり実は血を分けた息子でもあるヴィオラントの顔を見るなり、冒頭の台詞を口にした。

それに対し、ヴィオラントは常通りの無表情を保ったまま、少々面倒くさそうに問いを返す。

「娘だよ、うちの娘。養女にした途端そなたに奪われてしまった、可愛い可愛い私のスミレちゃんを、何処にやってしまったんだい？」

「申し上げたい事は多々ありますが、まあいいでしょう。」

スミレなら、厨房に居ります」

「厨房？ 何故そんなところに」

「菓子を作ると言っていました。別段珍しいことでもないかと」

「馬鹿なっ！ 貴族の令嬢と言えば、料理の才能はからつきで絶望的に不器用と相場は決まっておるのだっ！ ああああ、今頃厨房は惨状、あの子は血みどろでっ うあああ、――！！」

「落ち着いて下さい。ご心配には及びません」

勝手な想像で顔色を真っ青にして頭を抱えたシュタイアー公爵を、ヴィオラントは呆れたような目で見ながら溜息を吐いた。

「スミレは、幼い内から家事全般を担っていたそうで、何でも器用にやってみせますし、特に料理は得意なようです」

「ほう」

「何度か、料理人に混じって一品を担当したこともありますし、茶請けの菓子などは頻繁に作ってくれます。美味しいですよ」

「なにいー！」

「？」

幼い時から、家事、特に料理は董の担当だった。

掃除や洗濯は兄が進んでやってくれたが、彼は残念ながら料理の才能だけは持つて生まれてこなかったようで、祖母亡き後野咲兄妹の食卓を維持したのは董であった。

祖母に教わった和食全般から、洋食に中華と、大概のものならレシピがなくとも作る事ができる。

それにお菓子の類いも、特別に難しいものでなければ、大体は何でも目分量で拵えられるようになったいた。

レイスウェイク家にやってきて、当主の妻となった現在も、時間を見付けてはちょこちょこ厨房に顔を出しては、様々な料理を作つて皆に提供している。

甘いものがそう得意ではないヴィオラントの為に、菓子に入れる砂糖を控え目にし、そのかわりに香りの良い果実や果物酒で味を整えるなど、相手を思い遣る心をいっばいに詰めた優しい味わいと、それを差し出す時にはにかなだ愛妻の可愛らしさと言ったら、思い出すだけで頬が緩むというものだ。

「手料理だとう！？ 何それ、羨まし過ぎるっ！ 私もまだ経験したことないのにつ！ うちの奥さんは、裁縫は上手いが料理全般駄目なんだよ。息子達のは、例えば上手くともむさくるしくて御免だし

「！」

「いいな。いいな。ヴィオラント君、いいな。」

「この後、召し上がっていかれればいいでしょう。ちょうど、今作っているようですから。」

「まあ、当然頂きますけど！」

「

」

途端に上機嫌になって、お茶の用意をしようとする旧知の侍従長に向い、「あ、お茶はまた後でいいよ。娘の菓子と一緒にいただきますからね」と断りを入れる、シユタイアー公爵の緩みきった顔を眺めつつ、しかしそういえば今日は作るのにやけに時間が掛かっているなとヴィオラントが気にし始めた時、扉の向こうに慌ただしい足音がやってきたと思うと、些か性急な様子でノックする音が響いた。

侍従長が当主と客人に断ってから扉を開けると、その向こうに居たのは女官の一人で、何故か部屋の中にヴィオラントの姿を見付けると、サリバンにだけ聞こえるように、声を潜めて口を開いた。

「あの、サリバンさん。厨房で、奥方様がお怪我を

」

「……………なに？」

しかし、どんな小さな声でも、ヴィオラントが妻の話題を聞き逃すはずもなく、思いのほか鋭く問う声に、女官は「ああ」と困ったような顔をした。

「スマレがどうしたと？」

「はあ、そう大きな怪我ではございませんが、刃物でお手を少々

」

「刃物？ あれは今日は焼き菓子を作ると言っていたが、刃物など

何に　いや、いい」

腑に落ちない点が残るが、今はそんなことよりも彼女の怪我の状態が気になる。

ヴィオラントは、侍医でもあるサリバンに処置を申し付けると、一刻も早く厨房に向おうと急いで部屋を出た。

もちろん、「ほら、言わんこっちゃない！　ああ、娘が血みどろくく」などと、顔を真っ青にしたシュタイアー公爵も付いて来た。

レイスウエイク家の一階にある厨房を取り仕切るのは、女官長マーサの実弟で、大柄な身体と厳つい面構えが全く子供受けの良くない損な男であるが、実は穏やかで心優しい人間だとすぐに見抜いたらしい董は、彼を料理の師として慕った。

姉と同じく筋金入りの男系一族の長でもある料理長は、はじめ慣れない少女の対応に大いに戸惑った様子だったが、例に漏れず彼女の愛らしさに直ぐさま陥落させられ、今では娘か孫のように可愛がっている。

それは、敬愛する主人の唯一の奥方となった今でも同様で、料理長だけでなくレイスウエイク家に仕える全ての人々の愛情を一身に浴びて、董は毎日を平和に過ごしている。

ヴィオラントが侍従長とシュタイアー公爵を伴って厨房に足を踏み入れると、調理場の机の上にはすでに美味しそうに焼き上がったクッキーが並べられていて、それを作ったはずの当の本人はというと、何故か厨房の隅にぺたんと尻を付いて座り込んでいた。

白いコック服に身を包んだ料理長も、大きな身体を折り曲げて彼

女の傍らにしゃがみこんでいる。

「スマレ」

「ふあい」

ヴィオラントが少し声色を厳しくして呼びかけると、董はしばしの沈黙の後、ばつが悪そうな顔をしてそろそろとこちらを振り返った。

返事がおかしいなと思ったら、左手の人差し指を口に銜えたままだ。

ヴィオラントはつかつかと調理場を横切って妻に近寄ると、座り込んだままの彼女の軽い身体をひよいと抱き上げ、近くに置いてあった椅子の上に座らせて、自分はその前に片膝を付いてしゃがみ込んだ。

「その指を切ったのか？ 見せなさい」

「んーん」

「スマレ、見せなさい」

「」

取り敢えず、止血と痛みを誤魔化す為に傷口を銜えていた董だが、見せたらヴィオラントに怒られそう度一度は拒否したもの、途端にぎゅっと寄った彼の眉間の皺を目の当たりにして、諦めたような溜息を吐いて、そろそろとようやく指から口を放した。

「」

「」

「」

「」

細い人差し指の側面に、ざっくりとした傷口があった。
鋭利で小型の刃物で勢い良く突き刺した風で、見る間に滲み出し

た血が傷口の上でぷくりと膨らんだ。

「これは調理用ナイフで付いた傷ではないな。一体何をしていた？」

「うん、あのね、あれ」

董が指差したのは、先程まで彼女が座り込んでいた厨房の隅で、そこにはオレンジ色の塊が幾つかごろごろと転がっていた。

「ポムが育てていた、瓜の一種だな」

「瓜だけど、私の世界ではあれは“かぼちゃ”って言うの」

「そうか。それで、あれがどうした？」

「あのね、ちょうどハロウインの時期だから、ジャックオーランタン作ろうかと思って」

「？」

董の実家がある世界では、今はちょうど10月の半ば。

この時期有名な行事と言えば、10月31日に本番を迎えるハロウインだ。

「“ハロウイン”とは？」

「実は詳しくは知らないんだけどね、外国のお祭り　かな？　子供達が仮装して、他所のおうちを回ってお菓子貰うの」

「ふむ。それで、あの瓜で何を作ろうとしたと？」

「ジャックオーランタン。かぼちゃの中身をくり抜いてね、目とか鼻とか口とか穴を開けて、中にろうそくを入れて照らすの。ハロウインっていえばこれだろ、という代物！」

「ランタン　なるほど角燈のことか。それを瓜で作ろうとして怪我をしたのか」

「意外に固かったの。手が滑っちゃってさ」

痛かった　と、眉を八の字にした可愛らしい顔に溜息を吐き、
ヴィオラントは血が盛り上がった指先を、さつき彼女がしていたよ
うにぱくりと銜え込み、ねっとり舌を絡ませて傷口をなぞった。
この小さな指が切り落とされなくて、本当によかったと思いが
ら、危ない真似をした妻に少々をお灸を据える為に。

「いだいつ！　ヴィー、痛いつてば。いつから吸血鬼になったの？
っていうか、そのヴィジュアルにヴァンパイアは似合い過ぎだし
！」

「“キュウケツキ”？　“ヴァンパイア”？　何だ、それは」
「どっちも、おぼけつていうか怪物つていうか。とにかく人の血を
吸って生きる人外生物だよ」

「　そなたの世界には、そんな恐ろしいものがあるのか？　スミ
レ、よくぞ今まで無事でいてくれた　」

「あゝ、いやいや、想像上の生き物だからね。ファンタジーだから」

無表情を更に強張らせたヴィオラントの、間違った認識を慌てて
訂正しながら、しかし確かに彼にはヴァンパイアの装束が似合うだ
ろうと董は思った。

絹糸のように透き通った銀髪は、夜の闇に生えるだろう。

深い紫の瞳は、董もそれは同様のことが言えるのだが、稀色は人
外の雰囲気存分に醸し出す。

怜悧な美貌は、時に残酷な夜の王を彷彿とさせ、どんな美女でも
喜んで彼に首筋を差し出しそうだ。

「うん、いいじゃない。しょうか、ハロウィンパーティ」

「うん？」

「何だか、楽しそうな話になってきたねえ、子供達よ」

一人納得して、可愛らしい顔にやりと不穏な笑みを浮かべた董と、そんな妻を不思議そうに眺めるヴィオラントの傍らに、にこにこ笑いを浮かべてシユタイアー公爵も並んだ。

「ダデイ、パーティしよう。仮装パーティ」

「おお、いいねえ。スマレからパーティの提案は珍しいな。ダデイものったのった」

「仮装？」

ついていけないヴィオラントを残して、董と公爵の話はどんどんと進んで行き。

「では、開催は半月後で。場所は、また我が家にしよう。招待するのは内輪のみが良いな」

「うん。兄様達と、皇太后様にクロちゃんにミリアンに　ルドも誘っていいのかな？」

「夜会と銘打てばまずいだろうが、親族間のごく内輪のパーティならば、陛下にもご参加いただけるだろう」

半月もあれば、仮装の衣装も用意できるだろう。

グラディアトリアでも、あまりポピュラーではないにしろ、仮装パーティというカテゴリは存在するらしい。

日本人らしくなんちゃって仏教徒の董は、真実の意味でハロウィンを催すつもりはないので、とにかくそれに託つけて、こちらの世界で得た家族達と楽しくパーティができればいいのだ。

フランケンシュタインやゴブリンが登場しなくても、全然気にしない。

「ヴィーは、ヴァンパイアで決まりね。衣装デザインしなくっちゃ」
「　　はあ、まあ、もう好きにきなさい。」

わくわくと、楽しそうに輝く表情を優しい目で見遣り、妻が喜ぶならもう何でもいいかと溜息を吐いたヴィオラントの横で、始終穏やかに見守っていた侍従長が、ようやく怪我の処置の為に董の左手を取った。

幸い、傷は大したこともなく、出血も既に止まっていた。

「それで、その“ハロウィン”というのは、実際はどういう祭りなんだい？」

董の傷の処置が済むと、ヴィオラントは彼女を連れ、シュタイア―公爵を促し客間に戻った。

念願の愛娘手作りクッキーを堪能しつつ、公爵は興味深い異世界の祭りについて質問をする。

「うーん、ほんとに詳しいことは知らないだつてば。でも確か、ハロウィンの夜には死んだ人が家族を訪ねたり、精霊や魔女が出るって外国では言われててね。それから身を守るために仮面をつけたり、お化けかばちゃで悪い霊を怖がらせて、追い払ったりするんだって聞いてるよ」

「ほう、悪い霊とは　なかなかおどろおどろしい祭りなのだな」

「でも、私の周りの認識から言うと、やる事って言えば仮装して騒いで、“トリック・オア・トリート”でお菓子貰うだけって感じだよ」

「“トリック・オア・トリート”？」

「お菓子くれなきゃ悪戯するぞってという意味。そう言って家を回る

子供達に、大人達はどっさりお菓子をあげるんだよ」

「ほほう、言い様は可愛らしいが、ようは恐喝だな」

「宗教的な意味は全部すつ飛ばして、楽しいとこだけ取り入れるの、日本人って得意なんだよね」

せつかくなので、ジャックオーランタンも幾つか作る事にした。
これがあるだけで、董的にはハロウィン気分が一気に盛り上がるからだ。

しかし、迂闊に怪我をしてしまったことで、ヴィオラントは彼女が刃物を持つ事を禁じてしまった。

仕方がないので、デザインと作り方の指示だけして、実際に作るのは屋敷の者に任せることにする。

「で、ヴィオラントが仮装する“キュウケツキ”というのも、その悪しき霊の一種なのかな？」

「霊じゃなくて怪物の類いかな。人の生き血を飲んで、血を吸われた人間も吸血鬼になって下僕になるの。それに、日に当たると灰になるから活動時間は夜ね。いろいろ説はあるけど、映画なんかになると大体とんでもない美形が演じて、綺麗な女の人を獲物にするの。」

「それらの注釈が付く化け物が、自分の夫にぴったりだと申すのか。そなたは」

「うんっ」

「即答か」

遠い目をするヴィオラントを放ったらかしにして、董とシュタイアー公爵はさらにハロウィンの話題で盛り上がった。

「娘よ。この父は、何をすればいいかな？」

「ん？ ダデイ？ そだなあ、魔術師とかは？」

「魔術師？ 黒いローブを着て怪しき呪術を操るといふ、あれか？」

「そうそう、胡散臭さがぴったりでしょ。しかも黒魔術師ね」

「はははは。相変わらず容赦ないねえ、娘よ」

散々な言われようだが全く気を悪くした風もなく、むしろ物凄く楽しそうに黒魔術師を快諾したシュタイアー公爵は、にやりと笑って「では」と言葉を続けた。

「さしずめ、君の担当は魔女だな。大の男を手玉にとって振り回す、罪深き魔女」

「む、失敬な。手玉に取ってるのは自分の旦那様だけだから、罪深くないんです」

「

「ねえ？ ヴイー」と言って、頭をわしわし撫でて来る幼妻に、ヴィオラントは無言で溜息を吐いた。

正式に彼が妻にしてからも、彼女に向けられる熱い視線も、その奔放な言動に恋惑わされる連中も、まだまだ掃いて捨てる程存在するといふのに、当の本人は何にも分かつちやいないのだ。

そんな息子の心中を知ってか、シュタイアー公爵は更に人の悪い笑みを浮かべ、「いや、やはりぴったりだ」と言った。

「でも、まあ、魔女は女の子の仮装としては定番だし、いいかも」

それに、董の方も魔女の格好自体には異存はない。

魔女と言えば、真っ先に真っ黒の地味なローブに黒猫を思い浮かべるが、実際の仮装衣装は趣向を凝らして可愛くしたものも多い。

トンガリ帽子のキュートなウィッチさんは、女の子なら一度は憧れを抱くものだ。

「魔女など　そんな禍々しいものが、そなたに似合うものか」

しかし、一人難色を示すヴィオラントにさり気なく膝に抱かれながら、董は特に他意はなくぽつりと呟いた。

「でも、魔女つてのも、大きく言えば夜の王の僕だよね。ヴィーがヴァンパイアなら、私のご主人様になるのね」

「　　っ」

「ヴィー、どうしたの？」

「　　私が、そなたの、何だと？」

「“ご主人様”」

「　　」

一気に、ヴィオラントがハロウィンパーティーに乗り気になったのは、言うまでもない。

見守る父は肩を竦めて、

「分かり易過ぎるよ、ヴィオラント君」

と、笑った。

パーティーの招待状は、会場を提供するシュタイアー公爵が引き受けてくれた。

主催者として、董の名が記されたそれを、断る者は一人もいなかった。

全員参加の報告を受けた董のうきつき度はうなぎ上りで、仮装の

衣装の相談はもちろん女官長マーサにする。

「まあまあ、それは楽しそうですね！　すぐにお針子を招集しますわっ！」

ヴィオラントと董の仮装の詳細を聞いたマーサは、新たな楽しみに目を輝かせ、早速お抱えの針子を屋敷に呼ぶよう手配した。

“魔女”というのは、この世界でも空想や伝説として存在するらしいが、“吸血鬼・ヴァンパイア”なるものは、物語の中にも出て来ないらしい。

なので、董はすっかり顔馴染みになったお針子に、自分の中のヴァンパイアのイメージを事細かに説明した。

その未知の存在と妖しい設定に、年若いお針子は創作意欲を大いに掻き立てられたらしく、ものすごい勢いであつという間にデザインを仕上げてしまった。

そうは言っても、ヴァンパイアの格好と言えば、西洋のファーマルにマントというのが基本。

普段着からしてヨーロッパ風なグラディアトリアにおいて、それは全く奇抜な服装ではない。

むしろ、何処が仮装？と疑問に思われそうなほど。

しかし、出来上がった衣装を試着したヴィオラントの姿は、董のイメージ通りの立派な吸血鬼だった。

男性の夜の最上級礼服の一つで、燕尾服、あるいはテールコートと呼ばれるものを身に付け、シルクハットをかぶり、表地が黒で裏地が赤の襟の立ったマントを羽織る。

品が良く高貴な、古典的ヨーロッパ貴族の装い。

その姿はまったく、夜の王ヴァンパイアに相応しい威厳と美しさと、何より妖しさを醸し出していた。

「ヴィー、似合い過ぎ」

「そうか？ それより、そなたのそれはどういうことだ」

「うん？」

ヴィオラントとしても、そう違和感のある格好ではなかったらしく、自分の衣装には特に異存はない様子だったが、同じように目の前で試着をした妻の格好には眉を顰めた。

「丈が短過ぎる。けしからん」

「ええ？ 普通だよ、こんなの」

対する董の格好は、先日決まった通りの魔女である。

またもやレースに対するマーサの情熱が溢れる、ドレス風のウィッチコスチューム。

基本の色はやはり黒だが、スカートの裾にふんわりと段違いで重ねて施された繊細なレースは、董の瞳の色を模したような紫で、その上品な色は上に重ねたケープの裾レースと、魔女のトレードマークとも言えるトンガリ帽子の飾りにも使われている。

魔女というには禍々しい感じは微塵もなく、むしろガリー満載で大変可愛いことはヴィオラントも認める所だが、如何せんスカートの丈が気に喰わない。

ふわんと広がったそれは膝の遥か上までしかなくて、その下に見える隠れるニーハイソックスのレースのふちが、いやにエロティックだった。

「マーサ。もつと丈を長く、少なくとももう一段は布を重ねてくれ」

「あらまあ、せっかく綺麗なおみ足なのに、隠してしまうなど勿体無うございますわ、旦那様」

「そーだ、そーだ。ちいとくらい大胆さがなきゃ、仮装なんか楽し

めないってのっ！」

「スミレは黙っていなさい。マーサ、そなたほどの者が淑女の何たるかを理解していないわけがなかるう。妻のあの丈が許せるかどうか、夫の身になって今一度考えてみてはくれぬか」

董を説得する事など端から諦めているヴィオラントは、常識的に話ができそうな女官長の方を懐柔に掛かった。

切実な目で訴えて来る主人に、さすがにマーサも気の毒に思ったのか、「分かりました、もう一段重なるように、手配致します」と約束した。

ところが。

「

」

当日までに、再度確認しなかったヴィオラントは、油断が過ぎた。

パーティが催される、その日。

会場であるシュタイアー公爵家に到着し、それぞれ別の部屋で着替えて、ようやく広間で再会したヴィオラントと董だったが、上機嫌でやってきた可愛い魔女さんを見た途端、夜の王は秀麗な眉をぴくんと跳ね上げた。

確かに、試着の時に申し付けた通り、董のスカートは二段から三段に変更され、丈も若干長くはなっていた。

だがしかし、その付け足した分の布というのが、実は透け透けの薄いレース生地だったのだ。

結局は、その隙間からけしからん太腿こと絶対領域が見え隠れし、薄いフィルターが掛かったことでより脚線が艶増して見えるという、

逆効果。

ヴィオラントは、無邪気な顔で傍までやってきた一夜限りの可愛
い下僕を、マントから出した手を伸ばして捕まえた。

薦姫の余興 2

「 兄上 」

「 これは、また。似合い過ぎですね 」

日が落ちる直前に連れ立ってやってきたのは、グラディアトリアの皇帝ルドヴィークと、宰相にしてリユネブルク公爵クロヴィスだ。護衛騎士として同行した騎士団長ジヨルトは、シュタイアー公爵夫人の甥オルセオロ公爵としても、パーティに招待されている。別室で素早く着替えてきたらしい彼らは、会場に入るなり異彩を放つ長兄に目を奪われる事となる。

長兄ヴィオラントの並外れた美貌は弟達も承知のことであるが、今宵の装いはまたそれに拍車を掛けて、見据えられれば息が詰まりそうな畏怖と、更に男でもぞくりとするような妖しさを兼ね備えていた。

吸血鬼ヴァンパイアなるものの知識はない彼らだが、ヴィオラントが人外だと言われれば、今なら成程と納得してしまいそうな、そんな完成度の高い仮装であった。

「 何ですか、悪の帝王ですか？ 」

「 いえいえ、美女の生き血に飢えた吸血のボスです。やばいでしょ？ 」

「 やばいですね。ついでに、貴女の格好もね 」

「 うん？ 」

実はファンタジー系の物語が大好きなルドヴィークは、長兄の現

実離れた姿に感動していたようだったが、すぐにその膝の上にちょこんと乗せられている存在に目を奪われ、頬を赤らめ口をぱくぱく声もでない様子だった。

そんな弟をしり目に、クロヴィスは冷静な目で兄とその奥方を眺め、それからあまり機嫌のよろしくないらしいヴィオラントに代わって質問に答えた董をまじまじと観察した。

「それで、今宵の義姉上様の装いは、一体何なんですか？」

「魔女だよ。きゃわゆいでしょ？」

「なるほど、魔女とは 魔性の化身たる貴女に、ぴったりですね」「クロちゃんもよくお似合いよ。黒司祭様」

クロヴィスの今宵の装いは、黒を基調に厳かで不可侵な紋様が刻まれた、司祭服である。

神に仕える清らかな聖職者のはずなのに、何だろうか、この滲み出るような闇の気配は。

「腹の中真っ黒な司祭さんね。賄賂いっぱい貰ってそう！ 変な宗教団体つくりそう！」

と、魔女っ子に遠慮ない感想を頂いたクロヴィスだが、全く機嫌を損ねた様子もなく「ふふふ」と黒く笑ってみせた。

「そんなことより、貴女は斬新なドレスですね」

「みつ、短過ぎるだろうっ！ 何だ、その格好はっ！」

董の格好を、ちらりと流し見て面白そうに言ったクロヴィスに、不機嫌そうな声を重ねたのは、まだ盛大に頬を赤らめたままのルドヴィークだ。

弱冠18歳の若き皇帝陛下は、今宵は左目を黒い眼帯で隠した海

賊の装い。

自らの瞳の色を濃くしたような藍のロングコートには金の飾りが映え、豪華なベストに襟元をたつぷりのフリルで飾ったブラウス。黒い下履きの裾は膝丈までの厳ついブーツに突っ込まれ、見事な金髪を流した頭にはドクロマークを抜いた大きな黒いキャプテンハット。

先日、董が実家から取り寄せ進呈したファンタジー小説に登場する、キャプテンパイレーツを忠実に再現した衣装である。

海にはあまり馴染みのないグラディアトリア人の皇帝が、今一番興味があるのは、船あるいは船乗りであると知っている者は、決して少なくはない。

董は、気怠気に椅子に腰掛け血のように真っ赤なワインを飲んでいた、ヴァンパイア王の膝からぴょこんと飛び降り、まだ少年っぽさが抜けきらない一番歳の近い義弟の傍に駆け寄った。

「ルド！ いいじゃない！」

「えっ ？」

「すごい似合ってるよ！ カッコいい！」

「そっ そうか？」

長兄の妻となった董に、今更横恋慕するのも不毛だと自覚しながらも、まだその恋心を完全に思い出し昇華できていないルドヴィークが、無邪気に間近で掛けられた彼女の賞賛を喜ばないわけがない。嬉しさを隠し切れず顔を綻ばせた彼に、にこりと微笑んで見せるのは全く残酷で罪深い魔女であると、傍らでクロヴィスが天を仰いだとも知らずに、董は今度は後からやってきたシュタイアー家の二人の兄に顔を輝かせた。

「わあっ！ ディーク兄様、なにそれ、どうなってるの!？」

まず董の目に止まったのは、服装こそは白のスーツに暗色のシャツと貴族らしい正装であるが、その背には大きな黒い翼を二本生やした、シュタイアー家の次男ディクレスだ。

「やあ、僕のお姫様。君は今宵もまた、なんて可愛いらしいんだろ
う」

父公爵に性格も容姿も一番そっくりだと自他共に認める彼は、甘いマスクでにつこりとお気に入り義妹に微笑みかけた。

彼の今宵の装いは、堕天使だそうだ。

背後に回って、良く出来ている作り物の黒い翼に感心していた董は、次に長男カーティスに目を向ける。

そして、あまり浮かない顔の彼の周りをぐるりと回り、正面に戻ってはつんと口を尖らせた。

「カーティス兄様、普通に制服じゃんつ。仮装はどうしたの、仮装はっ！」

「人には、得手不得手というものがあつて」

「何、言い訳がましいこと言ってるの、兄上。だから大人しく言う通り、僕と双児天使やつときゃよかったのに」

「」

真面目の塊のようなカーティスには、仮装での参加は荷が重過ぎたようで、一応顔には黒い仮面をつけてはいるが、身体を包むのは彼の正装とも言える騎士服だ。

普通の夜会であれば、世の貴婦人たちは挙って頬を赤らめ、熱い溜息を吐きそうな逸品であるが、仮装が条件のパーティにおいて、手厳しい義妹がそれしきのことです許してくれるはずもない。

ふんと怒って頬を膨らませた最高にキュートな魔女に、カーティスが居たたまれなくなった頃、しかし何故か突然相手の表情が一変

する。

弟デイクレス曰く、善からぬ企みに塗れた笑顔で、董はおののく義兄に「でも、大丈夫」と微笑みかけた。

「こんなこともあるうかと、董はちゃあんと用意しておきました」

「じゃあん！」と彼女が懷から取り出したのは、二種類の黒い物体。

ぴんと立った黒い猫耳付きカチューシャと、腰に回して結べるように紐が付いた、黒い尻尾。

「

」

魔女の使いは黒い猫。

ウィッチ董にも、でかくて威つい黒猫の下僕が誕生したようだ。

「ーーーースミレ」

それまで、黙って眺めていた男が、遂に口を開いた。

黒い仮面と騎士服のカーティスに、猫耳と尻尾をくっ付けて盛り上がったいた一同を、そのたった一言で黙らせた夜の王は、気怠げに椅子に深く身体を預けたまま生き血のようなワインを含み、それから己の声に反応して振り返った小悪魔、いや魔女に視線を向けた。そうして、黒い上質のズボンに覆われた己の膝をぽんと叩いて「

ここへ」と呟くと、可愛らしい魔女は首を傾げるようにして、魅惑的に微笑んだ。

「はい、ご主人様」

「――ごっ　!?」

董の背後で、思わず大きな声を出してしまった口を自分の両手で塞いだのは、ルドヴィークだった。

可哀想にその後の言葉が続かないらしく、またもや酸欠の池の鯉のように口をぱくぱくさせている。

彼の隣で兄クロヴィスが「まあた　あの二人は、何して遊んでるんでしょうね」と、呆れた様子で呟いた。

ふわふわのスカートを揺らして董がヴィオラントの元に駆け寄ると、彼は再び妻を膝の上に抱き上げて、眩しい程に白い腿をさり気なく己のマントで隠す。

その様子をシュタイアー公爵が微笑ましく、だが顔にはにやにや笑いを貼付けて見守っていることに気付いてはいたが、妻の事に関しては誰かに遠慮する事も憚ることもないヴィオラントは、気にせずトンガリ帽子からはみ出した愛しい黒髪の中に鼻先を突っ込んだ。

屋敷を会場として提供し、董と共に主催者の欄に名を連ねたシュタイアー公爵ヒルディベルは、養女の当初の提案通り黒いローブに身を包んだ黒魔術師。

シュタイアー公爵夫人イメリアも、夫に合わせたのか光沢の美しい細身の黒いドレスを着て、妖しい魔女に扮している。

董も合わせて、義理の親子は仲良く魔法使い一家になった。

長男カーティスは、不本意ながら魔女の眷属にされてしまい、ひとり畑違いの墮天使ディクレスは、「僕だけ仲間はずれだね」と笑った。

レイスウエイク家の面々より先に到着していた皇太后エリザベスは、生きとし生けるものの命を預かる氷の女王。

その目に似せた薄青と雪のような白を基調に、麗しくも何処か冷たい雰囲気、彼女の美貌によく似合う。

その娘であり、ヴィオラントの下の妹ミリアニスも、母と一緒に馬車でシュタイアー家に先乗りして、弟クロヴィス扮する黒司祭とは対照的な、清らかなシスターの装いに着替えていた。

繊細な刺繍が散りばめられた白い修道服は、僅かに膨らみ始めた下腹を締め付けないように、すくと足首まで緩やかだ。

そして、ミリアニスの夫であり、イメリアの甥でもあるオルセオロ公爵ジョルトは、黒に金赤の装飾が入った軍服風コスチュームで、頭には大きなヤギの角のようなものを生やしている。

董がそれはどうしたのかと尋ねると、ジュールは「ちょうど、角切りの季節だからね」と微笑み、本物の獣の角だと判明した。

悪魔に扮したらしい彼が、柔らかい笑みを浮かべて寄り添うのが、身重の美しいシスターであるとは、それだけで妖しく背徳的だ。

今宵の会場となったのは、以前董お披露目のための夜会に使用された大広間ではなく、もう少しこじんまりとした、本当に親しい客人を迎えるためのプライベートスペースである。

そして、天井から釣り下がっている豪華なシャンデリアは今ほ灯りを奪われ、代わりに部屋中にたくさん並べられたかぼちゃランタンが辺りを照らしている。

それは、半月前からレイスウエイク家並びにシュタイアー家の人

々がせつせと拵えた、ジャックオーランタンの一群だった。

今年はお化けかぼちゃが豊作で、レイスウェイク家の庭師ポム爺さんの管理する畑でも、余る程に収穫出来た。

董の世界のお化けかぼちゃは食用には向いていないが、こちらの物は普通のかぼちゃと変わらず美味で、ランタン用にくり抜いた中身はきちんと人々の胃袋の中に消費された。

董もいろいろ料理やお菓子を作ったが、中でも受けがよかったのが茶巾だ。

柔らかく茹でて潰したかぼちゃに、ミルクとバターと砂糖を加え、茶巾に絞って冷やしたシンプルなお菓子は、老若男女全てに愛された。

最初の日に飾り切りナイフで指を傷付け、ヴィオラントに刃物禁止令を申し渡された董だったが、やはり指を銜えて見ているだけには性に合わず、何度か夫の目を盗んでランタン製作に参加しては、結局ばれてお灸を据えられるというのを繰り返し、けれど最後には根負けしたらしい彼に、頼むから自分が一緒に時だけにしてくれと懇願される始末。

何でも器用にやってのけるヴィオラントにも手伝わせて出来た、手作りジャックオーランタンの大群は、圧巻であった。

ランタンに入れられたろうそくの炎は、その器の色を克明に反射して、部屋の中は幻想的なオレンジ色に包まれていた。

ジャックオーランタンの他にも、幾つかのオーナメントは手作りされて、ハロウィンの雰囲気盛り上げるために一役買っている。

とは言っても、ハロウィンという風習自体がこの世界にはなく、唯一の経験者である董は、日本人お得意の脚色済みイベントしか体験したことがないので、あくまで彼女のイメージのみに頼るといいう危うさだが、今宵の客人の中にそれに文句を言うような者はいないだろう。

そうして、董以外の参加者全員が、実は血の繋がりがあるというアットホームなパーティには、主催者である董からとあるイベントが用意されていた。

「肝試し？」

各々料理に舌鼓を打ち、良い感じにアルコールも入って、場が盛り上がってきたのを見計らい発表されたのは、シュタイアー公爵邸を舞台とした“大肝試し大会”である。

二人一組をくじでランダムに決め、それぞれ別々のアイテムを持って帰ってくるというもので、スタートは玄関、ゴールは今居るパーティー会場。

この後屋敷中の灯りが消され、挑戦者は提灯のように棒に吊したジャクオーランタンの灯りだけを手がかりに進む。

途中、董の指示のもと設置された罠が、彼らを待ち受けているのだ。

「地図を渡すから、隅々まで見て書かれたルートをちゃんと通ってね。それから、各ペアごとに指定されたアイテムを一個、持ち帰って下さい」

妊婦のミリアニスは、大事をとって今回は不参加だ。

残念そうな彼女には、ゴール地点であるパーティー会場に残ってもらい、帰ってきた者達が条件をクリアできているかどうかの判定を任せることにした。

ミリアニスの傍にシュタイアー家の侍女頭を残し、一行は董の先導でスタート地点である玄関にまでやって来た。

そして、ペアを決める為のくじ引きであるが、主催者である董と肝試しのセッティングの指揮に協力したシュタイアー公爵夫人イメリアはスタッフとして除外された。

全く知らされていなかったらしいシュタイアー公爵は、「父を除け者にするなんて、ひどいっ」と盛大にいじけた。

「え〜と、ダディは皇太后様と、ジヨル兄とカーティス兄様、クロちゃんとディーク兄様、それから、ヴィーはルドとね」

それぞれが引いたくじの、組み合わせを発表した董は、次いでそれぞれに一枚ずつ地図を渡した。

それをかさかさと開いて覗き込んだクロヴィスが、おや？と声を上げる。

「これは、スマレが書いたのですか？ 文字、上達しましたねえ」「でしょ！」

「はい。ミミズの這った跡レベルから、幼児レベルにまで」
「」

董は、実はアイテムとして持っていた魔法の箒の柄の先で、可愛くない義弟の鳩尾をぶすりと突いた。

最初の生け贄は、クロヴィス・ディクレス組に決定である。

「クロヴィスは、ああ言いながらも褒めているのだ。そなた、本当に文字が上達したな」

ヴィオラントの上の弟クロヴィスは、自分にも他人にも厳しい男で、滅多に誰かを褒めることはない。

そんな彼が、照れ隠しに憎まれ口を叩きながらも褒めたとおり、確かに董の書いた文字は驚く程上達していた。

彼女手製の地図を覗き込んだヴィオラントが改めて褒めると、とびきり可愛い魔女に扮した彼の妻は、ふにゃんと愛らしく相好を崩した。

董は、見た目をどれだけ褒められようが愛想を返さないのに、今のように自分が頑張って努力した成果を褒められると、とても嬉しそうに顔をする。

それがまた可愛くてならず、ヴィオラントが手を伸ばして柔らかな頬を撫でてやると、「えへへ、ご主人様」と芝居がかって照れを誤魔化し、そんな董に何故かルドヴィークが頬を赤らめた。

そうして、まずは宰相クロヴィスと騎士団第二隊長ディクレスのペアが出発した。

彼らの地図には、スタートからそう遠くない位置に髑髏のイラストと、それについての注意書きが添えられていた。

髑髏の形をした小物入れを、彼らはゴールへ持ち帰らなければならないらしい。

「おお、スミレ。絵の方も、上達したじゃないですか」

「それは、マミイが描いてくれたんだよお」

「そうですか」

残念ながら、絵心の向上は諦めた感がある董にそれ以上何も言わ

ず、クロヴィスはデイクレスを伴いさつさと最初の扉を開けて入っていた。

続いて、身重の妻ミリアニスをゴール地点に待たせている、騎士団長にしてオルセオロ公爵ジョルトを、董は送り出した。

くじで決まった彼のパートナーは、部下であり従弟でもある騎士団第一隊長カーティスだ。

彼らの地図には、ジャックオーランタンの絵が描いてあり、目をハートの形にくり抜いたお化けかぼちゃの小物入れと、説明がなされていた。

大貴族であるシュタイアー公爵の屋敷は広大で、それを利用して董とイメリア夫人はルートを二つ作つたらしい。

別々のルートを指定された、宰相・第二隊長ペアと騎士団長・第一隊長ペアが発し、残された二組は彼らのゴールを待つてからのスタートとなる。

スタート地点は玄関とはいえ、貴人を迎えるにあたってきちんとテーブルにお茶の用意もなされ、この屋敷の年老いた執事が順番を待つ客人達をそつなく接待した。

「スマレ、何処へ行く？」

先発組が発すると、董はスタート地点をイメリア夫人に任せて、その場を離れようとした。

もちろん、彼女から注意を反らさないヴィオラントが気付かないはずがなく、声を掛けられた董はふわふわのスカート揺らせてくると振り返り、そして悪戯っぽく微笑んでみせた。

「私、現場監督だから。いろいろ見届けなくっちゃ」

「ふむ」

「ヴィーも皆も、頑張つてね。ゴールで待つてまーす」

そう言うつと、董は先の二組が入ったのはまた違った扉を開き、するりと姿を消した。

どうやら裏ルートを使って、こつそり挑戦者達の様子を観察するつもりらしい。

大国の事実上トップクラスの面々を集め、それを掌の上で弄んで楽しむ少女に、ヴィオラントは我妻ながら、その剛胆さに感服する思いだった。

彼は小さく一つ溜息を吐き、ワインの微かな酩酊感を払拭するよう、水を一杯飲むと、穏和な笑みを浮かべて佇んでいるシユタイアー公爵夫人に向き直る。

「イメリア様、その籠の中身を是非頂きたい」

彼女にだけ聞こえるような小さな声で頼むと、妖艶な魔女に扮した公爵夫人は「あら」と微笑み、さり気なさを装って彼の傍に寄つて来た。

「さすがは、大公閣下。お気付きですわね」

イメリアは、玄関に来てからずっと手に籠を下げていた。

上には、彼女が好きそうな花柄の可愛らしい布が掛けられていて、中身は見えない。

不自然な感じは全くしなかったので誰も気に留めなかったが、ヴィオラントに応えて夫人がそつと上掛けをずらすと、籠の中には色とりどりの紙に包まれたキャンディがびっしり詰まっていた。

ヴィオラントが夫人に目礼して、それらを掴んでマントの内側のポケットに詰めていると、内緒話に気付いた弟ルドヴィークが、何

事かと訝し気に寄って来た。

「ルドヴィーク、そなたも詰められるだけ詰めておけ」

「え？ そんなに菓子を持って、どうする気ですか？」

「スミレは、“地図を隅々まで見て”と言っただろう。その通りにすれば分かる」

「？」

長兄の言葉に首を傾げながらも、ポケットというポケットにキャンディを詰めてから、ルドヴィークがもう一度宛てがわれた地図をよく見てみると

「――あつ」

「気付いたか」

「はい」

地図の下の端に、ものすごく小さな、ものすごく薄い字で、こう書かれてあった。

『トリック・オア・トリート』お菓子くれなきゃイタズラしちゃうぞ』

「わざわざ書いてあるということは、そう言われる可能性があるということだ」

「なるほど。言われて、菓子を持っていないと、何か悪戯をされるわけですね？」

「そういうことだな」

「さすが兄上　こんな文字、よく気付きましたね」

「あれからのメッセージを、私が一つでも見逃すと思うか？」

「
いいえ　」

何だかやつぱり、恋しい少女の事に関しても、この兄には到底敵わないとルドヴィークは思った。

その後、シュタイアー公爵が他に気を取られている間に、ヴィオラントはこっそり皇太后エリザベスにもキャンディを握らせた。

成人した弟達や、浮かれた父公爵が董の悪戯の餌食になるのはいいところに構わないが、敬愛する義母は守って差し上げても、妻は文句は言わないだろう。

皇太后が、ペアである公爵にも教えればそれでもいいと思っていたヴィオラントだったが、彼女は事情を聞くとにやりと面白そうに笑い、さっさとキャンディを懷に隠してしまった。

彼女も、実兄であるシュタイアー公爵が悪戯されるのを、助ける気はないらしい。

全てを傍観していたイメリア夫人は、それはそれは楽しそうにっこりと微笑んだ。

間もなくして、先攻の二組がゴールをしたとの知らせが届く。
いよいよ、残りの二組が出発する時が来た。

薦姫の余興 3

シュタイアー公爵と皇太后兄妹の地図には、棒が付いた星の絵が描かれていた。

描いた本人であるイメリア夫人に、これは何かと尋ねると、董曰く魔女の杖・スターワンドであると言う。

これも柄の部分に物が入られるようになっていて、見れば分かれると夫人はにつこり微笑んだ。

一方、ヴィオラントとルドヴィークの地図には、黒い蝙蝠の絵が描かれており、それも小物を入れられるようになっていたらしい。

各々の地図を確認した後発組は、では健闘を祈ると冗談を交わし、それぞれ指定された扉を開いて中に入って行った。

イメリア夫人はそれを見送ると、共に控えていた老執事に声を掛け、後の片付けを侍女に任せて、裏道からゴールの部屋へと移動することにした。

「うん。我が屋敷ながら、こう心許ない灯りだけで歩く、なかなか新鮮なものだねえ」

「暢気な事おっしゃってないで、しっかりエスコートして下さいませ。お兄様」

「うん、任せておきなさい」

奇しくも、偶然ペアになったシュタイアー公爵と皇太后エリザベ

スにとつては、この屋敷は生まれ育った馴染みの深いものである。

思えば、兄妹二人きりで寄り添って歩く事など、もう何十年振りのことであろうか。

兄は、自分が不甲斐ないばかりに、愛する女性だけでなくこの妹にも大層辛い思いをさせてしまったことを、一生後悔し続けるだろう。

けれど、心優しい妹は兄を許し全てを許し、国母の名に恥じぬ立派な女性に成長した。

エリザベスは、シュタイアー公爵家にとつても、兄ヒルディベルにとつても誇りである。

「しかし、スマレは本当に面白い子だね。あの子が来てから、退屈しないねえ」

「ええ、本当に。私たちも、いい大人があんな小さな子に振り回されて、周りから見ればさぞおかしいのでしょうけれど、でも全然嫌な気分にならないのですもの」

「生まれ持った才能というか、いつそ魔術だね。敵に回すと、一番厄介そうな相手だよ」

「スマレには、私が先に目を付けておりましたのに、お兄様ったら横から手を出して　ずるいですわ」

「うう　あれはヴィオラントの方からさあ　。根に持ってるんだね、妹よ」

「一生お恨みますわ、お兄様」

「おおう」と大袈裟に天を仰いだシュタイアー公爵の目に、ちょうどその時、地図上の絵を彷彿とさせる物体が映った。

かばちやランタンで照らして良く見てみると、それは彼の掌程ある大きな青い星の下部に棒が突き刺さっていて、透明な柄の部分は中が空洞になり、何かがぎっしりと詰まっている。

「おお、これかな？　これをゴールに持っていけばいいのか」

壁に掛けられた額縁の隙間に、ぶすりと無造作に刺さっていたそれを、シュタイアー公爵が手に取った瞬間、すぐ先の曲がり角から何やら小さな影がたくさん飛び出してきた。

そして、驚いて咄嗟に妹エリザベスを背に庇った公爵に向い、甲高い声が一斉にこう告げた。

「トリック・オア・トリートッ！！」

「なるほど」

一方、同じ頃。

目的のアイテムである、“ふわふわフェイクファーの蝙蝠バッグ（キャンディ入り）”を、難なく確保したヴィオラントとルドヴィークは、別ルートの二人と同じように、小さな者達による襲撃を受けていた。

しかし、こちらは予め忍ばせていたキャンディを彼らに配り、無事悪戯を回避することに成功したのだ。

高貴な身分の男二人に群がりキャンディを強請るのは、目鼻口の部分に穴を開けた白い布を被ったり、口紅で耳まで大きな口を描いたり、董がカーティスに与えたような獣の耳や尻尾を付けたりと、それぞれユーモア溢れる仮装を施した幼い集団だ。

おそらく、シュタイアー家に仕える使用人の子供達だろう。

如何に今夜は無礼講だ存分に悪戯しても宜しいと言われようと、

我が国の皇帝や敬愛する先帝閣下をはじめ、高貴な身分の方々に對して、大それた真似を大人の使用人に請うのは酷な事だ。

そこで思案した主催者、もとい首謀者董は、まだまだ畏れを知らない小さな子供達に協力を仰いだのだ。

董はこの半月の間、実家となつたシュタイアー家に何度も足を運び、同伴したヴィオラントが陽気な実父に絡まれている隙に、子供達を集めて打ち合わせをしていたらしい。

まず、それぞれ仮装したい格好を決めさせて、イメリア夫人の協力のもと衣装を揃え、お菓子を貰えなかつた時の悪戯についても意見を募つた。

そうして、ヴィオラントとルドヴィークにはペタペタの刑――水で練つた小麦粉をペタペタ塗り付けられて、全身子供の白い手形だらけにされる刑――が用意されていたのだが、残念ながらそれが実行されることはなかつた。

色とりどりのキャンディをたくさん貰つた子供達は大喜びで、もう大きな男達など興味はないようだ。

無表情閣下の「寝る前に、きちんと歯を磨きなさい」との言葉に、「は――い！」と素直な返事を返して、小さなお化け達は親が待つてゐるらしい扉にぞろぞろと姿を消した。

「やれやれ、兄上のおかげで悪戯されずに済みましたね」

「ふむ、実に愛らしいお化け達だったな。あれらの頭がスミレだと思つと、何とも微笑ましいではないか」

「ぶつ、確かに」

小さなお化け達を集めて、真剣な顔で相談する可愛い魔女つ子を思い浮かべて、綺麗な姿のまま罫をクリアした男達は頬を緩めた。後は、特に指示がないので地図通りのルートを進ればゴールだろう。

途中、ホラーな飾りや大きな音を立てる仕掛けが彼らを待ち受けていたが、さすがに大国の皇族たるや、そんなものを怖がる程が弱く生きてきてはいないので、双方涼しい顔をして見事にスルーである。

特にルドヴィークにしてみれば、長兄と一緒にいるというのに、怖いものなどあるはずがない。

否、彼以上に怖いものなどありはしない、が正しい。

「兄上には、怖いものなんてあるのですか？」

「もちろん、ある」

「えっ？ あったんですか？」

「“あつた”というか、“できた”というのが正しいな」

「」

「どうした、ルドヴィーク。それが何なのか、聞かないのか？」

聞かなくても、ルドヴィークにはすぐにそれが何であるか分かった。

この無敵の長兄が恐れるもの。

それは、ルドヴィーク自身の心をも甘く揺さぶり続ける存在。

“彼女”の他に、一体何があるつか。

「聞きません。どうせ、惚気るんでしょう」

「良く分かっているではないか。賢いな、ルドヴィーク」

「兄上は、最近意地悪をなさるようになった！」

「私は、そなたの背を押しているつもりなのだな」

ルドヴィークが冷静な皇帝の仮面を脱ぎ捨て、少年らしい悔しさを滲ませた目でヴィオラントを睨むと、長兄は苦笑するように目を細めて青い末弟を見下ろした。

慈しんで見守り、皇帝にまで押し上げた一番下の弟が、己の妻を未だに諦め切れていないのは知っている。

ヴィオラントは、彼が成人した今でも末弟のことは可愛いし、その望みなら大抵のことなら叶えてやろうと思うのだが、妻のことに關しては微かにでも譲るつもりはない。

もちろん、そんなことはルドヴィークとて承知の上であるし、長兄から少女を奪おうとも、ましてや奪えるとも思っていないので、今更彼ら夫婦に茶々を入れるつもりは毛頭ないのだが、つつい恋しさを隠し切れずに小さな姿を目で追ってしまうのをやめられない。

「正妃を早く決めると、だいぶ大臣達に責付かれているそうではないか」

「まだ、妃などいらぬです」

「それに関しては、私も偉そうな事は言えないが、義母上をあまり心配させるな」

「はっ、母上はっ！ 面白がつてるだけで、心配なんてしてらっしゃいませんっ！」

ルドヴィークの実母である皇太后エリザベスは、ようやく一番上の息子であるヴィオラントが董という伴侶を得、双児の娘アマリアスとミリアニスが懐妊すると、今度はいまだ独身を貫く下の息子達に矛先を向けて来た。

要領のいいクロヴィスはいつも上手く躲しているようだが、ルドヴィークは妃の話を持ち出される度に、つい董の顔を思い浮かべては必要以上に動揺してしまう。

「しかも、何故か胸元豊かな女性ばかり、いやに勧められる。本気

で推しているとは思えないっ！」

「ほう」

「胸なんか大きくても小さくても関係ないと、何度言っても聞いて下さらない。例え小さくても、私は」

「……ルドヴィーク」

例え小さくても、私は構わない

そう続けようとしたルドヴィークが、小さいの基準にしたさやかな胸の持ち主を見透かしたらしいヴィオラントは、冷たい目をして背後の弟を振り返る。

その眼差しにはとなったルドヴィークは、己の無礼に気付き頬を赤らめ、そうしてひどく情けない気分になった。

「例え想像上であろうと、あれの身体を話題にされるのは不愉快だ」

「大変失礼を 致しました」

「義母上も冗談が過ぎるな。これでは、余計にそなたが出会いを敬遠してしまう。後で一言申し上げておこう」

「何だか、居たたまれないので、もういいです」

消沈した様子でふらふらと廊下を進んで行く末弟を、さすがに可哀想に思ったらしいヴィオラントは、ふっと溜息を吐いて眼差しを改めた。

そして、苦笑を滲ませ、その背に向って待ったを掛ける。

「待て、ルドヴィーク。もう一つ、持ち帰らねばならないものがあるようだ」

「え、何ですか？ 地図には蝙蝠の印しか付いてませんよ？」

長兄の声の調子がいつも通り穏やかに戻っていることに気付き、

ルドヴィークも平静を取り繕って彼を振り返り、手に持っている蝙蝠の小物入れを掲げて見せた。

何があっても兄を敬愛する気持ちは変わらないし、董を想うのはまた違った意味で、ルドヴィークにとってヴィオラントは永遠に想い続ける目標なのだ。

ヴィオラントは立ち止まった弟にランタンを預けると、首を傾げる彼をよそに気配を消して、そっと前方の曲がり角に近付いていた。

この廊下は、地図では真っ直ぐに進むように指定されていて、それに従ってゴールを目指すならば曲がる必要のない角である。

彼は、足音を忍ばせてぎりぎりまで近付くと、訝し気な弟の目の前で暗闇の中にさっと身を滑り込ませた。

次いで曲がり角の向こうから、「んぎゃっ！」という悲鳴が上がる。

ルドヴィークにとっても馴染みのある、先程の子供達とはまた違った類いの高い声だった。

慌ててルドヴィークが曲がり角まで駆け寄り、灯りが落とされて真っ暗なその先をかぼちゃのランタンで照らすと、壮絶に妖しく美しい夜の王に、可憐な魔女が捕われている光景が浮かび上がった。

「……スミレっ？」

「見つかった。こっそり、皆が悪戯されるの見物してたのに」

董は、二つのコースのちょうど真ん中を走るルートを行ったり来たりして、双方の様子を窺っていたらしい。

お化けに扮した子供達に、飛び出すタイミングを指示していたのも彼女だった。

もちろんそれは、小さな子供相手に手も足も出ない大人達の滑稽な様子を、一番近くで見て楽しむためだ。

「それはそれは、さぞ楽しんだことだろう」

「うんっ！　でも、ヴィーとルドはやらなかったんだね。メッセージに気付いたんだ？」

「ああ」

「もしかして、皇太后様にだけ教えた？　皇太后様もマミイのキャンディ持ってたし」

「義母上が悪戯されるのは、さすがに気の毒だったのな。構わなかっただろう？」

「うん、ダディで充分楽しんだからいいよ。それより、気付いたのに他のメンバーには教えないなんて、ヴィー　お主も悪よのう」

「なに、そなたほどではあるまいて」

兄上もスミレも、どっちも黒い

ルドヴィークの知らない悪代官ごっこで締めくくった腹黒夫妻に、純朴な皇帝は頬を引き攣らせる。

そんな彼に気付いた董は、ヴィオラントに抱き上げられて高くなつた位置から手を伸ばし、藍のロングコートを羽織つた海賊王の肩をぼんぼんと叩くと、魅惑的な魔女の顔を作つて口を開いた。

「ルドー！　トリック・オア・トリート！！」

「まだするかっ！？」

思わず叫び返したルドヴィークに、一瞬勝利を確信した董だった

が、彼が半眼になって蝙蝠バッグの中身を掴み、「ほら、やる」と
ぞんざいにキャンディを差し出すと、途端にがっかりした顔になっ
た。

「ちえー、つまんないー」

「うるさい、子供はそれでも舐めている」

「まっ、おねえちゃまに対して何たる口のきき方！」

そこにお座り！

正座しな！

折檻だ、折檻！

と、お怒りの義姉上様を無視して、悩める青少年な皇帝陛下は、
かばちゃランタンを掲げてさっさと先に歩き始めた。

その後ろから、膨れっ面な少女を宥めつつ、心中は愛妻をようや
く我が手に確保してご満悦な先帝閣下が続く。

この道を真っ直ぐ突き当たって、右に曲がればもうすぐゴールの
部屋だという時、三人の前をふと淡い光が横切った。

「

「

」

「二人とも、黙り込んでどうした？」

まず、ヴィオラントとルドヴィークの指定されたルートを先攻し
たのは、クロヴィスとディクレスのペアだ。

彼らは既にゴールを完了しており、だからこそ後攻組が出発でき
たはずだ。

そして、別ルートを通ってくる組は、今彼ら三人がいる場所とは、

ゴールの部屋を挟んで対称になる廊下を通ってくるようになってい
る。

つまり、同時に出発したシュタイア？公爵と皇太后のペアに出会
うとすれば、この先の角を曲がってからしか有り得ないのだ。

董が仕込んだお化け隊のちびっ子達は、既に双方のルートで役目
を終えて、保護者が控える部屋に帰っている。

今宵は、シュタイア家の使用人達全員を、地図にあるコース上
から完全排除しているので、彼らにばったり会うという事も考えら
れない。

董達の前方を横切った光は、ふよふよと宙を舞っていたかと思う
とその場に留まり、まるで彼女達がやってくるのを待ち構えている
ようだった。

薦姫の余興 4

「 ヴィー、何だと思う？ あれ 」

「 ふむ、灯りだな。我々が持っているのと同じようなランタンだろう 」

「 誰が持つてるの？ もう、ヴィー達以外ここ通ってくる人いないはずなのに 」

「 ああ、そうなのか？ 」

「 」

吸血鬼や妖怪の類いを題材にした物語は、この世界には存在しないが、ゴースト所謂幽霊なるものの登場する物語は、少なからず書かれている。

ヴィオラントや現実主義の権化であるクロヴィスなどは、その存在を全く信じてはいないようだが、董やルドヴィークのような夢見るお年頃の青少年は、少なからず信じているし、そういう話題が好きなのだ。

だから、誰もいないはずの真つ暗闇の回廊に、ふよふよと音もなく現れた妖しいランタンを見て、即行ホラーなものと結びつけてしまうのも、若さ故と言ったところか。

董は、ぎゅうとヴィオラントの首筋にしがみついて、彼の銀髪に頬を埋めながらも、怖いもの見たさで片目を開けて廊下の先を窺った。

ルドヴィークも、ごくりと生唾を飲んで黙り込み、心持ちランタンの柄を持つ手に力を入れた。

ヴィオラントは、分かり易く怯える二人に目を眇めると、董を片

手にしっかりと抱き直し、ルドヴィークの手からランタンを奪って漂う灯りの方にスタスタと歩き始めた。

「兄上　　っ!？」

「　　っ!」

焦ったような声を上げて、慌てて付いて来る末弟の気配に苦笑を滲ませつつ、息を飲んで更に密着してきた愛妻の柔らかさにはほくそ笑んだ男は、どんどん先に進んで行く。

そして、体内のろうそくの明かりで発光し宙を漂う、お化けかぼちあの姿がはつきり見える所まで来ると、立ち止まって口を開いた。

「なかなか、遊び心があたりで。――イメリア様」

単身漂っていると思われたお化けランタンには、近くでよくよく見てみると、ちゃんとそれを吊す細い紐と提灯にするには長過ぎる棒が付いていて、その先は薄く開かれた扉の隙間の向こう、シユタイアー公爵夫人の手に繋がっていた。

「あらあ、見つかってしまいましたわねえ。」

「　　なっ!　マミイ!？」

正体を見破られたイメリア夫人は、にこにここと微笑みながら扉を開き、その奥に控えていたらしい老執事が部屋に明かりを点けた。

「ひどい、マミイの裏切り者。」

「いやだわ、スミレさんったら人聞きの悪い。何でも締めが大切ですよ。せっかくの肝試し、お客様を驚かせずに帰してしまうなんて、シュタイアー公爵家の誇りが許しませんわ。」

「でも、ヴィーなんて、全然驚いてないし。」

「まあ、閣下を驚かせるのなんて、スミレさん以外の人間には不可能でしょうけれど。幸い、陛下には効果があったようですね？」

「うつ　　ふ、不本意ながら　　。」

スタート前に董のメッセージに気付き悪戯を回避した現帝と先帝のペアが、子供達の襲撃以外の仕掛けや飾りで肝試しを堪能できるとは思えなかったイメリア夫人は、裏道を通ってゴールの部屋に先回りする途中、彼らに対してささやかな悪戯を思いついたのだろう。年老いた執事も女主人の提案に反対することはなく、途中の物置を物色して長い棒を調達してきた。

董まで一緒にいたのは予定外だったが、全てを把握しているつもりの彼女が企画外の出来事で大いに怯えてくれたために、ヴィオラントはともかくとしてルドヴィークはリアルに肝を試されたようだった。

「　　うふふふふ。」

「　　。」

まさか貴婦人の鑑のような伯母上に悪戯を仕掛けられるとは思わず、年下の少女と一緒にあってときどきしていた自分が情けなくて、ルドヴィークは更に肩を落とす。

ヴィオラントはそんな末弟の肩を、慰めるようにばんばんと叩いた。

ゴールである当初のパーティー会場に戻ると、先に帰り着いた面々がそのままの状態で各々寛いでいた。

「何故、兄上とルドは無傷なのですか？」

そう不満げに漏らしたのは、ヴィオラントとルドヴィークと同じコースを先攻したクロヴィスだった。

彼の綺麗に整えられた金髪の頭には、ド派手なピンクのシルクハットが乗っかっていて、その天辺はパカリと大きく開き、バネ仕掛けの間抜け顔の人形がびよんびよんと揺れている。

「斬新な帽子だな、クロヴィス。」

「いいですよ、兄上。言葉を選んでいただかなくても。ええそうでしょう、似合いますでしょう？ この間抜けな帽子。わざわざ私にと選んでいただいたらしい義姉上様に、お礼を申し上げなくては。」

真つ黒い厳かな司祭服が霞んで見える程、仕掛け帽子はクロヴィスのお固い雰囲気をぶち壊し、見事な道化に仕上げていた。

しかも、目が逝った感じになっている人形の、ぱかりと開いた赤い口の中には何やら二つの文字らしきものが書かれていて、しかしそれはグラディアトリアで使われる文字ではないので本人には読めない。

「幼いお化け達がね、この帽子は間違えずに私に被らせるようにと、

“スミレおねえちゃん”から指示を受けたというのですよ。ということは、上の文字は義姉上様から私へのメッセージと捉えるべきでしょう。一体どういう意味なのか、是非教えていただきたいのですが。ええ、早急にね。”

「いけないわ、クロヴィス君。安易に答えを得られるなんて、世の中甘く見過ぎなんじゃなくって？　どうぞご自分でお調べになつて。

「。」「

恐れを知らない話術で、かの宰相を軽く躲した董を、年若い皇帝陛下は無意識ながら尊敬の眼差しで見つめた。

余談ではあるが、董がこちらの世界の文字を習ったように、ヴィオラントはもちろん何故かクロヴィスまでも、彼女の世界の文字に甚く興味を持っている。

王族兄弟の中でも飛び抜けて優秀で勤勉な彼らは、既に平仮名五十音と簡単な漢字ならば問題なく読み書きできるようになっていた。

『鬼畜』

それが、董がクロヴィスにプレゼントした言葉である。

後日、とある筋から異世界の漢和辞典なるものを入手し、『鬼畜』の意味を知った宰相閣下が、「ふふふふ」と不穏な笑みを浮かべた場に居合わせた皇帝陛下は、その時の彼はここ数年で一二を争う恐ろしさだったと護衛騎士にこぼしたらしい。

クロヴィスとペアだったシュタイアー公爵家の次男ディクレスは、女受けがいいからと長く伸ばした金髪に、フリルの付いた可愛いリボンをたくさん結ばれ、薄い唇には赤い口紅を若干大きめに塗り込めらた。

男の子達がクロヴィスに間抜け帽子を被せている間に、女の子達はディクレスを大きな人形にして遊んだらしい。

そして、彼らが指定された髑髏型の小物入れは、リアルな頭蓋骨の天辺部分が蓋になっていて、ぱかりと開けると中にはぎっしり濃い茶色のミルクキャラメルが詰まっていた。

「脳みそ食べてるみたいで、微妙な気分なんだけどね？」

そう言いながら、にこにこしてその内の一つを口に入れた化粧の濃い墮天使は、なかなか図太い神経をお持ちのようだった。

同じく先攻組として臨んだジョルドとカーティスの騎士コンビも、可愛いお化け達の洗礼を受けた。

悪魔に扮して湾曲した大きな角を頭にくっ付けていたジョルドは、その下に真っ白でもこな、例えるならばトイプードルのカットで整えられた頭のような鬘を被らされていた。

つまりアフロだ。

程よいポリウームの真っ白いアフロから、顔に沿って円を描くように二本の大きな角が伸びている。

その、まるで軍服を着た羊のようなジョルドの格好を目にした途端、ゴールで留守番という退屈な時間を過ごしていた身重の妻ミリアニスは、「痛い、腹が痛い。」と身を振って爆笑し、夫を困らせた。

騎士服に黒い仮面という出立ちに、董によつて黒い猫耳と尻尾を授けられていたカーティスは、ピンクのインクで仮面の左右の頬にそれぞれ三本ずつ髭を描かれ、両手両足には大人の彼にもちょうどいい大きさの猫の手グローブ及びブーツが履かされた。

董はそんな義兄の姿を可愛い可愛いと褒め讃えたが、「おつ、そうか？」と調子に乗る気力は、カーティスには無かった。

彼らが持ち帰ったのは、ジョックオーランタンの形をした小物入れで、通常なら三角形にする目の部分をハートの形にくり抜いた、一見可愛い代物だった。

しかし、頭の摘みを持ち上げて中身を覗き込むと、これまた毒々しい色のキャンディがぎっしり詰まっていた。

そして、残るはシュタイアー公爵と皇太后陛下の兄妹ペアであるが、エリザベスは予め悪戯の可能性をヴィオラントに教えられ、対処法としてキャンディもたっぷり握られていたので無傷であったが、何も知らない兄ヒルディベルは見事に子供達に弄ばれた。

小さなお化け達は、例えば自分の親達が仕える屋敷の主人であろうとも、全く容赦はしなかった。

黒魔術師に扮していた公爵の黒いローブを剥ぎ取ると、代わりにたっぷりのフリルにデコレーションされた、ピンクの可愛いマントを着けさせる。

イメリア夫人作・董専用なそのマントは、丈はもちろん小柄な少女に合わせて作られてあるので、長身の公爵が着ると太腿辺りまでしか無い。

はつきり言ってみつともない格好だが、お気楽な性格の彼がその位で動じるはずもなく、「どうだ、似合うかい？」とちびっ子達に向つて胸を張つてポーズをとるほどの余裕があった。

しかし、それを見た純粹無垢な集団が、「ぜんぜんにあわない！」
「へん〜！」「きもちわるい〜！」と口々に遠慮ない正直な感想を
さえずり出すと、さすがに些か傷付いた様子だった。

「ダディー、きもい。これは、ないわ。」

「うつつ　娘までも　っ！」

彼にそれを着せた張本人であるはずの董にまで、改めて全否定され
て、傷心の公爵は真意の知れない笑みを浮かべる妻の胸で泣き崩れ
た。

ちなみに、今回はヴィオラントのおかげで悪戯を免れた皇太后陛下
には、チョコレート顔面パックの刑が用意されていたが、それは実
行されなくてよかったと、仕掛人の董ですら後程冷静になった時に
は思った。

彼らが持ち帰った魔女の杖は、柄の部分にびっしり丸いチョコレ
ートが詰まっていた。

一個一個が薄っぺらい銀紙に包まれた、田舎の駄菓子屋で量り売り
している感じの、カカオ率が極端に低そうなチープなチョコレート
だが、その庶民臭い味が逆に皇太后陛下の肥えた舌を驚掴みにした
らしく、彼女はしばらくそれにハマることになる。

当初のパーティ会場に全員が揃った頃には、既に夜もたいぶと更け
てしまっていた。

それぞれされた悪戯を歓迎しているわけでもないのに、全員がその
ままの格好で二次会が始まる。

あれだけ不満気だったクロヴィスでさえ、ヘンテコ帽子を今だ頭に

乗つけたままワインに舌鼓を打っている。

それは彼ら参加者全員が、レイスウェイク大公爵夫人の余興に嫌々付き合ったわけではなく、むしろ大いに楽しんだのだという意味表示である。

自分たちでは考えもつかないような突拍子もない言動も、大胆で怖いもの知らずな彼女の全てが新鮮で、酸いも甘いも知り尽くした大人達にはとても愛おしかった。

この夜は、客人達はシュタイアー公爵邸に一泊する予定になっていた。

まずは、身重の妻ミリアニスを気遣って、オルセオロ公爵夫妻が退場した。

明日の朝早く王城に帰る予定のルドヴィークも、姉夫婦に続いて老執事の案内で早々に暇をし、それに倣うように宰相クロヴィスも客室にはけた。

シュタイアー公爵家の二人の息子達も、明日は通常勤務であるからと、皇帝と宰相に続いて自室に引込む。

そうすると、部屋にはホストであるシュタイアー公爵夫妻と皇太后陛下、それからレイスウェイク大公爵夫妻が残った。

一気に平均年齢が高くなった　などと失礼なことを考えながら、酒の飲めない董はシュタイアー家の老執事が用意してくれた軽食を摘んでいた。

他の大人達かというと、それぞれかなりの量のワインを体内に納めているというのに、一向に酔っ払う気配もない。

穏やかで緩やかな時間に身を任せるのが心地良くて、他愛ない彼らの会話に耳を傾けていた董だったが、夜が深まるに連れて彼女の正確な体内時計が就寝を促し始める。

董が隣でふわふと欠伸をしたのを見逃さなかったヴィオラントが、彼女を抱き上げ暇を告げると、それを機に今宵のハロウィンパーティ

イはお開きとなった。

ヴィオラントと董が泊まるのは、今回もまたこの屋敷に堂々と備えられている董の私室だ。

初めてその部屋を訪れた時には、養母イメリアの少女趣味満載な内装に辟易したもののだが、何度か訪れるごとに董は自分好みになり、と備品を弄ってきた。

それでもたまにこつそりと、ぬいぐるみやフリルのボリウムが増えていたりするのだが、当初よりはだいぶと落ち着いて過ごせる部屋にはなっている。

シュタイアー家の廊下は、肝試し大会が終了した後明かりが点けられているが、ハロウインの雰囲気壊さないようにという配慮から、今宵はこちらまでかぼちゃのランタンが使われたようだ。

オレンジの光彩が揺らめく幻想的な回廊を、小さな魔女を抱えた夜の王が闊歩する。

それは、絵描きが見れば筆を握まずにはいられないだろう程に、妖しくも美しい光景であったが、彼らの会話の内容は見た目に反して大概に俗物的だったりする。

「結局、ヴィーを驚かせられなかった、つまんない。」

「驚いたさ。そなたのそのスカートの丈を見た時には。」

銀髪にシルクハットを乗せたヴァンパイア王は、己の僕たる魔女の衣装の丈に、未だに納得がいていないようだった。

今宵のパーティーに参加した男達は、肉親であったり特別親しく既婚者であったことから、何とか彼女がその格好でいることを許したが、

これがもしも不特定多数の目の晒される場ならば、力づくでも参加を阻止したことだろう。

この白い腿の誘惑に勝てる男は居まい。

同じように、彼女が先帝閣下の愛妻と知りながら、手を出す命知らずも居るまいが。

堇は改めて自分の衣装を見下ろし、それから抱き上げられて接近した夫の襟元の、綺麗に整えられたドレープとリボンを撫でた。

そして、何か悪戯を思いついたのか、愛らしいかんばせが小悪魔よろしく魅惑的な笑みに包まれる。

「ん？」と片眉を上げたヴィオラントの耳に、甘い声は何処までも心地よい。

「ご主人様、ご主人様！ トリック・オア・トリートっ！」

「そうきたか。」

いつの間にか到着していた今宵の寝室に、ヴィオラントは堇を抱いたまま滑り込むと、彼女をベッドの上にそつと下ろす。

当初はシーツから枕から何もかもが必要以上にピンクとフリルに侵されていたベッドも、落ちていて休めるまでに改善されていた。

彼は自らの頭からシルクハットを脱ぐと、同じように少女のトンガリ帽子も取払い、どちらもベッド脇の椅子の上に放り投げた。

「しかし、困ったな。私はもう、菓子を持ち合わせてはいないのだよ。」

「ふうん。」

「そなたの悪戯に身を任せる他、道はなさそうだな。」

「へえ。」

ベッドの淵に明かりを背にして佇むのは、上品なテールコートの上

に真っ黒いマントを羽織った、絶対的な夜の支配者。

マントの裏に息づく赤に気付いた者の、命を啜る。

その下僕たる可憐な魔女は、下ろされたベッドの上にぴょんと跳ね上がるようにして立つと、主人と同じ目線になった。

彼女は芝居がかった手つきで恭しく、全く困った様子のない、むしろ今宵で最も楽しそうな色を滲ませている王の両頬を包むと、そつと小鳥のように彼の唇を甘く啄み、

「では、ご主人様。遠慮なく悪戯するから、覚悟してね。」

「お手柔らかに、頼む。」

それから同じ色合いの瞳は見つめ合い、互いに笑みを深めた。

下克上の夜は、静かに更けていく。

ハッピーハロウィン。

薦姫の余興 4（後書き）

『薦姫の余興』 おわり

薦姫の囈1

とんとんと、扉をノックする音が聞こえた。

部屋の主に代わってそれに対応したのは、扉の際に控えていた皇帝陛下の第一騎士ジヨルト・クル・オルセオロ公爵であり、つまりはこの部屋は、当代の皇帝陛下ルドヴィーク・フィア・グラディアトリアの執務室なのである。

最強の騎士とうたわれながらも、誰よりも穏和な顔つきのジヨルトが開いた扉から、お茶の用意を乗せたワゴンを押して入ってきた人物を見て、それまで疲れたような溜息を吐いていた皇帝ルドヴィークは息を飲んだ。

「……………つな!？」

大声を上げそうになった己の口を咄嗟に塞ぎ、これは夢か幻覚かと疑うように、目を見開いてまじまじとその人物を見つめた。

身に付けているのは、何の変哲もない、王城で働く侍女のお仕着せである。

襟と袖口だけ、白い生地に上品なレースの施されたワンピースは、膝下丈の深い紺色。

その上に、フリルをたつぷり使った白いエプロンが重ねられている。

踵の低い履き物も勿論侍女の支給品であり、艶と伸びのある革製の黒い靴は履き易いと評判で、ぼちっと控え目に付いたりボンが可

愛らしい逸品だ。

皇帝付きの侍女らしく、優雅な足取りでワゴンを押して入ってきた彼女の肩の上で、そこに届くか届かないかの長さのふわふわの黒髪が、柔らかに揺れた。

グラディアトリアだけではなく、この大陸においては非常に稀だとされる、黒髪。

それを携えている人物といえば、今ルドヴィークが知っている限りでは、長兄ヴィオラント・オル・レイスウエイク大公爵の奥方、スミレ・ルト・レイスウエイクただ一人であった。

現在、ルドヴィークは皇帝としての客人を迎え、ソファに向かい合って応対の最中である。

彼は、持っていた書類を客人に手渡し気を逸らせると、出来るだけさり気ない雰囲気を使い、少し離れた位置でお茶の用意を始めた侍女に近付いた。

そして、本当は怒鳴りつけたのを必死に抑え、小さな声で口火を切った。

「一体、どういうつもりだ。――スミレっ！」

珍しい黒髪の持ち主とは、やはり長兄の愛妻にしてルドヴィークの義理の姉となった、董そのひとであった。

客人に背中を向けた状態をいい事に、こめかみに怒筋を立てて詰め寄ってきた皇帝を、ふわんと緩やかに曲線を描く黒髪と、その上に乗せたヘッドドレスを揺らせ、正直身悶えしそうな程超絶に愛らしいメイドさんは、首を傾げた。

それから、上品に両の口端を引き上げて笑みを作ると、彼に向けて鈴の鳴るような声で答えた。

「宰相クロヴィス様の命により、本日一日、陛下のお側にお仕えすることになりました」

「はあ？」

一体全体どういうことだ。

訳が分からない。

クロヴィスの差し金だという時点で、もう絶対、碌でもない。

そう思いながら、混乱に豪奢な金髪を掻き回したくなったルドヴィークを、背後から呼ぶ声があった。

「おい、ルド。この値段、わしとしては少々納得しかねる」

けして大声ではないのに、良く響く美声には威厳があり、無視出来ない重厚さがあった。

ルドヴィークは舌打ちしたくなるのを懸命に抑え、長兄を見習って身に付けた冷静さを纏い直し、声の主に向き直った。

皇帝自ら手渡した書類をひらひらと揺らし、皇帝を愛称で呼びつけたその客人は、真っ直ぐな亜麻色の髪を背中に流し、濃い金色の瞳を少々不機嫌に眇めながら、皇帝の執務室のソファに堂々と足を組んで腰掛けている。

フランデース・ロ・パトラージュ

そのひとは、コンラートとは反対の位置でグラディアトリアと隣接する、大国パトラーシユの現皇帝であった。

やはり皇族らしくひどく整った容貌の彼は、ルドヴィークの長兄であり先代皇帝である、ヴィオラントと同一歳。

グラディアトリア・コンラート・パトラーシユの三国は、長年において友好的な関係にあり、それを維持継続する為にも皇族間の交流は盛んで、父皇帝の崩御に伴い二十歳で即位したフランディースも、コンラート王ラウルやその王兄ルータス同様、幼少時代にグラディアトリアに留学経験がある。

グラディアトリアは、三国の真ん中に位置する特性上、両隣国からの人の流れが多く、それがこの国の文化の発展に繋がったともいわれている。

コンラートが農業大国であるのに対し、パトラーシユは埋蔵資源が豊富で、燃料として利用される鉱石や、装飾に重宝される宝石の原石を多く産出する資源国である。

グラディアトリアはというと、農作地にも資源にもそれほど恵まれていない土地柄、逆に各分野における加工技術に秀でる事により、隣国から輸入した原料を他国の真似出来ない製品へと加工し、それをまた輸出するという商業ルートを確立していた。

こいこいと、気安く手招きするフランディースにとっては、新しい隣国皇帝は赤子に近い年齢から知っている相手であり、どこか弟分となめてかかっている部分を感じられる。

それが、正直ルドヴィークには腹立たしく悔しく、少なからず彼に対して苦手意識を感じる要因になっている。

こちらの気も知らないで、侍女に徹してお茶の用意を始めた董に、

まだまだ言いたい事があるのを何とか飲み込んで、ルドヴィークは客人の待つソファに戻らざるを得なくなった。

「どう納得いかないのですか。こちらは祝いも兼ねて無償で差し上げると申し上げたのに、自分からの贈り物としたいからそれでは困ると仰ったのは貴方じゃないですか。仕方なく、原料費のみで見積もりを出したのですよ。これ以上面倒くさい事は仰らないで下さい」

「分かってないな　ルドは。だからお主は、まだ子供だというのだよ」

「はあ、と溜息混じりに吐かれた言葉に、カチンときたルドヴィークは、まだやはり彼の言う通り子供なのだろう。」

しかし、これも国同士の貿易に関わる正式な会談であれば、ルドヴィークとて終始冷静に対処できる自信がある。

だが、今回のやりとりというのは、皇帝同士というより個人の間での話であり、しかも

「そもそも、一体何回目の結婚式を挙げようというのですか、フランは」

「うん？　さあ、数えていないから分からんな。何回目だったかな？」

「五十三回目、ですよ。ああもう、ほんと、オメデトウゴザイマス！」

「何だね、そんな心の籠っていない祝辞はいらぬぞ」

パトラーシュの当代皇帝の女好きは有名で、彼は政治的な意味合い抜きで後宮を充実させており、貴賤に関わらず気に入った女性は次々と召し上げている。

その上、一人一人につき、いちいち盛大な結婚式を挙げるので、目出度さも回をおう毎に激減である。

在位八年の内に、五十回以上の結婚式。

二ヶ月に一回以上の割合で執り行われる皇帝の嫁取りに、パトラ―シユの国民は既に慣れっこになっていて、最近では市井が特にお祭りムードになることもなくなっているという噂だ。

そして、来月挙式を予定しているフランディースの五十三人目の花嫁に、彼がグラディアトリアの技術で作られた豪華な首飾りを贈りたいと言ってきたのだ。

ルドヴィークの方は、個人的な祝いとして無償で譲ると主張したのだが、フランディースがどうしても自分からの贈り物にしたいと言ひ張るので、仕方なしに気持ち程度の値段を乗せた見積書を渡したのだ。

「値段をまけさせた物など贈られて、女が満足するとも思っているのか？ 政治的な気遣いも駆け引きも余計であるから、個人的にお主に頼んでいるのではないか。正規の値で請求してくれ」

「はいはい」

「何だね、そのおざなりな返事は。“はい”は一回と、お主の兄上は教育しなかったのか？」

「兄上は、関係ないです」

フランディースが、根は悪い男でないのは分かっている。

ルドヴィークも、幼い頃勉学の合間に遊んでくれた、良き兄貴分としての彼の思い出も無くはない。

女性に対しては、移り気で不誠実な面も無いとは言えないが、パトラ―シユの後宮に入った女が不幸になったという話は今の所聞かないので、それなりに上手くやっているのだろう。

ルドヴィークがもう何回目になるのか分からない溜息を吐いた時、

「失礼します」と小さく声を掛けて、相変わらず侍女に扮した董がテーブルにカップを置いた。

香しい紅茶の香りに誘われ、ルドヴィークは直ぐさまそれに手を伸ばした。

大陸一上手い紅茶を飲ませると評判の、老舗茶葉屋フリードに弟子入りしたと聞く手腕はなかなかで、口に含んだ途端若き皇帝の頬は微かに緩んだ。

ところが、目の前の客人の吐き出した次の言葉に、もう少しで紅茶を盛大に嘔くところだった。

「兄上といえば、ヴィオラントが妻を娶ったそうではないか」

「ーーーーっ　　！！」

その“ヴィオラントの妻”は、紅茶のおかわりを申し受ける為に、脇に立つて控えている。

「我が国の諜報部員が話を仕入れて来た時は、何の冗談かと思ったものだが、本当の事だったのだな。そもそも、彼もみずくさい。知らせてくれれば、何を置いても祝いに馳せ参じたものを」

「　　諜報、ねえ　　。兄上は、政治の表舞台と関わるのを、極力避けていらっしやるので」

「わし個人、友として参じたかったというのだ。まったく、友達甲斐のない男だよ」

物憂気な溜息を吐いて瞳を伏せたフランデースは、優美な指を伸ばしてテーブルの上のカップを掴み、生粋の皇族らしく優雅な仕草でそれに口を近づけた。

そして、まずは香りを吟味し「おや？」というように瞳を開き、

それから紅茶を一口含んで飲み込むと、今初めてその存在に気付いたとしてもいうように、お茶を入れた侍女に視線を向けた。

そして、その濃い金色の瞳にきらりと光が溢れたのを目の当たりにして、ルドヴィークは物凄く嫌な予感がした。

「?????お主。そこな侍女、こちらに参れ」

—————やっぱりっ！

ルドヴィークは頭を抱えなくなった。

隣国パトラッシュの皇帝フランディースは、先にも述べた通り、女性という生き物が大好きだ。

年寄り子供に関わらず、女性には分け隔てなく優しく紳士な、最高のフェミニストでもある。

それでも妻にしようという相手は、やはり自身の射程範囲内の年齢で、しかも美しい者を好むのは人間の性であろう。

つまりは、多少年齢より幼く見えるとはいえ、件の侍女、いや董が、パトラッシュの目に留まらないわけがないのだ。

身内の鼻屑目を差し置いても、彼女の秀でた魅力を無視できる男がいるとは思えない。

精巧なドールのような壮絶な可憐さで、老若男女を虜にする魔性のオーラが、侍女のお仕着せごときで隠せるはずがあるつか。

加えて、この大陸では珍しい黒髪と、稀なるアメジストの輝きを持つ瞳が、彼女の印象を強烈に脳に焼き付けてくる。

「お呼びでしょうか」

高慢な態度で呼びつけたフランディースに、普段の彼女ならばツンとそっぽを向いて「やなこった」と宣いそんなものを、いまだ侍女を演じ続ける董は、従順にソファの側までやってきた。

儂げな甘い声は、侍女の仕事にまだ不慣れな様子を醸し出し、不安そうに揺れる瞳は、演技であると分かり切っている、大いに庇護欲をそそられる。

彼女の本性を知っているルドヴィークでさえそうなのだから、董を見たまんまの可憐であどけない少女だと思っているフランディースなど、ひとたまりも無い。

「　　なんと、愛らしい。ルドヴィーク、これはお主の侍女か」

「　　え？　　え　　ええ、そうです」

傍らに立つて小首を傾げた董を、感嘆の溜息と共に引き寄せたフランディースに尋ねられ、どう答えたものかと戸惑うルドヴィークに、董本人が領けというように視線を寄越して来たので、彼は不承不承ながらもそれに従った。

「黒髪とは珍しい。何処の国の出だ？　皇帝付きの侍女にしては少々幼いようだが、それなりの後見があると見える」

「　　え　　はあまあ、その辺の事情は、ご説明致しかねます」

後見といえば、その娘の後ろには、レイスウェイク大公閣下だとかシユタイアー公爵だとか、グラディアトリアの超大物貴族が濃密にくっ付いてる。

ルドヴィークとしては、そう声を大にして伝え、フランディース

が馴れ馴れしく握り締めている董の手を奪還したいのはやまやまだが、彼女に侍女の真似事をさせている首謀者は、当代の宰相リュネブルク公爵であるという。

彼の思惑が分らない以上、董の身分をここで明かしてしまつてよいものかどうか、判断しかねるのが現状だつた。

しかし、そもそもフランディースの方は、始めから董の身分に頓着するつもりはないようで、答えを濁すルドヴィークにそれ以上問い質す事も無く、それよりも側に引き寄せたまだあどけなさを残す少女を観察するのに忙しいらしい。

彼の美貌に至近距離で見詰められれば、どんな美しい女も頬を赤らめ瞳を潤ませ、期待に胸を膨らませるものだったが、残念ながら、普段から夫の類い稀なる美貌を見慣れている董は、例外であつた。

鼻先がくっつく程近付いても、少女の頬は元々の愛らしいピンク色から変化することなく、無垢なままの瞳で真っ直ぐにフランディースを見つめ返してくる。

それがまた新鮮で、更に彼の興を誘つた。

「お主、国から出た事はあるか？」

「はい。ご縁があつて、コンラートに伺つたことがございます」

「そうか。コンラートも良い国だがな、我がパトラーシユも素晴らしい所だぞ」

「フラン。どういふつもりだ？」

明らかに董を口説き始めた客人を、ルドヴィークは半眼になって睨みつけた。

「どうもこうも、一目惚れというやつだ。ああ、そうだ、贈り物してくれるというなら、是非この娘を譲ってくれぬか？」

「……っな！？ スミレは物じゃないぞっ！ そんなことできる

かつー！」

「スミレという名か、変わった響きだな。しかし、何とも言えず愛らしい娘だ。侍女にしておくには、惜しい。わが王城の一番よい部屋に迎え入れようではないか」

「ーあなたはっ！ 来月既に新しい花嫁を貰うことが決まっています、その花嫁の為にわざわざこうして隣国まで足を運んできたことをお忘れか。そのついでに違う女を口説いて帰ろうなどと、不義理にも程があるでしょう！」

「不義理なつもりなど、わたしには毛頭ないぞ。妻達のことは平等に愛しておるし、そうでなくば皆を後宮に囲ったりせぬ。 ああ、

男の甲斐性を理解するには、お主はまだ歳が足らぬか」

「子供扱いしないで下さい。とにかく、彼女を連れて帰る事など、絶対にできませんから」

「それは、お主の決める事ではないよ。この娘の身の振り方を決めるのは、この娘自身だろう。それとも、皇帝としての権限でも振りかざすつもりかい？」

「ーーーっ！」

ああ言えばこう言う隣国皇帝の話術に苛立ち、顔を顰めたルドヴィークを見兼ねたように、それまで沈黙を守って従順に侍っていた董が口を開いた。

「ーーーフランデース様」

「何だね。お主は声まで愛らしいな。わしの側で、ずっとさえずつていてはくれぬか？」

愛おし気に目を細めて頬を撫でて来たフランデースに、董は近しい者なら明らかに愛想笑いと気付き表情を貼付けて、真っ直ぐに向き合った。

「身に余る光栄なお話ですが、私はパトラーシュにお伴するわけにはいきません」

「何故だ？ この先、何不自由ない生活を約束する。もちろん、侍女などでは味わえぬ贅沢もさせてやれるぞ？」

「申し訳ございません」

「そなたの親や後見人が煩いというなら、わしが直々に話を付けよう。何も心配することはない、安心してわしの元においで」

「いいえ、フランデース様」

どうあつても首を縦に振らない董に、大いに調子を崩されたらしいフランデースの戸惑った姿は、なかなか滑稽であった。

これまでの人生において、口説いて落ちない女はいなかった彼にとつては、頑に拒む少女は異質な存在であり、到底許容出来るものでもない。

男としてのプライドと意地にかけて、何としても彼女を連れ帰りたいと躍起になった彼が、掴んだ両手に力を入れる前に、董はするりと己の手を取り戻すと、すつと一歩後ろに退いてはそれを腹の前で緩く組んだ。

「申し訳ございません。私は、既に嫁いだ身でございます」

「????何と！ それはまことか、ルドヴィーク」

「本当です」

董が身を引いて作った隙間に、ルドヴィークは素早く我が身を滑り込ませ、彼女を己の背に庇うようにして、驚きに金の瞳を見開くソファの上の客人を冷たく見下ろした。

長兄と彼女が睦合っている光景を前にしても、微かにちくりと痛み胸を誤魔化しつつ見守れる位には落ち着いてきたルドヴィークだったが、兄以外の男が董の身体に気安く触れるのは我慢ならない。

如何に無類の女好きといえど、さすがに人妻と聞いては諦めるしかないだろうという常識的な考えは、しかしその後、パトラージュ皇帝の口から出た言葉に裏切られることとなる。

「心配ない。グラディアトリアの法律でも、離婚は認められている。――そうだな？ ルド」

「なっ ！？」

「もしも、夫君が慰謝料を要求するようなら、わしが代わりに払ってやろう」

「フランっ！ 勝手なことを申されるな！！」

気に入った侍女が既婚であると知って、がっかりと肩を落とすかと思われたパトラージュの皇帝は、逆に獲物を狙う猛禽類のような瞳に危険な光をたたえ、腰掛けていたソファから立ち上がって、彼女を背に隠したグラディアトリアの皇帝にずっと迫った。

「これほどまでに可憐な妻を娶っておいて、それを外で働かせようという夫の気が知れぬ。余程、金に困っていると見える」

「。。」

ええいっ！ その夫君の資産は、皇帝のそれを軽く超える、当国一の大金持ちだっ！！

と、ルドヴィークは叫び出したくなるのを、懸命に我慢した。そういえば、長兄ヴィオラントは、愛妻が侍女の真似事をしていることを知っているのだろうか。

否、そもそも、知っていれば許すはずがないのではないか。ルドヴィークの悪い予感、最近頓によく当たる。

「わしならば、始終側に置いて愛でるものを。他の男に仕えるなど、絶対に許せん」

金の瞳に小さな少女の姿を捕らえ、本気で口説き落とす体制に入ったフランデースは、扉の側に立っていた皇帝の第一騎士が、主人の許可も取らずに扉を開けた事にも、そして彼が笑みを浮かべて、部屋の中にとある人物を招き入れたという事にも、気付いてはいなかった。

薦姫の罇2

「―――同感だな」

けして大きくはないというのに、その声には誰をも振り向かせる威力があった。

「私とて、妻を一時も側から離したくはないし、他の男に仕えるのを許した覚えもないのだがな」

「　　ヴィオラント？」

「久しいなフランディース。貴殿は相変わらずのようだ。　　こちらへ来なさい、―――スミレ」

一声でその場を支配した来訪者は、皇帝ルドヴィークの長兄であり、腐敗に混沌としかけた祖国を荒療治で建て直した稀代の先帝、ヴィオラント・オル・レイスウエイク大公爵、そのひとであった。

類稀なる美貌を無表情で固めた彼は、珍しい紫の瞳を眇めて皇帝の執務室を見回すと、見慣れぬ侍女服に身を包み弟の背に庇われた、同じ色の瞳を持つ少女の名を呼んだ。

「　　まさか、お主が？」

戸惑うパトラシーシュの皇帝と、ほっと胸を撫で下ろすグラディアトリアの皇帝をその場に残し、小さな侍女はしずしずと優雅に呼び

つけた男の前まで歩き、それから彼の前で紺のお仕着せのスカートを摘んで淑女の礼をしてみせた。

「ヴィー、可愛い？」

「ああ、可愛い。いつそ食べてしまいたいほど可愛いが、その姿をルドヴィークはともかくとして、フランドリースにも見られたのかと思うと、奴の両目を抉り出したくなる」

「ああ、兄上、それは困ります。どうぞ今は堪えて下さい」

無表情のまま物騒な台詞を吐いて、小首を傾げる少女に腕を回して抱き寄せたヴィオラントに続き、困ると言いながらも全く困った様子の無い笑顔で部屋の中に入ってきたのは、今回の首謀者たる宰相クロヴィス・オル・リユネブルク公爵だ。

「クロヴィス！ どういうつもりなんだっ！」

「ああ、陛下なりませんよ。他国の客人の前でそのように余裕のない態度、我が国の沽券に関わります」

「ぐ　　っ　　！」

ただでさえ苦手で面倒くさい客人の接待を、侍女に扮した小悪魔を投入してさらにややこしく掻き回した諸悪の根源、つまり文句を言える相手を見付けたルドヴィークは、次兄クロヴィスを睨みつけて声を荒げたが、腹黒さを覆い隠すいつそ清々しい程の笑顔で簡単に躲かされてしまった。

血の繋がった兄とはいえ、臣下相手に全く歯が立たない皇帝の姿を見られた方が、よっぽど国の沽券に関わるのではないかと宰相に意見する者は、残念ながらこの場にはいなかった。

「　　何だ、宰相殿。本当にその娘はヴィオラントの妻なのか」

「はい、そうですよ。我々の義姉上です。可愛らしいでしょう？」

「レイスウエイク家は、新妻を奉公に出さねばならぬ程困窮していたのか。これは、何も知らずに申し訳ない。援助してやるうではないか、その娘をわしにくれば」

「おやおや、その世迷い言を零す口を、さつさと閉じるが宜しいでしょう。」

「失敬な。わしは真剣に申しているのだ。先程本人にも伝えたがな、あの娘が我が国に来るというなら、一番良い部屋を与えようと思う」

扉の前に兄夫婦を残して、客人と皇帝のいるソファの側までつかつかと歩いてきたクロヴィスは、パトラーシュ皇帝の言葉を聞いてその目を眇めた。

来月五十三人目の花嫁を迎えようという、隣国パトラーシュの皇帝フランディースは、後宮に囲った五十二人の妻達を皆平等に深く愛していると言うが、彼女達の立場は全員違わず側妃であり、いまだ正妃の称号を与えられた者は、一人もない。

妃同士の嫉妬や争いを避ける為にも、それぞれの居室は同等に揃えられており、そんな状況において一番良い部屋と言えば、今は誰も住む者がいない、唯一贅に差を付けた正妃の居室を指す。

「それは、スマレを正妃として迎えたいと、おっしゃっているように聞こえますが？」

「そのとおりだ」

「オルセオロ公爵。お腰の物を、どうぞ兄上に奪われないうよう、お気をつけ下さい。」

無駄に偉そうに胸を張って肯定してみせたフランディースに、クロヴィスは眉間の皺を指先で解しながら、愛妻の事に関しては極端に沸点の低い兄に凶器が渡らぬよう、扉の前で穏やかな笑みを浮か

べて佇んでいる騎士団長に注意を忘れない。

この状況を作り出した一因は自分にもあるので、正直今の兄の表情を見るのは気が引ける。

「しかし、貴方がそこまでだとは。私も少々読みが甘かったようです」

「うん？」

「スミレが、貴方の目に留まるのは計画通りなんですよ。でなくば、彼女にわざわざ侍女の真似事などさせはしない」

「侍女は真似事なのか。茶の用意は手慣れていたし、旨かったぞ」

「義姉を褒めていただき光栄ですよ。ですが、彼女はれっきとしたレイスウェイク大公爵の奥方であり、勿論、かの家が困窮しているなどとは完全な誤解です。むしろ彼女を娶ってから、兄上のやる気に比例して資産は増える一方で、今や皇帝家も太刀打ち出来ない状況ですから」

「ふん。では何故、その奥方にわしを誘惑させたのだ？」

「人聞きの悪い事を言うのはやめて下さい。貴方が勝手に彼女に魅せられたんでしょう。まあ、そうなる予想して彼女を送り込んだんですが。私が何をしたかったのかというとな、貴方もそろそろ落ち着くべきだと、教えて差し上げたかったのですよ」

「わしは、いつだって落ち着いている」

「いいえ、女性関連では全く。少なくとも、我々は迷惑を被っております」

パトラーシユの皇帝は、愛して娶った五十人を超える側妃全員と、それぞれ毎回盛大な結婚式を執り行った。

はじめのうちこそは、友好国の祝い事であるからと、当時グラデイアトリアの皇帝であったヴィオラントや、その他高位の大臣たちが交代で出席していたが、その内きりがなくなつて祝いの書簡と品

物を贈るだけになり、それも流石にこう頻繁となると費用が嵩む。

宰相クロヴィスにとって、フランデースへの結婚祝いにはもはや無駄であり、正直どうにかならないものかと思っていたところだった。

「それに、そちらの国の方々も、あなたの放蕩ぶりにはほとんど困っている様ですよ」

どうにかならないものかと思っているのは、パトラージュの大臣達でもある。

ただし、彼らを悩ませているのは財政的な理由ではなく、皇帝が大勢の女性を後宮に囲っておきながら、未だ正妃を迎えていない事と、五十二人それぞれ均等の回数閨を共にしているというのに、未だ御子が一人も生まれていないというのが理由である。

しかも、子が出来ない原因は、皇帝がわざわざ避妊の薬を服用しているからであるというのは、王家の侍医が最も憂いているところである。

「国民を安心させるのも皇帝の仕事ですよ。いつまでもふらふらしていないで、さっさと正妃を娶ってはどうぞです」

現在のパトラージュの宰相を務めるのは、フランデースとは別腹の妹であり、女ながら兄と共に幼少時代はグラデアトリアに留学し、クロヴィスとは共に当時の宰相ヒルデベルに師事した仲である。

さっぱりとした性格の才女であり、思慮深い幼なじみから、兄皇帝フランデースの訪問に先駆けて、書簡で相談を受けていたクロヴィスは、どうにか彼の女性関係を落ち着かせる方法はないか思索していた。

パトラージュの宰相は、兄の旧知であり同じ年のグラデアトリ

アの先帝が、最近ようやく妻を娶ったことを知り、彼にうまく兄を説得してもらえないものかと期待していたようで、クロヴィスもその為に兄に頼み込んで、フランディースの訪問に合わせて王城に来てもらったのだが、肝心の相談をする前に、ヴィオラントが皇太后陛下に捕まってしまったことは、誤算であった。

最近、新しい盤を手に入れたらしい皇太后エリザベスは、まだチェスでは一勝もできない長男に並々ならぬ闘志を燃やしており、稀代の先帝に有無を言わせず従わせる姿は、女帝さながら。

仕方なく彼女に付き合うことに決めたヴィオラントは、一緒に登城した愛妻を退屈させないために、「弟たちの執務室のどちらかにいなさい」と言い聞かせてから、大人しく義母上の私室に拉致されたのだった。

「わしが正妃を娶ると、ヴィオラントの妻に侍女の真似事をさせるのと、一体何の関係があるのだ。彼女を正妃にと薦めているのならば、喜んでもらいうけるぞ？」

「……ですから、滅多なことをおっしゃるのは、やめて下さいってば。誰が貴方のような女たらしに、大事な義姉上をくれてやりますか。スミレなら、貴方のことを間違いなくフツてくれると思ったから、送り込んだんですよ」

予定通り、ヴィオラントにフランディースを説得してもらったよう、彼が義母上から解放されるのを待とうかと思つたクロヴィスだったが、可愛い可愛い兄の細君を預かったことで、違う考えが浮かんだようだ。

「スミレの容姿に貴方が食いつくのは疑う余地ありませんでしたからね。女性に断られた経験のない貴方のことです、こんな少女に盛大にふられれば少しは目を覚ますんじゃないかと思つたのですが

……、予想以上の反応には驚きましたね」

「……そんなの、他にも見目のいい侍女はいるだろう。何もスミレを駆り出さなくても彼女たちにさせればよかったじゃないか」

不満そうに声を上げたのは、何も知らずに巻き込まれた皇帝ルドヴィークで、しかしそんな彼に実兄である宰相は呆れたようにため息を吐いた。

「分かってませんねえ、ルドは。侍女共が、いざフランディースに口説かれて本当にそれを断れると思いますか？　彼女たちにとって、またとない玉の輿のチャンスですよ？　彼の、五十四番目の花嫁になるのがオチでしょう」

「……………」

「その点、スミレは全く心配いりません。彼女が、フランディースに靡くことなど、あり得ませんから」

「言ってくれるではないか、クロヴィス。もしも、あの娘がヴィオラントよりわしを選べば、お主は一体どうするつもりだったのだ」

「だから、そんなこと、万が一にもあり得ないと言っているんです」

鼻で笑われ、さすがに自尊心を傷つけられて眉を顰めたパトラッシュの皇帝に、グラディアトリアの宰相は、いっそ華やかな笑顔を浮かべて宣った。

「兄上より貴方を選ぶような浅はかな女を、私が義姉などと認めるとお思いですか」

「……………」

潔く真っ黒な腹の内を曝け出した相手に、返す言葉が見つからな

くて、離れた場所に居る件の男を見やったフランディースの目に映ったのは、遂には妻たる少女を抱き上げて部屋を出て行こうとする、ヴィオラントの姿だった。

まだあどけなさの色濃い少女は人形のように愛らしく、側妃の何人かの部屋で見た、精巧なドールによく似ている。

在位時代の武勇伝は、フランディースに勝らずとも劣らない、若くして皇位を退いた旧友が、それはそれは大事そうに、幼げな少女を腕に抱え上げているのを見るのは、なかなか複雑な気分である。

「待たれよ、ヴィオラント」

それと共に、いつも自身に群がる女たちをうまく利用して立ち回っていたはずの彼が、小さな少女に完璧に振り回されている様子は、ひどくフランディースの興を誘った。

「その娘は、先ほどグラディアトリア皇帝自ら己の侍女だと肯定した者だ。わしは客人であるパトラッシュ皇帝として、彼女に茶をもう一杯所望する。勝手に連れ出すことなど罷り成らぬ」

「……………」

そのままヴィオラントが彼女を連れていってしまえば、もう二度と会わせてはもらえないような気がするので、せつかく持った権力を振りかざして友の足を止まらせた。

そうして、フランディースの言葉に、扉の取手に手を掛けたまま振り向いた、今でも大陸一と名高いグラディアトリアの先帝閣下の美貌は、見た者の背筋を凍らせるに容易い絶対零度の冷たさを宿していた。

フランディースのせいで、同じようにその視線に晒され、ルドヴィークは青い顔をして背筋を伸ばし、クロヴィスは「あゝあ」とい

う風に天を仰いだ。

「これ以上、妻をくだらぬ茶番に付き合わせるつもりはない」

「だがその妻は、茶番と分かっていてクロヴィスの策に乗ったのだろ。それは、彼女の意思ではないか。本日はルドに侍女として仕えると自ら口にしたのを、わしも聞いている。皇帝二人の前でした口約を違うなどと、大公家の奥方の品位を疑われるぞ？」

「この娘を、肩書きで縛るつもりも重責を負わせるつもりもない。品位を疑いたいならば勝手にすればいいが、我妻を貶め傷付けるのが目的ならば、それ相応の覚悟をしておくがいい」

「ああ、何だかお主、とてつもなく物騒な旦那に成り下がったな……。まあ、いい。――おい、スミレとやら」

片手で子供を抱くように董を抱え、扉の取手から外れた利き手かもしも得物を握っていれば、間違いなく相手の喉元に突きつけているだろう剣呑な雰囲気、ヴィオラントは古い馴染みに向き直った。フランデースが妻の名を呼んだ途端、彼の秀麗な眉がぎゅっと不快げに寄ったのを見て、いつの間に無表情を克服したのだと、パトラッシュの皇帝は今更ながらに驚いた。

名を呼ばれた少女は、夫の腕に抱き上げられたまま、首だけくると動かして声の主を振り向き、それから稀色の瞳をしばたかせて、甘い色の唇を開いた。

「なに？ フランダースのパトラッシュさん」

「うん？ 発音がおかしいのではないか？ ……ああ、お主は異国の出か」

「そうなんです。私の国において、貴方の名はあまりにも有名で、しかも涙を誘うの」

「なんたつて、世界名作劇場ですから。感動名場面殿堂入りですから」と頷く彼女の言葉を、フランデースはほとんど理解できなかったが、その態度が侍女を演じていた時の様子と全く違うことには気がついた。

さては猫を被っていたなと思いつながらも、大人しく慎ましい女には間に合っているフランデースにとって、隣国の皇帝と知りながらも畏まったり謙った様子のない、おそらく少女の素の態度で返されたことは、生意気だと苦笑させられるが不快ではなかった。

むしろ新鮮で愛らしく、なるほどこの可憐で清楚な容姿を裏切る奔放さが、かの先帝閣下を陥落させた手管かと、納得させられる。

「宰相殿の手駒となつて、わしの私情に口を挟んだのだ。最後まで責任を持たぬか」

「やだよ、面倒くさい。そもそも女好きは一生治らないよつて、私はクロちゃんにも忠告したよ。それでもいいから協力してつて言われたから手伝っただけだし。貴方がどれだけ女の子囲おうと、どんな偉業をしても、結局は色情魔皇帝と歴史に名を刻まれようと、私にはどうでもいいし、関係ない」

「ぬ……、愛らしい唇から盛大に毒を吐くな、お主。さすがに今は、ぐさつと来たぞ。それに……“クロちゃん”とは、まさか」

「私のことですよ。文句ありますか。スマレ以外が呼んだら捻り潰すところですよ」

こちらにも、相変わらず笑顔で毒を吐きまくる宰相を振り返り、グレイアトリアに留学中に見た幼少時代の彼は、こんなキャラだったかと、フランデースは首を捻った。

己の腹違いの妹と共に、当時の宰相シュタイアー公爵にくっついていた頃は、生真面目なだけで面白みのない奴だと思っていたが、

とんだ誤解だったようだ。

薦姫の饗3

そうこうしている内に、董が何か耳打ちしたのか、不承不承の様子ながらヴィオラントが扉から離れて、一同のいる所までやってきた。

そうして、当たり前のように席を勧めた弟皇帝に短く礼を言つて、少女を抱いたままソファに腰を下ろす。

「何だ、関係ないのではなかったのか？」

「関係ないから口を挟まないけど、あなたが義弟君たちの手を煩わしそうだから、見張っとく」

「ふん、それはそれは優しい義姉上殿だな。どうだ、お主がわしのところに来るならば正妃に据えて、今後これ以上側妃を娶るのを控えると約束しよう。それならば、可愛い義弟共を煩わせることもなからう？」

間近で改めて見た少女は、やはり今までフランディースが会ったことのない、可憐な姿をしていた。

彼は、人のものを欲しがる趣味はないが、奪えるものなら奪つて我がものにしたいと、ふと血迷った考えが浮かぶ程、旧友の幼妻は魅力的であり、それは侍女の演技を解いた今こそ、いかななく発揮されている。

フランディースが、冗談めかして自分の元に来ないかと告げながらも、それにいくらか本気が混じっていることを悟られたのだろっか、途端この部屋の空気が一気に温度を下げたように感じた。

穏やかに佇んでいるようにしか見えない、皇帝の第一騎士の笑顔

でさえ、不穩に感じられるのだから由々しき事態だ。

唇は弧を描きながらも、全く目が笑っていない宰相や、不機嫌を隠す気もなく睨みつけてくる皇帝などまだ可愛いもので、一番恐ろしいのは、向かいの席で完璧に表情を消し去った先帝閣下だろう。

フランデースとて、様々な修羅場を乗り越えて大国を治めてきた皇帝であるから、大抵のことには動じないし、そうと分かる素振りを見せないのも容易いはずだが、さすがに分が悪いことは認めざるを得ない状況だ。

ヴィオラントの膝の上の少女がいなければ、尻尾を巻いて国に逃げ帰っていたかもしれない。

「なーに、言ってんのよ、パトラッシュ君は」

「発音がおかしいぞ。そもそも、パトラッシュは国名だが」

「ああ、フランダースさんでしたっけ？」

「だから、発音がおかしいと言っておろう。もうよい、許す。フランでよい」

「じゃあ、フランフラン。私はさ、ヴィーの奥さんなの。新婚なの。巻き込まないでよね、迷惑だから」

「何故二度重ねる？ ……お主、本当に口の減らない娘だな」

不敬罪という言葉を知らないのか、皇帝である己相手にこれだけ遠慮ない言葉を打つけてくる女を、フランデースも今まで知らなかった。

面白いと、自然緩んだ頬を見られて、旧友の視線は更に突き刺さるように尖ったが、彼の怒りが沸騰するのを抑えているのが、その膝にちよこんと乗せられた少女であることは、容易に知れた。

彼女もそれを分かっているようで、明らかに不機嫌な様子の夫を宥めるように、ぴたと柔らかかそうな頬を彼のそれにくっ付けて、愛らしく甘える素振りをする。

途端、冷えきって見えたヴィオラントの表情が一瞬和らいだのを、パトラーシユの皇帝は見逃さなかった。

「……お主ほどの男が、そんな子供のような娘に骨抜きにされるなど、何たる悲劇。女の数と質を競える相手は、お主をおいて他にはないと思っていたというのに、がっかりだぞ」

「勝手に愚かな競争に巻き込まないでもらおうか。そもそも、誰しもに心を分け与えられる程、余計な愛情は持ち合わせてはいない」

新妻の居る前で、ヴィオラントの過去の女関係の激しさをちらつかせたのは、フランディースのちょっとした意趣返しであり、少しくらいぎくしゃくすればいいと思つてのことだったが、残念ながらそれに本人が焦る様子も、その妻が嫉妬をのぞかせる様子も皆無であつた。

それどころか

「私が心を寄せたいのは、この妻ただ一人だ」

どんな美女にも靡かなかつた美貌の先帝は、未だ白粉も載せぬ甘そうな頬に啄むようにキスを与え、フリルのヘッドドレスに飾られたふわふわの黒髪を、さも愛おしそうに撫で回し、そうして、可憐な少女を映す希少なアメジストを蕩けさせた。

「……ヴィオラントが、惚気た……」

長い付き合いではあるが、旧友がここまで何かに心酔する姿は、見たことも想像したこともなく、さすがに呆然と見入つたフランディースの肩を、横からぼんぼんと叩く者があつた。

見上げれば、それは先ほどの腹黒さを仕舞った宰相であり、彼は苦笑を滲ませてため息を吐いた。

「まあ、驚かれるのも無理はありませんが、本物の恋というのは、どんな人間でも変えてしまうようですよ。あのとおり、兄上の姿を見れば頷けるでしょう？」

「まったく　信じ難いが、ああまで見せつけられれば、さすがにな　」

「あなたも、気に入った女をぽんぽん娶るのではなく、一度じっくり本物を探してみてはどうですか」

「本物とは、何ぞ？　確かにわしは恋多き自覚はあるが、心から愛した者しか召し上げてはいないぞ。その中からたった一人など、選べるわけがない」

こうまでしても、私生活を改める気がないらしいフランディースに、さすがのクロヴィスも呆れを通り越して感心する。

皇帝たる者、他人の意見を全く聞かずにいるのも考えものだが、他人の意見に左右されない信念とカリスマを持ち合わせてこそ、優れた支配者であり続けられるというのも事実であろう。

フランディースが正しい施政者である限り、パトラッシュの国民は彼の女癖の悪さに目を瞑るだろうし、彼が妃たちにとって真実平等である限り、後宮の平穏も表面上は保たれることだろう。

そう考えると、ここで下手に彼が唯一の相手を見つけてしまつて、兄のようにただ一人に傾倒してしまうことは、女達の精神的な均衡を崩す、非常に危険な事態を招く可能性がある。

フランディースが側妃達にぼこぼこにされるのは一向に構わないが、それをきっかけに隣国の内政が乱れ、グラディアトリアにとばっちりが来るのは、クロヴィスとしては何が何でも御免被りたい。

「ではどうぞ、お好きに。グラディアトリアはこれ以上、その件については干渉しませんよ。御国の宰相殿には申し訳ありませんが、協力もしません。正妃問題や跡継ぎ問題でパトラッシュが乱れて、我が国に災いが飛び火するようではなければ、今後何人奥方を娶られても、我々は一向に関知致しませんので」

そもそもクロヴィスとしては、頻繁に豪華な結婚祝いを贈らねばならぬという無駄が許せないものであって、それさえなくなれば隣国の後宮事情になど、これっぽちも興味がないのだ。

「いつか、正妃様をお迎えになられる時は、是非お知らせ下さいませ。その時は、我がグラディアトリアも、皇帝が式に参列させていただきますよ」

つまり、「娶る女を正妃にするのでなければ、今後一切知らせも寄越してくれるな。そうすれば祝いという無駄な散財もせずに済む」という、あからさまな意図を匂わせて、クロヴィスがそう言って一歩後ろに下がり、胸に手を当て貴人を敬う礼をとると、その皮肉を受け取ってか、隣国の皇帝は「ふん」と鼻で笑って、ソファにふんぞり返った。

「もとより、人の恋路に口を挟もうなどと無粋なことよ。しかも、お主がヴィオラントの妻を囹に使うなどと余計なことをしたせいで、わしはまた恋に落ちてしまったではないか。五十三人目の花嫁が、最後であつたかもしれぬのに」

「だから、盛大にフラれて懲りればいいでしょうが。スミレはどうあつても貴方のものにはなりませんよ」

「そうだとすると、今まで恋愛対象ではなかったあれぐらいの年頃

の娘を、意識するようになるのは明白だ。少しでも似た娘を見つけると、口説いてしまいかもしれぬだろう？」

「……はあ、もう。貴方にはお手上げですね。スミレの言うように、存分に色情魔皇帝として歴史に名を刻むが宜しいでしょう。……それで首飾りの件、ルドの提示した金額でご了承いただけましたか？」
「おお、そうだった。可愛い侍女に惑わされて、本題を忘れるところだった」

結局のところ、クロヴィスの策は失敗に終わり、パトラージュの皇帝はその後側妃の数を増やし続けた。

クロヴィスとしては、あどけない侍女に呆気なくふられたフランデイスは、そろそろ自分も若くないんだということに気づいて、少しくらいは自身の所業を省み改めて、大人しくなってくれると期待していたのだが。

そもそも彼の計画では、幼げな少女が人妻であるという事実にはシヨックを受けている間に、董は正体を明かさなまま下からせる算段であった。

たとえば今の一時とはいえ、愛妻を兄弟以外の側に侍らせたことを知れば、間違いなく機嫌を損ねるであろう兄にばれないように、ちようど手に入った珍しい異国の菓子を賄賂に、董との密約も成立していたというのに。

既婚と聞いても懲りずに口説き続けたフランデイスに、董が足止めされたことも、ヴィオラントが予想よりも遥かに早く、皇太后陛下から逃れてきたことも、宰相閣下にとってはあるまじき誤算であり、まったく董が絡むと何もかも思い通りにはいかないと、彼は苦笑した。

フランデイスが董を気に入ったというのも本当だったようで、彼はその後、グラディアトリアに訪問する機会がある度に、毎回恒

例のように彼女を口説きにやってきて、ヴィオラントの表情筋を解すのに一役かっていたとか。

さて、今回の騒動で一番迷惑を被ったのは、何も知らずに振り回されたグラディアトリアの皇帝ルドヴィークであろうが、一番腹の虫が収まらなかったのは、何を隠そうヴィオラントである。

弟クロヴィスから相談があると懇願されて、董と共に城に上げれば、いつにも増してテンションの高い義母に捕まり、少女のように目を輝かせて勝負を挑んでくる彼女を無碍にはできずに、仕方なく満足行くまでお付き合ひし、やれやれやっと解放されたと妻を迎えに行けば、愛しい彼女は侍女のお仕着せに身を包んで、隣国の皇帝に口説かれていた。

彼女と男の間に末弟が入ってくれていたおかげで、冷静さを装って声を掛けることに成功したが、側に呼び寄せた妻には、彼が眼差しを剣呑に尖らせていることが知れたのだろう。

彼女は、ヴィオラントを刺激しないようにゆっくりとやって来て、甘えた声で彼の名を呼んだ。

見慣れぬ侍女のお仕着せを纏い、スカートを摘んでちゃんと小首を傾げた少女の愛らしさと言ったら筆舌に尽くし難く、それが他の男の目に晒されたのだと思うと、余計に怒りが込み上げてくる。

始終、ヴィオラントの不機嫌を一番感じていたのは董であり、それは彼の腕に抱かれて皇帝の執務室を出た後も続いていた。

「ねえ、ねえ、ヴィー？ そろそろ機嫌直したら？」

「……………」

彼女は、子供のように片手で抱き上げられて、黒革の靴に包まれた両足をぷらぷらと宙に遊ばせ、近くなった怜悧な美貌を無邪気な様子で覗き込み、それから柔らかな指先で、瞳に掛かった夫の銀髪を払ってやった。

怒りを燦らせるヴィオラントのアメジストを、臆することなく覗き込めるのは、世界広しといえどこの少女くらいだろう。

己の魅力を理解している彼女は、それを最大限に活かし、苛立ちに剣呑なオーラを纏い続ける男の視線を釘付けにすると、ふわんと花が綻ぶような笑顔で彼を誘惑し、砂糖菓子のように甘い甘い声に、彼女にのみ許された呼び名を乗せた。

「ヴィー、怒らないで。それで、このままお持ち帰りして」

「……………このまま？」

「うん、このお仕着せね、本当は成人前の見習い侍女さん用らしいんだけど、あんまり需要がないし、サイズが小さくて現役の侍女さん達には着れないからって、クロちゃんにくれたの」

「ほう」

「ね、可愛いでしょ？ せっかくだし、今日終日、ヴィーの専属侍女さんになるね、私」

「……………うん？」

可愛い可愛い奥方の申し出に、回廊を抜けて馬車で待っているであろう侍従長の元を目指していたヴィオラントは瞬き、思わず歩みが止まる。

「お茶をいれてさしあげますわ、ご主人様」

「……………」

「膝枕もしちゃいますわ、ご主人様」

「……………」

「肩だつて揉んじゃいますわ、ご主人様」

「……………」

お茶を入れる以降は、もはや侍女の仕事ではないと突っ込む良識者は、残念ながらこの場には居合わせていなかった。

まじまじと見つめてくるヴィオラントは無言で、まだまだ先を促されているようで、董は呆れる。

「んー？ んー……………じゃあ出血大サービスで、お背中も流しちゃいますわ、ご主人様」

「……………もう一声」

「まー、人使いの荒いご主人様ねえ。これより先は、サービス超過料金をいただきますけど？」

「幾らでも払おう。言い値で結構」

「わお、散財、散財！ 何なりとお申し付け下さいませ、ご主人様」

くだらないことを言い交わしている内に、すっかりヴィオラントの機嫌も無事浮上したようだった。

それに満足した董は、ふふと笑い、彼の首筋に両腕を回す。

睫毛が絡み合う程近くから、自分と同じ色合いの瞳と見つめ合い、それからふと、先ほど見たパトラージュ皇帝の金色の瞳を思い出した。

恋多き自覚があると認めたフランデースだが、確かに董を口説いた時の彼の瞳に、嘘はなかった。

同時に複数を愛せる種類の人間がいるのは、どの世界も一緒のようだが、全ての相手に同じ温度で情を注げる者は、決して多くはないだろう。

おそらく、フランデースはその数少ない人種であって、それ故に五十人を超える側妃達にドロドロの争いを起こさせず、新しい花嫁を想いながら他の者を口説くという、呆れた芸当ができたのだろう。

董には理解できないし、今日の前に存在するアメジストが、例えばマックスの愛情で董を映したとしても、同時に他の相手も映すとなったら、穏やかでないに違いない。

「スマレ、何を考えている？」

勝手な想像に、無意識のうちに董の眉がぎゅと顰められていたように、ヴィオラントがその心内を見透かすように、凪いだ声で問うてきた。

思えば、これが、董が生まれて初めて経験する、色恋沙汰に関する“嫉妬”という感情であった。

それは、苛立ちと焦燥をごちゃ混ぜにし、痛いような苦しいような、ともかく不快な感覚であり。

そしていつの間に、これほどまでに彼に心を渡してしまっていたのか、という驚きを齎した。

「スミレ」と甘く呼ぶ声に、抗うようにぶんぶんと頭を振った。
董は、初めての感情に戸惑い振り回された表情を見られないように、キスを寄せてきた夫の唇を避けて、彼の首筋に顔を伏せてしま
う。

少女の幼い心の葛藤などお見通しならしい男は、いやに満足げに
口角を引き上げ、それから頬をくすぐる柔らかな黒髪に、それはそ
れは愛おしそうにキスをした。

その後

屋敷に戻ったレイスウェイク大公爵家の当主が、終日上機嫌でい
らっしゃったというのは、かの家に長く仕える侍従長殿の話である。

薦姫の罊3（後書き）

『薦姫の罊』おわり。

追伸（前書き）

「薦姫の罊」翌日。

追伸

「お邪魔します、兄上。スマレ、ほら、昨日約束したお菓子。渡し忘れていたので持ってきましたよ」

「わゝ、クロちゃん、そういうところホント律儀ね。よしよしよし、お姉ちゃまがお茶を入れてあげよ」

「クロヴィス、そなたも忙しい身であろう。わざわざ菓子の一つ、使いの者に任せればよいものを」

「いえ 今回のこと、少々私も考えが足らず、兄上に不快な思いをさせてしまったことが気になっておりましたので、それについても是非お詫びを申し上げたくて」

「今後スマレに何かさせる時は、私に一声掛けると約束するなら、今回のことについてはもう何も申すまい」

「はい、ありがとうございます。申し訳ございませんでした」

「それよりも、私が気になっているのは、本当にこの娘が菓子ごときであのような面倒なことに手を貸したのか、それが少々疑問なのだが？」

「っ、ヴィー。急に何言い出すのよ。“物につられて何でもほいほい従うな”って、昨日あれからさんざんお説教しといて。蒸し返さないでっば！」

「クロヴィス、どうだ？」

「」

「クロちゃんも、何でそこで黙り込むかな？ あっ、口元笑ってん
の見えるからね！」

「クロヴィス、他にも何か交渉材料を用意していたな？」

「ああ 私の口から申し上げるわけには」

「そこ、ニヤニヤしないのっ。っていうか、否定しなよっ！」

「ーーーースミレ」

「　　な、なに？　　ヴィー」

「何を隠しているのか、自分で言いなさい。クロヴィスに一体どんな弱みを握られた？」

「　　何にも、ないってば」

「目も泳がせずに言つてのけるそなたは、さすがと言うべきか。しかし、知っているか？　そなたがそうやって唇を尖らせるのは、何かやましい事がある時の癖だ。クロヴィスの前でその唇に噛み付かれたくなかったら、正直に言いなさい」

「ああ、私の事はお気になさらず、どうぞ齧り合つて下さいね」

「黙れ、まっくろくろすけ」

「スミレ」

「　　ちよつと　　出来心で、落書き、してみたただだよ

お」

「落書き？　　何に？」

「　　う、ヴィーの書いてくれた、プチトマト研究費の請求書に」

「請求書　　出資者のクロヴィスに先日渡した、あれか。落書きくらいで固いことを言うな、クロヴィス」

「いえ、私もね、義姉上の拙い絵の落書きなんて可愛いものなら、ああ下手くそだな、くらいで気にも留めないんですがね。明らかな改ざんの痕跡を見付ければ、見過ごす訳にも行かなかったんですよ」

改ざん？」

「あ、お茶お茶。お茶の用意しなきゃ」

「　　スミレ」

「ヴィー、私つてばほら、この屋敷の奥様じゃない？　お客様にお茶を用意しなきゃじゃない？」

「ああ、義姉上。どうぞお構いなく」

「　　ここに座りなさい。スミレ」

「　　やだな、ヴィー、最近お兄ちゃんにホント似

てきた。お説教する前の顔なんて、そっくりなんだけど」

「私はな、そなたを妻にいただく時に、兄上と約束したのだ。まだ幼い妹君を兄上に代わって正しく教育し、いけない事をした時には彼に代わってきちんと叱ると。甘やかすばかりが愛情ではないと、兄上は仰っていた」

「さすがは優斗殿。兄上の甘やかしっぷりを放っておけば、スミレがそのうち小悪魔から悪の大王になると危惧して、保険をかけていたのですね。よかった、よかった。これで少しは、我が国の平和も保たれるというものです」

「何言つてんの、クロちゃん。っていうか、約束が違う。私はちゃんと働いたのに、バラすなんてひどくない？」

「ああ、申し訳ありません義姉上様。ですが、私に敬愛する兄上に隠し事をする事とも、ましてや騙すなんてこと出来ると思いますが？」

「できるできる」

「いいえ、できませんよ、そんな “兄上の書かれた明細の〇の後ろに、明らかに拙い〇が書き足されていた” なんてこと、胸に留めておくには荷が重過ぎます」

「ゼロ？」

「黙れ、腹黒。今すぐそのニヤついた口を閉じろ」

「口が悪いですよ、大公夫人」

「スミレ」

「は はいはい」

「〇を増やしたとは、どういう事だ。きちんと説明しなさい」

「う だからね？ そのね？ ヴィーの書いた〇の後ろが、ちょこつと開いててね？ 何だか寂しそうだったから、お友達を増やしてあげようと思ってね？」

「可愛い言い方しても駄目だ。内容はまったく可愛くない。そなた、大胆にも桁を増やしたのか」

「ちょこまかした細工は性に合わないから。何事もやるなら大きく

あれ、が野咲家の家訓だから」

「そうか、それは後日兄上に確認しておこう。私が今すべきことは、善悪の判断が出来ぬ幼い妻にしっかりと反省させ、教育し直すことだ」

「いや〜」

「そういうわけだ、クロヴィス。悪いが席を外してくれ。ああ、請求書はそなたの方で修正しておいてもらえるか？」

「ええ、もちろんですよ、兄上。私も、親愛なる義姉上が道を違えてはどうしようかと心配しましたが、兄上に任せておけば安心ですね。では、仕事を残してきておりますので、失礼致します」

「クロちゃ〜ん、クロちゃ〜ん！」

「いやですね、義姉上。そんな切ない声でご主人以外の男を呼べば、誤解を生みますよ」

「クロちゃんの、ばかつ！」

「スマレ、反省しなさい」

追伸（後書き）

堇 反省 i n b e d

薫姫の奇跡 前編

はっと気がつく、董は緑に囲まれて雲一つない青空を見上げていた。

「あれ？」

自分は確かに、今は我が家となったレイスウェイク家の庭にいた記憶があるのだが、しかし周りをよくよく見渡すと、そこは董が愛する白髭のポムじいさんの縄張りとは、明らかに異なる場所であった。

手入れの行き届いた庭園であるには違いないが、日頃ポムとつるんでレイスウェイクの屋敷の隅々まで網羅している董には、見分けるのは容易い事だった。

いつの間に、他所様のお庭に迷い込んでしまったのだろう。

いや、そもそもレイスウェイクの屋敷は周辺をぐるりと広大な森林に囲まれており、うっかり迷い込んでしまうようなお隣さんはなかったはずだ。

一体どうなっているんだろうと思いつつ、董はとりあえず道なりに歩いてみた。

そうして、ふと、ある事に気付く。

「じいって」

その時々で咲く花にばらつきがあるので、完全に一致とはいかな

いが、以前夫であるレイスウェイク大公爵に連れられて足を踏み入れた、記憶の中のある庭園の景色とひどく似通っているのだ。

それは、董がいたはずのレイスウェイク家から、大通りをひたすら真っ直ぐ行った場所にある、この国の王城に広がる庭園の、しかも極一部の者しか知りえない、秘密の場所への道のりだった。

董が初めてそこへ連れて行かれたのは、大公閣下に嫁いでまだそう経たぬ頃。

彼の目を盗んで王城を歩き回り、結局義兄のいる騎士宿舎で捕獲されて、男所帯にふらふら出掛けた仕置きを受ける為に連行されたという、あまり大きな声では言えない思い出のある場所だ。

しかし、何故自分がいきなりそんなところに居るのか、全くわけが分からないとぶつぶつ愚痴りながら、董はあの時はヴィオラントに抱き上げられて進んだ道を、とにかく例の場所まで行ってみることにした。

記憶に間違いがなければ、この先には白いベンチを携えた東屋があるはずだ。

ヴィオラントは、その東屋の存在も、そこへ向かう道さえも、彼が今でも師として慕う亡きロバート・ウルセルと、兄弟弟子ともいえる幼馴染みの隣国王兄ルータス・ウェル・コンラートと、そして彼自身の三人しか知り得ない、秘密の場所なのだと教えてくれた。

とにかく、まず入り口からして、他の者には分からないよう細工がされているらしい。

それがどういうものなのか、以前来た時には機嫌を損ねた夫に、道中既にあちこち弄られていた董は、全く記憶になかった。

そんな場所に、自分が何故一人で来てしまっているのか、董はと

ても不思議だったが、もうひとつ、気になることがあった。

「透けてる？」

膝下まである淡い色合いのAラインのワンピースに、繊細なレースが飾る白いカーディアンを羽織った格好の董だが、見下ろす自分の存在自体が微かに透けて、周りの緑が淡く映り込んでいるという、不可解な現象に気付いてしまった。

柔らかな革で拵えたローヒールの靴は、確かに地面を踏みしめているはずなのに、その足元には影さえ見当たらない。

試しに、傍らで愛らしく咲く野花に手を伸ばしてみたが、それは董の指先に摘まれることなく、すっと彼女の身を通り抜けた。

「

」

考えたくはないが、もしかして、これが世に言う“幽体離脱”とかいう現象であろうか。

つまり、董は、身体という器を置き去りにして、幽体あるいは霊体と言われる状態で、グラディアトリアの王城まで飛んできてしまったというのか。

もしもそうであるのなら、我が家に置いてきた本体は仮死状態のはずで、家人に見つかればそれこそ大騒ぎだろう。

自宅に、夫の元に戻らねばと思いつつ、しかし董は何故か強く引き寄せられるように、秘密の場所の奥へと足を踏み入れるのだった。

ぐるぐると螺旋状に、細く獣道のように様々な植物に覆われた道を、堇はひたすら前に進んで行った。

そうして、ようやく目の前に現れたのは、慎ましやかながら鮮やかな花を咲かせたアーチだ。

それを潜ると、もうすぐ正面に東屋がぼつりと建っているはずで、堇の前にはそのとおりの光景が広がったわけであるが。

しかし。

そこには、堇をひどく驚かせることになる、先客が居た。

「

」

東屋の中に置かれた白い大きなベンチの上に、人間が一人横たわっていた。

靴を履いたままの両足を乗せて仰向けに寝転び、目の上で両手を組んでぴくりとも動かないその人物は、立派な衣服に身を包んだ男だった。

目元が隠されてしまっているが、ずっと高い鼻と薄い唇はひどく整っていて、それだけでも彼が尋常ではない美貌の持ち主だと知れる。

しかし、堇を驚かせたのは、そんなことではない。

白く塗られたベンチの上に、無造作に乘せられた頭。
それを飾る髪の色が、彼女にとっては最も身近に感じ、しかしこの世界においてまたとない色、透き通る絹糸のような白銀であったのだ。

その色を持った人物を、董は一人しか知らない。

「
　　ヴィー？」

囁くように呼んだ声は、しかし寝そべる相手には聞こえなかったようだ。

白銀の髪に紫の瞳、類稀なる美貌を携えた先帝閣下が、董の夫である。

なんだ、彼も一緒に城に来てたんじゃないかと、一瞬董はほっとしかけたものの、自分の身体が透けている事実を思い出して、さあどうしたものかと腕を組んだ。

とりあえず、今の状況を分析してもらう為に、夫を起こさねばなるまい。

董は、普通に歩いても音の立たない足下を訝しがりながら、男が寝ているベンチの脇まで近寄っていった。

そうして、息を吸って大きな声で彼を起こそうかと思ったが、組んだ両手の下から突き出している形のいい鼻を発見して、元来の悪戯心がむくむくとせり上がってきた。

しかし、さつき花もすり抜けて掴めなかったことを考えると、また透けた指の中を通り抜けるだけで無駄だろうかと思ったが、やは

り好奇心に勝てずに手を伸ばす。

何も掴めないはずの董の人差し指と親指は、しかし次の瞬間、思いがけず確かな感触を得たのだった。

「……………!？」

「わっ　　！」

董はおもむろに、無言のまま男の鼻をきゅっと摘んだ。本当に、掴めてしまったのだ。

それに驚いたのは、何も董だけではなく、彼女の存在に全く気付いていなかったらしい、男の方もだった。

彼は即座に董の手を振り払って飛び起き、その衝撃でたたらを踏んで後ずさった少女に向かい、驚く事に腰に靡いていたらしい剣を素早く鞘から引き抜くと、それを躊躇なく構えて見せた。

「……………何者だ」

そして、誰何をしつつ睨みつけてきた相手の顔を見て、今度は董が盛大に驚く番であった。

彼は、確かに董の夫、グラディアトリアでただひとり大公爵の称号を持つ、ヴィオラント・オル・レイスウエイクなのだが、董の知っている彼からは想像もできぬ程の感情的な様子と、何より向かい合って見たその顔が、まだ幼さを微かに残した少年のものであった

のだ。

董は、ぽかんと口を開いて、彼を見つめることしか出来なかった。

「見ぬ顔だな、どこの家の者だ」

そんな少女を訝しげに鋭く睨みつけつつ、剣を構えたままの男もまた、驚きを隠し切れないでいた。

突然現れた小さな娘の、見た事もないような漆黒の髪と、今は亡き生母の他に見なかったはずの己と同色の瞳。

それに、妹アマリアスが気に入りの、着せ替え人形によく似た可憐な容姿。

どれをとつても、彼の記憶にある貴族の子女とは一致せず、だがその身を包む衣服の質感を見れば、侍女や市井の娘とも思えない。何よりも、こんなか弱そうな娘が、今や混沌とし始めた王城の中を、一人で歩いているのがそもそもおかしい。

「ここは、ごく限られた者しか入れない庭だ。答えろ、お前は何者だ」

まさか刺客か、と疑いつつ、ヴィオラントは彼女に剣先を突きつけたまま、まったく抵抗する素振りを見せない身体を拘束する為に手を伸ばした。

この東屋は、秘密の場所。

敵だらけの王宮において、彼が唯一憩える、大切な大切な場所だ。たとえ、この少女が偶然迷い込んだのだとしても、見られた限り黙って帰すわけにはいかない。

彼女が何者かの息の掛かった刺客であるならば、尚の事、生きて

帰すわけにもいくまい。

見開いた紫の瞳でこちらの顔を凝視し、沈黙したまま硬直している様子の少女の、白色のカーディガンに護られた華奢な右肩を、ヴィオラントは容赦なく掴んだ―――はずだった。

しかし

「―――！？」

「ん？」

掴んだはずの掌は空を切り、握りこぶしに変わったただけであった。

「どうなっているのだ」

よくよく見てみれば、目の前に佇む少女の身体は僅かに透けて、背後の景色が映り込んでいるではないか。

ヴィオラントはもう一度手を伸ばし、実はとても気になっていたふわふわの黒髪に触れようとしたが、やはりそれも叶わなかった。

しかも、それに驚いたのは少女本人もだったようで、大きな瞳をぱちくりさせて、己の不安定な両手をまじまじと見つめていたかと思うと、徐に指を伸ばして突き付けられていた剣先をちゃんと摘もうとした。

彼女に、そんな物騒なもの向けているのは己であるというのに、柔らかそうなピンク色の指先が、鋭利な刃物で傷付けられる瞬間を想像して、ヴィオラントの背筋が一瞬凍り付いた。

「 やっぱ、摘めないね」

ところが、彼女の指先もやはり微かに透けていて、ヴィオラントの剣を掴むことはできなかった。

少女は、光る切っ先のすり抜けた己の指を擦り合わせて、愛らしい眉間に皺を刻んでしばしの間唸っていたが、何を思ったのか、再びヴィオラントに向かって手を伸ばしてきた。

避けることなど容易かったが、何故かそうせずじつと沈黙した彼の腕を、小さな白い手がぽんぽんと叩いた。

叩く事が、出来たのだ。

「 んん？ 触れるじゃん？」

肩に触れる事ができた少女の手は、更にちよんとつま先立って背伸びしたかと思うと、遠慮を知らぬ様子でそのまま彼の銀髪を掴んだ。

ヴィオラントが不満げに首を振るとそれは外れたが、彼女の瞳が悪戯な輝きに満たされたのを目の当たりにして、些かたじろぐ。

「 あなた、ほんとに、ヴィーなの？」

「 “ヴィー”？」

「 あゝ、ええと、アナタワー、ヴィオラントクンナノデスカ？」

「 何故、急に片言になる 。 本当に、お前は一体何者なのだ？」

董から見て、若干若々しい夫のそっくりさんは、否定しないところを見ると、その名に間違いないようだ。

同じ名前で同じ髪で同じ瞳、そして同じ美貌の男。

目の前に居る、自分とそう年の変わらない様子の“ヴィオラント”が、夫である一回り年上の“ヴィオラント”と同一人物とするならば、董は今度は世界を渡って来たのではなく、時代を渡ってきてしまったと考えるべきだろう。

まったく、またも非常識な展開である。

夢でも見ているのかなと思って、頬を抓ってみた。

人様の、であるが。

「よせ」

「あ、痛い？ うん、じゃあ、夢じゃないね」

「」

夢ではなくても、やはり董の身体が透けているところを見ると、実体はこちらに来ていないようだ。

正直言って非常事態であり、本来ならあわあわしているところなのだが、どういうわけか不自然な程、董の心は落ち着いていた。

何か見えない力で、心配ないよと、支えられているような安心感がある。

きっと、永遠にこのまま、ということはないだろうと思う。

そうであれば、この貴重な体験の中の奇跡のような出会いを、楽しまなければ損なような気がした。

薦姫の奇跡 後編

「えーと、おそらく私は通りすがりの幽体ですので、お気になさらず。どうぞどうぞ、も一度昼寝でもぶっこいて下さい」

「幽体？ なにを馬鹿げたことを。そもそも、人の憩いを邪魔したのはお前ではないか」

彼に、今幾つなのかと歳を聞くと、ひどく面倒くさそうにしながらも、一応答えてくれた。

なんと、董の知る彼の末弟ルドヴィークと同じ、十八歳なのだという。

十八といえば、ヴィオラントが先代の崩御と共に玉座に就いてから、既に二年が経っていた。

ちょうど王宮内の腐敗を、片っ端から駆逐しているまっ最中。

おそらく、彼が最も凄惨な毎日を過ごしていた頃だろう。

目の前の少年ヴィオラントの、歳の割に老成したように見える表情に、董はなるほどと納得がいった。

ヴィオラントも、お返しとばかりに教えられた董の歳を聞いて驚いていた。

この世界における成人の歳に達してるにも関わらず、彼女の見た目はどうにも幼すぎるのだ。

柔らかなワンピースに包まれた身体は、あまりに華奢で凹凸が少なく、彼の知っている同年代の娘達とは比べようもない。

けれど、彼女達のように媚と色、あるいは畏怖に塗れた、見ていて胸くその悪くなる仮面を纏わず、ただ無垢な愛らしさだけに乗せ

て、小首を傾げて見上げてくる様子は、余程好感が持てる。

もはや必要ないだろうと、構えていた剣を腰の鞘に戻すと、ヴィオラントは自由になった両腕を胸の前で組んで、彼女をじっと見下ろした。

「本当に透けているな。おかしいこともあるものだ」

「いや、ほんとほんと」

「それで？ 幽体なの言い張るのなら、お前の実体はいつたい何処にあるというのだ」

「うーん、自宅にいて、気がついたらこの庭歩いてたんだよね」

「では、身体は自宅に置いてきたのか。して、お前の家名は何と申す？」

「レイスウエイク」と答えようとして、ふと、それを今の彼に言うて良いものかどうか、董は悩む。

もちろん、「貴方の未来の可愛い嫁ですう」などと言った所で信じないだろうが、あまり先のことを教えてしまうのもいけないような気がする。

なので、董はお得意の愛想笑いで誤摩化そうとした。

当然、それで誤摩化されてくれるような、可愛い相手ではなかったが。

「家名が言えぬか」

それはつまり、疾しい事があるためだと、彼は判断したようだ。いつも董には、蕩けるような愛情が滾るような欲情しか向けないヴィオラントの瞳が、酷薄で剣呑な光を宿して彼女を睨みつけた。

過去の彼はまだ董と出会いもしていなかったし、国の平定をやり

遂げ精神的な平和を取り戻した、先帝閣下ではない。

仕方のないことと分かっているが、彼にそんな瞳で見られたことは、董にとっては相当ショックなことであり、元に戻ったら十年後のヴィオラントに、思いつき文句を言って困らせてやろうと心に決めた。

そして、シヨックと共に、やっぱりちよつとは腹も立っていたので、仁王立ちして睨みつける男の真似をして、董も華奢な両腕を組んで憤ましかかな胸を張り、ふんぞり返って時の皇帝陛下を睨み上げた。

「ていうか、あなたは私に触れないけど、私はあなたに触れられるってことは、もうそれだけで力関係決定じゃない」

「　　なんだと？」

「つまり、私の方からは悪戯し放題ってこと、忘れないでよね。あんまり生意気だと、意地悪しちゃうよ」

「　　」

今のヴィオラントには、董に触れることができなかった。

しかし、董は他の物には触れる事ができなかったが、何故かヴィオラントにだけは触れる事が出来た。

ということとは、董がその気になれば彼の喉を両手で絞めることも可能なわけで、極端な事を言えば彼を殺すことだってできるのだ。

だが、それを聞いたヴィオラントは、ずっと目を眇めはしたが、憤慨したり焦ったり、もちろん恐れる様子もまったくなかった。

それどころか、何だか投げやりな風に大きく溜め息を吐くと、董から視線を逸らした。

無言のまま東屋に携えられたベンチに戻り、どかりと彼らしくない粗野な仕草で腰を下ろすと、再び靴のままの両足を乗り上げて横になる。

「えゝ、ねえねえ、何その態度？」

「煩い。黙れ。寝る。時間が勿体ない」

「それは、悪戯して下さいってこと？」

「違う。どうせ抵抗できないのなら、いろいろ悩んでも仕方がない。貴重な休憩時間を無駄にしたくない」

王宮の中に戻れば、再び数多の魑魅魍魎を相手にせねばならない。ほんの少しと告げて暇を与えた侍従長は、おそらく休みもせずに執務室で待っているだろう。

遅ければ、彼に余計な心配をかける事になるし、疲れた顔のまま戻っても、彼の顔を曇らせてしまうに違いない。

「ふうん、疲れてるんだね。若いのに大変だね」

「」

薄く目を開けて傍らを見ると、少女が側に寄ってきて、ベンチの横にしゃがみ込んでいた。

不思議なことに、こうしていても、彼女には気配が全くなかった。常に周囲に神経を研ぎすましているヴィオラントが、先程鼻を摘まれるまで、近づく存在に気付けなかったのもそのせいだ。

見知らぬ不思議な少女が死神であろうとも、ヴィオラントは志半ばの今はまだ、命をくれてやるわけにはいかない。

しかし、彼女は確かに彼をくびり殺す事が可能であるのに、それを実行する様子は全くなかったし、何故か彼女がそんなことをするはずがないという、根拠のない確信がヴィオラントを微睡みに導くのだ。

近くで見れば見る程、貴重な色合いのふわふわの髪と、親しみを
感じる同じ紫の大きな瞳、それからドールのように整った愛らしい
かんばせに、自然と視線が釘付けにされる。

ああ、可愛いな　と、弟妹以外には感じたことのない柔らかい
思いが沸き上がり、ヴィオラントは戸惑う気持ちを隠そうと、彼女
から無理矢理視線を引き剥がした。

そして、元のように組んだ両手で目の上を覆い、深く深く溜め息
を吐く。

そうすると、本当に傍らにいるはずの少女の存在を、全く感じな
くなってしまった。

耳には、そよそよと穏やかに吹く風が、微かに庭木の葉を揺らす
音しか聞こえず、若き革新派の皇帝の、ひとときの安らぎの時間が
そっと戻ってきた。

今はもう、ただ、何も考えなくなかった。

今朝、首を飛ばした、汚職に塗れた大臣のことも。

昨夜、寝首をかこうとナイフを振り上げた側女の、豊満な乳房の
間に突き立てた己の短剣の輝きも。

昨日の義母との茶会に乱入した、刺客の臍の色も。

今は、何も思い出さなくなかった。

ただ、少しの間だけでいい。

ほんの少しだけ、何者にも邪魔されずに、無垢な子供の頃のように
眠りたいと、それだけを願ったヴィオラントに、ふいに触れたの
はとても穏やかな体温。

小さな柔らかい掌が、傍らから伸びて彼の銀髪に包まれた頭を、
そっと撫でていた。

それは、微かな記憶の中。

愛する男と無理矢理引き離されて後宮に閉じ込められた彼の母が、気まぐれに息子に与えた優しさにひどく似ている。

優しい義母も惜しみない愛を与えてくれたが、子供が実母を求める気持ちというのは特別であり、最後まで父王を受け入れず、心を閉ざしたまま亡くなった母との思い出の中で、頭を撫でてもらえた記憶は、とてつもなく貴重で恋しいものだった。

母とは似ても似つかぬ幼い少女だが、彼女の掌は柔らかく温かく、何故かヴィオラントは無性に泣きたくなった。

けれど、泣けない。

全てをやり遂げ、全てを終わらせて、末弟ルドヴィークに平和な世を引き継ぐまで、己は絶対に泣くわけにはいかないと、強く引き結んだ彼の唇に、柔らかなものがふつと重なった瞬間。

ヴィオラントは、すっと、安らかな眠りのなかに落ちて行った。

少年ヴィオラントが意識を手放したと同時に、彼の頭を撫でていた董もまた、急激な睡魔に襲われていた。

抗い難き本能に全身から力が抜けて、仰向けに横たわる男の上に折り重なるようにして眠りの淵に引きずり込まれる瞬間、董もまた柔らかな掌の感触を感じた。

そして、視界を過ったような気がしたのは、ヴィオラントと同じ絹糸のような美しい銀髪で、それを腰まで長く伸ばした美貌のひと

が、紫の瞳を細めて優しく微笑んだように見えた。

あ　右目に泣きぼくろ。すんごい、別嬪さんだな

その背後に見えた青空は、何処までも澄み渡り、一番強烈な印象として堇の意識の中に残った。

「……………スマレ」

穏やかな低音に優しく耳をくすぐられて、堇の意識は緩やかに浮上した。

そつと瞼を開くと、眠りに就く前の最後の記憶に、ひどく似通った青空をバックに、銀髪と紫の瞳を携えた人物が、こちらを覗き込んでいる。

「　　ヴィー　？」

「こんな所で眠っては駄目だろう。そなたの姿が見えないと、皆心配していたぞ」

「　　こんな、ところ？」

優しい夫に身体を抱き起こされて、呆然と周りを見渡せば、そこは勝手知ったる我が家の庭であった。

大きい楠木の下の、柔らかな芝生の絨毯が敷き詰められた、董お気に入り場所である。

そこに膝掛けを敷いて、自分は一人横になっていたらしい。

今日はヴィオラントは、珍しく朝早くから所用で出掛けていた。留守番を仰せつかった董は、朝の支度を済ませた後、女官長と一緒に少しだけ縫い物をして、それから良い天気なのをいいことに、庭師のポムを探して庭に出た。

しかし、広い庭園に彼を見つけ出すのは至難の業で、途中通りかかったお気に入り場所に、休憩のつもりで腰を下ろしたところまでは思い出した。

「マーサが、日傘を取りに戻った隙にいなくなつたと、盛大に取り乱していたぞ。あまり、心配をかけるものではない」

「うん、ごめんなさい」

昨夜は久しぶりに、ちょっとした夜更かしを夫が許してくれたので、少し眠気が残っていたのかもしれない。

董の世界では、今日は12月25日。

世に言う、クリスマス当日だ。

トナカイのソリに乗った魅惑的な白い髭のご老人が、子供達にプレゼントを渡し終えた翌日である。

常春の国であるグラディアトリアでは雪は降らないし、そもそもクリスマスという風習自体存在しないのだが、兄優斗からいつの間にか詳細を聞き出していたヴィオラントは、昨夜董にサプライズなクリスマスパーティを用意してくれていた。

彼が内々に用意していたのは、モミの木に似た大きな木にたくさ

んの飾り付けをしたクリスマスツリーと、壁を挟んだ両方の世界の家族達全員だ。

大人達は、それぞれ董に貢ぎ物を持って来ていて、ツリーの前に高々と積まれたプレゼントボックスの山に、愛らしい頬を薔薇色にして喜ぶ彼女の姿を肴にして、持ち寄ったワインで乾杯をした。

今まで経験した事のない、たくさんの家族と祝う賑やかで温かなクリスマス・イヴを、董は一生忘れないだろう。

そうして、昨夜の一番の功労者たる夫に、董はうふふと思い出し笑いをしながら、もう何度目かにもなる褒美のキスを与えた。

彼の無に支配されて久しかった表情が、微かに柔らかく緩む。

美しい紫の瞳は、蕩けるような甘さを帯びて、ただ一人妻だけを映している。

「そうそう、ヴィーはこうでなくっちゃ！」と思いながら、董はふと、つい先程まで一緒に居た十八のヴィオラントの余裕のない表情を思い浮かべ、あの出会いははたして夢であったのか、それとも現実における不思議な体験であったのか、判断を下すことを躊躇した。

けれど、歳若きヴィオラントの苦悩と疲弊に満ちた姿は忘れ難く、今頃になってせり上がってきた憂いと愛おしさに、目を伏せた彼にしたように、今ようやく穏やかな日々を手に入れたその人の銀髪を撫でた。

「スマイレ？」

「よしよし、よしよしよし」

「

ヴィオラントは不思議そうに瞳を瞬きながらも、董の好きなよう

にさせた。

それから、大胆に慎ましやかな胸元に抱き込まれた頭をそつとずり下ろすと、柔らかなワンピースに包まれた妻の腹部に耳を押し当てる。

その奥から聞こえるのは、微かだが確かな心音で、ヴィオラントにとっては何よりも待ち遠しいプレゼントの鼓動だった。

瞳を閉じて幸せそうな溜め息を吐いた彼の髪を撫でつつ、董は見上げた雲一つない青空に、ふともう一つ大切な事を思い出した。

「ねえ、ヴィー」

「うん？」

「ヴィーのお母さんってさ、髪も目の色もヴィーとおんなじって前に聞いたけどさ、もしかして泣きぼくろとか、あつた？」

「ナキ？」

「ホクロだよ。目の下にあると涙が零れたみたいだから、泣きぼくろっていの。確か　　右側？」

唐突もない董の言葉に、ヴィオラントは久しく思い浮かべもしなかった生母の顔を、記憶の引き出しの奥から引っ張り出した。

「ああ、あつたな。右目の下に確かに。　　しかし、本人はあれを嫌っていたらしく、いつも化粧や髪で隠していたと思うが、そなた誰かに聞いたのか？」

「　　ううん。っていうか、今、ヴィーのお母さんに会ってたかもしれないって言ったら、びっくりする？」

「　　」

「　　ついでに、十代の皇帝ヴィーにも会ったって言ったら、ひく？」

「すかさず、ヴィオラントは董の額に掌を押し当て、熱がない事を確認してほっとした様子だった。」

「ヴィー、覚えてないの？ 十八の若かりしあの日を？」

「特に、覚えがないのだが」

「晴れた空の下、あの青春を？」

「分らない」

ひどく困惑した様子のヴィオラントに、少年の彼が董に剣を突き付け睨み据えたと伝えるのは気の毒だと思い、彼女はそれだけは腹の中に飲み込んだ。

寝ぼけていた彼が覚えていないだけかもしれないし、董が見たのはただの夢だったのかもしれないので、彼女もそれ以上深く追求するつもりはない。

今の彼の身の上には、苦悩も疲弊も憂いもなく、過去を蒸し返してその顔を歪ませるのは、当然愉快なことではないのだ。

だから、この話はここまでと思って話題を変えようとしたが、当然の本人が待ったをかけた。

「私は、過去にそなたと出会ったという記憶はないが、今日という日に母が話題に上ったことについては、偶然なのかと疑いたくなる事情がある」

「んん？ それって、どういうこと？」

「今日は、母が亡くなった日だ」

め、命日じゃん！と目を剥いて、「なんでもっと早く言わないの

よ！ お墓参りはっ？」と噛み付いた董に、ヴィオラントはこの世界では何かの節目に故人を悼む風習はないのだと答えた。

「優しいお顔して、笑ってたよ？ それに、私の頭を撫でてくれた。いつもヴィーがしてくれるみたいに」

「そうか」

「別に、心霊体験でも夢でもどっちでもいいんだ。私、ヴィーのお母さんに会えてよかったよ。お母さん、この子の事知ってくれてるかな？」

相変わらずあどけない顔のまま、僅かに膨らみ始めた己の腹部を撫でて、董は小首を傾げた。

それを見たヴィオラントの中で、沸き上がる愛情は上限を知らず、小さなこの身で彼の子を育み始めた妻を抱き寄せ、その愛らしい唇を心行くまで味わってから、そっと抱き上げ侍従長を呼んだ。

「ヴィー？」

「スマレ、気分はどうだ？ 馬車には乗れそうか？」

「うん、平気だけど。どっか、行くの？」

御者を仰せつかった侍従長は心得たように微笑み、女官長は彼女の小さな女主人の為に、厚手の上着と膝掛けを用意した。

「母に、報告がまだだった。墓前に参って、そなたと子の健やかな成長を見守ってくれるように頼もうと思う。一緒に来てくれるか？」
「うんっ！」

この世界に、故人に何かを願う風習はない。

貴賤も善悪も問わず、人は皆死ねばただの無に還り、無の世界で全ての柵から解き放たれて浄化され、そしてまた新たな命として生まれ変わると言われている。

だから、故人はいつまでも世に留まって、生者の願い事を聞いている暇などないのだ。

形としてそれぞれ墓は拵えるが、そこに故人の魂が留まっていると考えるものは、この世界にはいないだろう。

つまり、墓参りとは、彼らにとってはあまり意味をなさない行為なのだ。

しかし、この度董の口から母の存在が飛び出し、それがちょうど母の命日であったことで、ヴィオラントは実は葬儀以来、一度もそこを訪れたことがなかった不義理を思い出した。

最後まで、自分が母に愛されていたのか分からなかったが、董が見た母は優しく微笑んでいたのだという。

それは、亡き母が己の妻を認め、娘として受け入れたと言っているように感じた。

ヴィオラントの母、マジエンタ・オル・グラディアトリアは、皇族の墓地に眠っている。

その隣には、父王フリードリヒ・セラ・グラディアトリアも安らかな眠りに就いた。

最後まで心を通じ合わせることが出来なかった二人が寄り添って、今はどんな風に共に眠るのかと、心より愛する存在を得たヴィオラントは、ようやく穏やかな気持ちで思いを馳せた。

願わくば、己の膝に乗るこの小さな妻子を、二人にはいつまでも
温かく見守ってほしいと思った。

薫姫と年越し

今宵は一年で一度だけ、どれだけ夜更かしをしても許される日である。

「……と、スマレが言うのだが、どういう理屈か教えて頂きたい」

薫の生まれ育った世界は、本日は一年の最終日。

12月31日、大晦日である。

一週間程前にロサンゼルスから帰ってきた両親と、優斗と真子の新婚夫婦は、年賀状の投函も大掃除もお節料理の用意も済ませ、すっかり修繕改装が済んだりリビングに揃って寛いでいるところだった。薫の幼馴染みリョウ少年が内装を手掛ける時、新しい壁紙はオフホワイトの無地に統一した。

それは、この野咲家のリビングに今年突然隣接することになった、異世界における大公爵様の私室の壁と、色を合わせるためだ。

世界は柔らか素材のスケルトンな壁で隔てられているが、たった一カ所だけポトスの蔦に覆われた丸い窓が空いていて、それを通る大きなならば何でも物品の遣り取りが可能である。

ちなみにそのポトス、レイスウェイク家では執事セバスチャンと親しまる蔦は、正月飾りにしめ縄と蜜柑を付けて貰って、なかなか豪華な装いだ。

野咲家の壁掛け時計の針は、もうすぐ夜の九時を指すところ。

それを確認してから、壁の向こうから冒頭の問いを投げ掛けられた優斗は、片眉を上げて相手を見遣った。

「夜更かし、ね。ではまず聞くけど。あんたの言う夜更かしとは、何時を越えて起きていることだ？」

「もう、そろそろベッドに連れて行きたいのが正直なところだ」

「まだ、九時だけど？ 今時、小学生でも起きてる時間だぞ」

優斗が質問を返した相手は、昼間のかっちりとしたスーツ姿から、幾分ラフな部屋着に着替えてはいたものの、上品な暗色のガウンの上に流れる銀髪は目映いばかりで、その壮絶な美貌を少しも緩ませることがない。

優雅に腰を下ろしたソファは、優斗からすればあくまで隔たりの向こう側だが、壁が完璧に透けているので同じ部屋の中にいる錯覚さえ起こさせる。

何より、その相手と一緒にいる者が、彼にとっては壁で隔てられているのが今でも信じられない、最も身近で愛おしい存在であるのだ。

「　　っていうかつ！　なんでやたらと、董を膝に座らせるんだ、あんたはっ！！」

「無粋な問いを」

銀髪的美貌の男、野咲家と繋がる部屋の主たる大公爵、つまり、優斗の妹の夫に納まったヴィオラント・オル・レイスウェイクは、相変わらず血の気の多い様子の義兄の問いを、さらりと躲した。

彼は今、湯浴みを済ませて、むしろぶりつきたくなるような薔薇

色に頬を染めた少女を膝に座らせ、いつものようにその洗い髪を丁寧に拭いてやっているとこだ。

お気に入りの黒髪は出会った頃より少し伸びて、彼女の華奢な肩に先がかる位の長さになっていたが、それを毎晩仕上げるのがヴィオラントの楽しみの一つである。

少女は、ヴィオラントの最愛にして唯一の伴侶であり、優斗にとっては目に入れても痛くない程可愛い歳の離れた妹だった。

堇は、柔らかで上質の糸で織られた淡い色合いのナイトドレスを身に纏い、その上から真っ白なガウンを着せられて、男の膝に座って素足をぶらぶらさせている。

髪を乾かす背後の手が、時折不意に首筋や頬を撫でたり、形よい鼻先が旋毛に擦り付けられたりする悪戯を、気に留める事もない。

そうしてぼんやりと、透けた壁の向こうの実家のワイド画面の液晶テレビを眺めつつ、少女はふわあと大きく欠伸をした。

「ほら、スマレ。眠いのだろう。髪が乾いたら、もうベッドに行こう」

「うーやだやだ。今夜は絶対に起きてるの。絶対に外せないテレビがあるんだからっ！」

ふわふわになった黒髪を指で優しく梳かしてやりながら、優斗が聞いていて赤面する程の蕩けるような声でヴィオラントは就寝に誘うが、堇は懸命に眠気を吹き飛ばそうと抵抗する。

「こういうわけだ、義兄上。先程から、スマレは眠いくせにこう言うて聞かぬ」

「はあ、まあ、いいんじゃないか？　ちよつとくらい眠いの我慢させてやっても。そもそも、この時間で夜更かしって、あんたは年寄りか？」

妹が両手で目をこしこし擦る様子さえ愛おしく堪らないらしく、伶俐な目を緩めて甘く嗜めている年上の義弟に、優斗は呆れたように返したが、相手は心外なというふうに彼に向かって瞳を眇めた。

「ベッドに入るのがこの時間だけで、何もすぐに眠るわけではない」

「……待て！　それ以上言うな！」

そして、最近頼に良く動くようになったヴィオラントの口角の筋肉が、例に漏れず質の悪い笑みを作ったことに気付いた優斗は、自己防衛機能を総動員して精神安定を図る。

「董っ、そいつの口を塞げ！　そいつは、にーちゃんの聞きたくない言葉を言おうとしているっ！！」

「あいあい」

「……っ！　ばっ、ばっ！　誰が口で塞げと言ったっ！！」

ところが結局、妹という手駒は思うように働かず、見たくもない妹のキスシーンを見せつけられる羽目になった。

どうも董は少々寝惚けていたらしく、手っ取り早く兄の命令を遂行する為に、彼女は自分を膝に抱く男の両頬を小さな手で捉えようとむちゅっと自らの口で彼のそれに蓋をする。

もちろん、ヴィオラントに異存があるはずもなく、押し付けられた柔らかな唇を逆に貪るように、自らが丹念に整えた黒髪の中に指

を差し入れ、細い腰には腕を回した。

ちなみに、野咲家のリビングには、優斗の他に両親と新妻の真子も居るのだが、彼らはすっかりヴィオラントの董溺愛ぶりにも慣れっこになっていて、今更キスぐらいでいちいち騒ぐのは優斗一人だけになっていた。

「あああつ、くそつ　！　年の瀬の忙しさに疲れた兄ちゃんを、苦労するという気はないのか、お前はっ！」

「あるよ、あるある。おにーちゃんと一緒に、“ゆく年くる年” 見る為に、眠いの我慢して起きてるんだからっ」

やけくそ気味に、缶ビールを一気飲みして睨んでくる兄に、ヴィオラントに絡められた舌からようやく逃れた董は、シャキーンと親指をおっ立てて見せた。

「ユクトシ、クルトシ？」

「うん、ヴィーも一緒に見ようね。日本の伝統的テレビ番組だよ」

「ふむ。それは、どういった物なのだ？」

「えつとねえ、いろんなお寺が映ってね、除夜の鐘の音が響いてねえ」

「テラとは、確か宗教的な建物だったな。ジョヤノカネとは？」

「えーとえーと、お寺の鐘を撞く事なんだけど、百八回煩悩の数だけ撞くんだよ」

「煩悩　な　」

董の可愛らしい口から飛び出した言葉を反芻している男に向かっ

て、優斗は「除夜の鐘聞いて、煩惱浄化してもらえっ！」と無言で呪いをかけたが、それに気付いたのか否か、ヴィオラントは問題ないとにかくに董を抱いて立ち上がった。

「眠気を我慢してまで、見なければならぬとは思えない。もう、寝なさい、スミレ」

「駄目だよ。あれを見ないと一年は終わらないし、新年も迎えられないんだよ？」

「呪いでもかかるというのか？」

「そんなわけ、ないけどさ」

ヴィオラントは、とにかく早く妻を寢室に連れ去って、彼女を独り占めしたいようだ。

毎晩存分に味わっているのだから、一晩くらいいいではないかと外野は思うのだが、本人にとってみればそれでも満足いかないらしい。

彼が本気で丸めにかかる、眠気に普段のきれを欠いた董では、到底太刀打ちできない。

二本目の缶ビールを空けて、不貞腐れて背中を向けてしまった兄などはもう役に立たず、結局今夜も九時を半分も過ぎない内に、董が家族の前から姿を消すのかと思われたその時、思わぬところから声が上がった。

「あらあ、ヴィオラント君。年越しを待てば、素敵なイベントがあるのよ」

董を宥めて背を向けようとしたヴィオラントを止めたのは、それまでにここにこして成り行きを見守っていた、優斗の妻となった真子

である。

優斗は、一体何を言い出すつもりだと、ぎよつとした顔で彼女を見た。

「それは、どのようなイベントでしょうか。義姉上様」

いつも読めない言動をする彼女の言葉に、興味を引かれたらしいヴィオラントも振り返った。

そんな彼と、その腕に子供のように抱かれてきよんとする義妹の顔を見比べて、真子は「うふふ」とそれはそれは楽しそうな微笑みを浮かべると、いつそ無垢にも見える笑顔のまま言っただけだ。

「新年の記念すべき一発目、“姫始め”よ」

「まこーーーーーっ!!」

「ヒメハジメとは？」

「新年の初エッチのこと」

「すみれーーーーーっ!!」

「ほう」

優斗の悲痛な絶叫と、彼の潰したアルミ缶がビールを噴く音が響く中、父と母は久々に祖国で見る紅白歌合戦に微笑み合いつつ、こんな賑やかな年越しは本当に久しぶりだなあと、感慨深げに寄り添っていた。

薦姫のシヨコラ（前）

「　まずは、今のこの状況の説明から聞こうか」
「も　申し訳ございません、旦那様　」

グラディアトリアの先代皇帝であり、二年前に正妃腹の末弟ルドヴィークに玉座を譲って、現在は悠々自適の隠居生活を楽しむ、当国唯一大公爵の位を持つヴィオラント・オル・レイスウェイクのお気に入り場所は、緩やかな木漏れ日の心地よい自室のテラスである。

本日もゆつたりと昼食をいただいた後は、書斎から見繕ってきた蔵書を数冊テーブルの上に積み、小鳥のさえずりをお伴に微睡み半分目を通していた。

元々は、植物研究の師ロバート・ウルセルの持ち物であった屋敷には、彼がその生涯で集めた大量の書物が残されており、おかげでヴィオラントが退屈することはない。

ただし、今日は些か物足りない思いを、彼は抱いていた。
何故なら、いつもなら午後のこの時間は、彼の向かいの椅子に腰掛けて絵本をめくったり、あるいは彼の膝の上に子猫のように収まって共に微睡む、愛しい存在がなかったからだ。

レイスウェイク大公爵家は少し前、待ちに待った可愛らしい女主人を得た。

当主とは十以上も年の離れた奥方は、何でも異なる世界からやってきた奇跡の存在であったが、様々な問題を当主の強引さと奥方の適当さで乗り越えて、結果的には双方の家族の祝福を受けて一緒になった。

ヴィオラントは、皇帝在位時代には後宮をかまえて多くの美姫を囲っていたものの、それは所謂政治的な思惑の一端に過ぎず、女達には例外なく冷静というよりは冷徹な態度で接していた彼が、突然不可解な現象により目の前に現れた年端もいかぬ少女に、ごっそりあつさり心を奪われてしまったことは、彼に仕える古参の使用人達にとつては、確かに大きな驚きであつた。

しかし、敬愛する主がようやく温かな幸せと愛情を手に入れたことを、喜ばずにいられようか。

しかも、彼らの初めての女主人となつた少女の愛くるしさといつたら、当主が人目も憚らずに溺愛するのも無理はない。

稀なる白銀の髪と神々しいまでの美貌を携えた先帝閣下に嫁いだのは、更に稀なる黒髪と、彼と同じく高貴なるアメジストを瞳に抱いた、最高に可憐な美少女だつた。

その容貌は、グラデИАトリアの貴族の姫君の間で絶大な人気を誇る、愛玩人形クリスティーナを彷彿とさせる愛らしさで、何でも元を正せば彼女がその人形のモデルであつたという、驚きの事実まで明らかになっている。

彼女の名を、董という。

元の世界ではノサキという家名を名乗っていたが、レイスウェイク家に嫁ぎグラデИАトリアで生活する便利上、こちらの世界での後見人たるシュタイアー公爵夫妻の血名を頂き、スミレ・ルト・レイスウェイクと呼ばれるようになった。

人形のように華奢で儂気な容貌ながら、普段の彼女は明るく快活で、貴賤を問わず全てにおいて分け隔てなく接する。

レイスウェイク家の使用人達はベテラン揃い、つまりは熟年層がほとんどを占めているのだが、彼らにとってはそんな少女が孫娘のように可愛くてならない。

すっかり骨抜き of 当主を筆頭に、屋敷をあげて幼い女主人を愛で

まくる毎日であった。

今日の董は、ヴィオラントと共に昼食を済ませると、食後のデザートもそこそこに、何処かに姿を消していた。

何処かと言っても、過保護で心配性な彼女の夫がその行き先を把握していないわけもなく、実は美味しく頂いたばかりの料理達が生まれた場所、つまりは屋敷の厨房に籠っているのだ。

それは何も珍しい事ではない。

生家では、別の国に住んでいた両親は除くとして、料理のセンスは些か心許ない兄に代わり、食卓はほんの幼い頃から彼女が守っていたのだそう。

その料理の腕前はなかなかのもので、長年王城の料理長を務め上げ、ヴィオラントの退位と共に自身も退職して、レイスウェイク家を終の職場と決めてついてきた、ヨゼフ・テルハムのお墨付きである。

料理長ヨゼフは、ヴィオラントの乳母にして女官長マーサの実弟で、角刈りの厳つい顔立ちと大きな体躯が威圧的で、非常に子供受けが良くない残念な男だが、そんな彼の穏やかで優しい気質を董は直ぐさま見抜いた。

そうして、娘や女孫がおらず、幼い少女の扱いに戸惑うヨゼフにも懐き、毎日の料理を素晴らしいと褒め讃えられ、顎にちよびつとある白い髭を愛でられている内に、彼の方もすっかり董の魅力に捕われてしまっていた。

料理人にとっては聖域とも言える厨房を、今まではどんな貴人として使用することを許さなかった彼が、董ならば喜んで招き入れてくれる。

さらに、幾人も抱えていた弟子にさえなかなか許さなかったことだが、料理の中の一品を完全に彼女に任せることや、デザートメニューを一任するなど、以前の彼を知る者から見れば、如何に少女が破格の待遇を受けているのかは明らかであろう。

そんなこんなで、レイスウェイク家の奥方様が、厨房に入り浸っていることも少なくはない。

さすがに料理を担当するのは稀な事だが、午後のお茶の時間に合わせてお菓子を作ったり、晚餐の為のデザートを用意することは多々あって、それらは少数精鋭のこの屋敷の使用人達にも振る舞われる。

何より、元来は甘い物が苦手で、菓子やデザート類はほとんど手を付けなかったのがこの家の当主だったが、愛妻が心を込めて拵えたものを除けるはずがなく、愛らしい細君を膝の上に抱き上げて、彼女と共に甘味を愛でるといふ光景も頻繁に目撃されるようになっていた。

そうであるから、董が今日も厨房に居る事には異存のないヴィオラントだが、戻ってきた彼女の様子には、黙って見過ごせない問題があつたのだ。

大きな体躯のヨゼフは、テラスの椅子に腰掛ける主人の前に突っ立って、叱られるのを待つ大型犬が耳としっぽを垂らしたかのよう
に、気の毒な程にしゅんとしている。

彼の背後では、その姉である女官長マーサが、まさに般若の形相で彼の後頭部を睨みつけていた。

「本日は、奥方様はシヨコラを作りたいとおっしゃって、私は仕事
が一段落していたものですから、隣で拝見させていただいていたの
です」

主人に事情を説明しろと命じられた料理長は、目の前の光景に困
ったように太い眉を下げ、とにかく事実を告げるしかなかった。

「何でも、旦那様にお贈りする特別なシヨコラで　　本当は内緒にしておいて欲しいとおっしゃられたのですが　　」
「こうなつては仕方あるまい」

何がこうなっているのかというと、件の少女は只今その夫たる男の膝の上にちょこんと鎮座していて、それ自体はレイスウエイク家の人々にとって何の問題もないことなのだが、彼女の様子は明らかにいつもと違っている。

常ならば薔薇色の、愛らしく円やかなの頬は燃えるように赤く、麗しき稀色を抱く瞳は熱を帯びて潤み、とろんと蕩けるように艶増し危う気な色香を放つ。

いつもは清純な色合いの唇が紅を引いたように濃く、微かに開いたそれはまるで、口づけを待ちわびているようだ。

身体自体も、骨を抜き取られたかのようにふにやりと崩れ、完全に夫にしなだれ掛かっている状態だった。

「旦那様が美味しく召し上がられるように、シヨコラの甘みを抑えて酒を使いたいと仰られて　　。スミレ様の世界では、酒を練り込んだシヨコラも少なくはないのだそうです」

「なるほど」

「料理に使う酒を幾つか提案してみたのですが、どれが最もシヨコラと相性がいいのかは、自分の舌で確かめたいと　　」

董の要望に応えて、ヨゼフは調理場に置いてある醸造酒やら蒸留酒などを一つ残らず取り出して、自分が飲むように置いてあった秘蔵の酒まで差し出した。

様々な種類の、大小色とりどりのそれらを調理台の上に並べ、一つ一つ彼の注釈を聞きながら考え込んでいた董だったが、蒸留酒の

中から選ぶことに決めたらしい。

蒸留酒というのは、醸造酒を蒸留して作った酒であり、日本のものと言えど焼酎が例として挙げられる。

ウイスキーやウォッカ、ブランデーやラム酒なども含まれ、ウイスキーと言えどウイスキーボンボンが有名であるし、ブランデーやラム酒もお菓子に加えられることが多い。

あとは、蒸留酒に果実やハーブなどの香味を移し調整したりキユーールもよく使われるが、砂糖やシロップが加えられているので、甘い物を好まないヴィオラントには適していると思えなかった。

小さなカップに様々な蒸留酒を注ぎ、一つ一つ匂いを嗅いで舐めてみる。

そして、更に絞り込んだ結果ブランデーが残り、今度は少し口に含むようにして吟味した。

ブランデーと言えど、白ぶどうのワインを蒸留して作られるものが良く知られているが、リンゴから作ったアップル・ブランデーやサクランボから作ったチェリー・ブランデーも存在する。

また生産地によっても味が異なり、原料の果実は言わずと知れた農業大国である隣国コンラートで作られ、そのまま酒に加工された物もあれば、加工技術の優れたグラディアトリアで作られたもので、味わいは千差万別である。

ところで、ここで見逃された大きな問題が、董が実はまだ酒を飲んだ事がなかった、という事実だった。

故に、酒の善し悪しが判別できない以前に、彼女のアルコールに対する体質が、その時点では判明していなかったのだ。

しかも、蒸留酒というのはワインなどの醸造酒に比べてアルコール度数が高い。

それを少量ずつとはいえ、アルコールに耐性の無い董が摂取したとすれば、その結果は想像するに難くないだろう。

「貴方が付いていながら何たる失態。図体が大きいだけの木偶の坊ですか」

見事、人生初の酔っぱらいに変身した董の姿を見た、女官長マーサの凄まじい怒りは、その傍らでおろおろしていた厳つい実弟に向けられた。

監督不行き届きを責められて、ヨゼフはますます縮こまり、言い返す言葉も無い。

「まあ、そう責めるな、マーサ」

そんな彼を庇う為に、ヴィオラントは膝の上の妻を抱き直しながら、口を挟んだ。

「ですが、旦那様」

「スミレが酒を飲んだ事がないなど、ヨゼフは知らなかったのは無理も無い」

グラディアトリアにおいて、董の年は既に成人の域に達している。しかも常識的な限度はあれど、この世界では飲酒に対する年齢制限は定められていないのだ。

特に貴族の子女にとって、社交界において酒の席での付き合いは大切な機会であり、それを酔いで無駄にしない為に、早くからアルコールに耐性を付ける訓練を行うのが習わしだった。

董が異世界から来たのだという話は耳に入っただけでも、正直意味が分からなかった料理長は、たまたま彼女の愛らしさに全身で傾倒しており、彼女がこの屋敷の中で、そして敬愛する主人の傍らで微笑んでくれているだけで幸せだったので、その出自についての細

かい事は考えたこともなかった。

当然、彼女の故郷では成人するまでは酒を口にしてはならないという法律があつて、成人の年齢が二十歳だという事実など、知る由も無い。

だから、機嫌良く酒を吟味していると思つていた少女の身体が、ふらりと突然力が抜けて傾いた時は、何が原因であるのかすぐには分からなかった。

ふにやふにやになった小さな身体を抱え上げ、とにかく普通ではない状態の彼女を医者でもある侍従長に診せなければと、彼を探して駆け込んだ場所が当主の私室であつた。

ちようど午後のお茶の用意の為に、女官長でありヨゼフの実姉であるマーサもそこに居た。

突然飛び込んできた料理長のただならぬ様子に、何事かと驚いている人々を他所に、彼の腕からふわんと飛び降りた董は、ふわふわと危なげな足取りでテラスまで駆けて行き、椅子から腰を浮かせていた夫の前までやってくると、「ん」と彼に向かって両腕を広げ、酒精で潤んだ上目遣いで見上げる。

そして

「ヴィー、だっこ」

と、最高に可愛らしくおねだりをした。

もちろん、ヴィオラントの腕がその言葉を聞くよりも早く反応して、妻の小さな身体を抱き上げていたのは、言うまでもない。

そうして、彼女を膝に抱いてテラスの椅子に座り直しつつ、胸元

に頬をすり寄せて甘えてくるのが可愛くてならないというように、
そのふわふわの黒髪を撫で回しながら、冒頭のセリフに続くのであ
った。

薦姫のシヨコラ（後）

「特別心配することなさそうですね。お飲みになった酒は少量ですし、軽く酔いが回っただけでしょう」

侍従長サリバンが念のため、主人の許可を得て董を診察した。

顔から首筋にかけてが火照り、脈も速くはなっているが、本人は気分は悪くはないと言いつし、一過性のものだろうと結論付けられた。

「ですが、スミレ様はあまり酒に強くない体質のご様子ですので、今後飲まれる時は気をつけて差し上げてほうが宜しいでしょう」

「そうだな。覚えておこう」

大貴族の奥方ともなれば、酒の席での付き合いも持て成しも元来なら必要な仕事であるが、そもそもヴィオラントは妻にそのような役目をさせるつもりは毛頭ない。

彼自身、舞踏会や夜会への誘いは数多あれど、出席の返事をするのは弟妹や義母、もしくは実父であるシュタイアー公爵が主催のものに限り、しかも彼らが董に対して大公爵夫人らしき振る舞いを求めることは皆無。

酒に弱いと知れば、無理に勧めるはずも無く、それどころかミルクだの果実水だの、頼んでもいないのに酒以外の飲み物を我先にと差し出して、彼女を手持ち無沙汰にさせないように尽力してくれるだろう。

ヴィオラントに負けず劣らず、董を甘やかす事においては定評のある面々だ。

よって、彼女が無理をして酒を飲まなければならないような事態

は、今後起こらないであろうし、ヴィオラントが起こさせないだろう。

抱き慣れた華奢な身体は相変わらず柔らかく、いつものより高い体温が、衣服を通してヴィオラントの身体に染込んだ。

「スマレ、大丈夫か？」

「ん ふわふわしてて 気持ちいい」

彼は、思わず齧り付きたくなるような、甘く色付いて滑らかな頬を撫で、ふにゃんと微笑むあどけない妻の顔を覗き込む。

明朗快活で、常々表情豊かな少女ではあるが、酒精の加わった今の彼女は余りにも無防備過ぎて、非常に危うい。

頬を包む男の掌に擦り寄って甘える仕草は、普段の強かな小悪魔とは縁遠く、儚く従順な姿は男が理性の中に押し込めて隠している野性と呼び起こす餌となる。

気を抜けばすぐに頭を擡げようとする欲望を振り払うかのように、ヴィオラントは董の前髪をかきあげて、露になった額に熱の籠った唇を押し当て。

「酔いが醒めるまで、少し横になった方がよさそうだな」

「ん でも チョコ、途中」

そのまま寝室に運ぼうとするが、思考を完全に酔いに支配されたわけではないらしい董は、厨房に様々なものを放ったらかしにしてきたことを気にした。

そんな彼女を安心させるように、ヨゼフは「まだ材料を広げただけなので、大丈夫です」と声を掛ける。

「今は、休まれるのがよろしい」

「ヨゼフ、ししょー けど」

「私が代わりに作って差し上げる事は容易いですが、それではないけないのでしょうか？ 旦那様のために、ご自分で作りたいのですよね」

董が師匠と呼んで慕うレイスウエイク家の料理長は、可愛らしい女主人の変貌が、単なる軽い酒気あたりであつたことを知り、安堵の溜め息を吐きながら微笑んで言った。

シヨコラに混ざる酒を吟味する少女の真剣な様子は、含まれた意味までは分からずとも、それが特別な想いと共に主人に贈られる、大切なシヨコラになるとヨゼフに容易く理解させた。

「後日、また改めて調理出来るように片しておきますので、ご安心を」

「手数をかけるな、ヨゼフ。よろしく頼む」

「いいえ、旦那様。元はと言えば、私の注意が足らなかったのです。申し訳ありませんでした」

その後、いつの間にか姿を消していたマーサが戻って来て、「寝所は整えてございます」と主人夫婦に告げたのだが、抱き上げて寝室に移動しようとしたヴィオラントを、膝の上の董がぐずって止めた。

「お昼寝なんて、赤ちゃんみたいなもの」と何故か意地を張る彼女に、温かい日差しの中ぐテラスで微睡ませて問題はあるまいと判断した男は、念のために女官長が差し出した膝掛けで妻を覆い、膝の上で横向きに抱き直してやった。

そんな新婚夫婦の様子を微笑ましく見守りつつ、マーサはお茶の用意を整え、侍従長は主人宛の急ぎの用件ではないであろう封書を持ち直し、料理長は厨房に放置した少女の想いの元を回収すべく、

揃って当主の部屋を後にした。

「　　ないしょ　　だったのに　　」

「うん？　シヨコラのことか　？」

「　　ん　　あげる日まで、ヴィーには内緒にしておこうと、思ってたのに　　」

酔いが回っているとはいえ、董も正気を保っていないわけではなかった。

内緒だったのにと口を尖らせながらも、別にそれはヴィオラントに事情を説明した料理長に文句を言いたいわけではない。

酒の選抜に夢中になるあまり、アルコールに慣れていない事も失念していた自身を恥じ、計画が狂ってしまったことを悔いているのだ。

年齢や見た目の割に、達観して醒めた眼差しで周囲を見極め、世渡り上手な印象のある彼女の、時に見せるそんな未熟で幼い一面が愛おしく、ヴィオラントは何にかえても守ってやらねばと強く思う。

「　　“ばれんたいん”という日に、贈ってくれるつもりだったのだろう？　知らされても、楽しみであるのに変わりはないぞ」

「　　ヴィー？　　なんでバレンタインのこと、知ってるの？」

「うむ　　ユウト殿が、先日教えてくれたのだ」

「おにーちゃんめ　　」

「毎年あちらの二月十四日は、女性が夫や恋人にシヨコラを贈るのだとか。スミレも必ず寄越すであろうから、心して有り難く受け取れと。罷り間違い、甘い物が苦手だからと断れば、夫婦存続の危機

に陥るだろうと忠告付きでな」

ただし、優斗の忠告がなくとも、ヴィオラントが董が差し出したものを断るはずがない。

しかし、特別な想いを込められた贈り物と知っていれば、受け取る方の感慨もまた一人であろう。

常より幾分緩い口調で実兄への悪態を吐く唇を、そつと宥めるように啄めば、先程董が口にしたのであるう仄かなブランデーの香りが、ヴィオラントの鼻腔に忍び込んだ。

「そなたの世界には、意味を持つ日がたくさんあるのだな」

「うん。でも、バレンタインは本当はチョコを配る日じゃないんだよ。お菓子会社の戦略に皆が乗せられただけで、外国じゃあ贈る物はチョコに限られてないし」

「ほう。それで、そなたは前年までも、誰かに贈っていたのか？」

「」

ふわふわとした酔いの浮遊感の中でも、ヴィオラントの瞳が不穏に眇められたのが見て取れた。

董が特別な意図も無く黙り込むと、彼は微かに苛立ったように唇を性急に押し付けてきた。

緩んだ唇の隙間から舌が潜り込み、歯列の奥で火照っていた相手を見つけ出して、とろりと絡める。

「あのね、別にバレンタインにチョコあげるのは、恋人とか旦那さんとか限定じゃないの。お世話になった人とか、友達とかでもアリだし　女の子同士で交換したりもするし」

「そなたは、誰に贈っていた？」

「お兄ちゃんとか、りょーちゃんとタカさんと、ついでにアミちゃ

んも　、あと、まあ　」

「――アツシ、か？」

「　アツシは、去年のバレンタインはまだ知り合ってなかったから、あげてない」

「――だが　他に、いたな？」

「　」

　ヴィオラントに対して隠し事は無理だと、全てを正直に述べれば機嫌を損ねる事になり、「妬けるな」と呟いた唇に董は再び噛み付かれるのだ。

　過去に嫉妬するなど、それこそ無意味だと思うのだが、愛しい少女が他の男の為に心を込めて何かを作った事実が、ヴィオラントにはとてつもなく憎らしい。

　ただ、強引に責める所作に抵抗も怯えもなく、己の腕の中に身を任せる彼女に、幾分か機嫌を直したのか、その後のキスは優しくった。

　しばしの間、愛らしい唇を思う存分味わい、ようやくヴィオラントがそれを解放した頃には、董の瞳は更にとろりと蕩けて熱に浮かされていた。

　それは何も、酒精のせいばかりではない。

　繊細なレースを重ねたフリルの襟元から除く頂は、頬と同じく薔薇色に染まり、ふわふわの黒髪からちらりと除く可愛い両の耳たぶもまた然り。

　ヴィオラントが求めて求めて、ようやく名実共に己のものにしたというのに、小さな妻は飽く事無く彼に欲望と焦燥を抱かせる。

　こみ上げる愛おしさにぐっと胸が熱くなる男を、知ってか知らずか少女はふらりと持ち上げた両腕で包み込み、蕩けた笑みを浮かべて彼の白い頬に唇を押し当てた。

「何に、妬くの？」

「スマレ」

「誰に、妬くの？」

「

「ヴィーは、他の誰とも違うよ？」

バレンタインだから、貴方が旦那様だからあげなきゃとか、お世話になつてゐる人だからあげなきゃとか、そういう世間体に圧されて作るんじゃないくて、ヴィーの為に作りたいって思つたの。

作りながら、ドキドキするの。

美味しいって思つてくれるかなつて、本当に喜んでくれるかなつて、楽しみだけど何処か怖くて、でもそんな風に考えながら誰かの為に何かを作るのなんて、初めてだったから。

こんなに、人を好きになつたのは　ヴィーが初めてだから。

貴方は特別だからと、ヴィオラントの小さな妻が告げる。

媚も諂いもない、無邪気で無垢な言葉が、彼をどれだけ幸せにするかなど、計算したこともないだろう。

心より愛した者の特別な存在になれることが、どれだけの歓喜を呼び起こすのか、知りもしないだろう。

誰に憚る事無く「好きだ」「愛している」「そなただけ」と告げるヴィオラントに比べ、猫のように気紛れで自由奔放な彼女は、そういう類いの睦言を口にする事は滅多にない。

だからと言って、その愛情を疑うわけではないが、やはり言葉にして伝えられれば喜びも一人である。

酒精の魔力が彼女の秘めたる想いを曝け出したのか、あるいは酔

いとは関係なく、特別な日を前に特別な言葉も添えようと思ってくれたのか、それは分からないが。

ヴィオラントは柔らかな温もりを、強く抱き締めた。

仄かに香るブランデーの香りは、董の彼に対する愛情の一片であったのだ。

「そなたに無理をさせたのは、私だな。すまない」

「違うよー。お酒なんて、私飲んだ事無くて、どれが美味しいのかよく分からなかったからさ。決めかねて、飲み過ぎちゃっただけだよ」

「飲み辛くは、なかったのか？」

「えつとねえ、美味しいとは思わなかったけど、飲めないこともなかったよ」

「うむ。しかし、とにかく、そなたはあまり酒を口にしない方がいいだろう」

ふわんと首を傾げて「どうして？」と尋ねる董に、ヴィオラントは彼女を抱えたまま椅子から立ち上がりながら、少量で酔うようならばそれは酒が身体に合わないということだ、と諭した。

「酔ってないよー、素面だよー、気持ちいいだけだつてばー」

「酔っぱらいは、大体そう言うのだよ」

「じゃあ、いいじゃない。気持ちよくなるだけなんだから、酔っぱらっても」

「こんなにふらふらになっておいて、何を言う」

「あー、いいねえ。お酒飲みたがる大人の気持ち、ちょっと分かった感じー」

「非常に良くない傾向だ」

顎の下を撫でられた猫がごろごろ喉を鳴らすように、無防備な笑顔を晒す董の危うい雰囲気は、ヴィオラントに本気で危機感を抱かせた。

彼はその後、寝室に妻を連れて行き、ふわふわしたまま聞いているのか聞いていないのか微妙な相手に、とにかく今後己と一緒の時以外は、一口と言えど酒類を口にしてはならないぞと、懇々と言い聞かせるのだった。

結局、午後のお茶の時間に寝室に籠った大公爵夫妻は、夕餉が整うまで姿を現すことがなかったが、レイスウエイク家に仕える使用人にそれを不思議に思う者も、部屋を訪ねて邪魔する野暮な輩も存在しなかった。

翌日。

董は再び料理長ヨゼフが見守る中、厨房に籠ってようやくショコラを完成させた。

ヴィオラントが好んで飲むことが多いブランデーと、その朝に壁の向こうから義姉の真子に勧められたラム酒を加えた、二種類のガナッシュが出来上がった。

すぐに解いて開けられると分かっているながらも、綺麗な包装紙とリボンでラッピングをするのは、乙女としてはとても楽しい作業であり、俄然張り切る元乙女マーサ監修のもと、董は申し分なく立派なプレゼントを用意する事ができた。

そして、バレンタイン当日。

可愛い可愛い奥方様に、はにかみながらそれを差し出されたレイスウェイク大公閣下は、もちろん一も二もなく受け取って、彼女もろとも美味しくお召し上がりになったということである。

ハッピー、バレンタイン。

薦姫のシヨコラ（後）（後書き）

『薦姫のシヨコラ』おわり
（ただし“月”に続く）

薦姫に贈り物

「私は、実は妹が欲しかったんですよ」

「何言いつ出すのよ、急に」

本日、グラディアトリアの一部の人々にとって、非常に縁深い世界となった“ニホン”国では、三月十四日。

二月十四日のバレンタインデーと対となる、ホワイトデーと呼ばれる日なのだという。

朝から、レイスウェイク家には続々と豪華な贈り物が届いている。それは、バレンタインデーに董がチョコレート配って回った、義父であるシュタイアー公爵ヒルディベルや、二人の義兄カーティスとデイクレス、義理の従兄にもあたるオルセオロ公爵ジョルドとその妻にして王姉ミリアニス。

更に、仲間外れは可哀想と、四大公爵の一人で財務相を務めるロートリアス公爵にも義理チョコを進呈しており、董には娘と息子がいろいろ迷惑をかけて合わせる顔がなかった彼は感涙し、そのお返しである本日の贈り物には並々ならぬ気合いが入っていた。

そして、もちろん手作りチョコレートを手渡してあった、夫レイスウェイク大公爵の二人の弟達、皇帝ルドヴィークと宰相クロヴィスからも、こちらはわざわざ連名で城への招待状が届いた。

多忙な彼らは、残念ながらその日は政務の時間を調整しても、レイスウェイク邸と王城を往復する時間を捻出するのは難しく、しかし贈り物を送って終わるというのも満足いかならしく、年下とはいえ義姉様を呼びつけるのは些か無礼かとも思ったが、その夫たる長兄と共に登城してもらえように願いつ出したのだ。

かくして、基本的にはフリーダムな毎日を送っている大公爵夫妻は、彼らの望み通り馬車に揺られてやってきた。

ちようどお茶の時間となった皇帝陛下の執務室で、董の目の前に積み上げられたのは、綺麗な包装紙に包まれ華やかにリボンで結ばれた、プレゼントボックスの山、山、山。

自分の身長を遥かに超える高さにまで積み上げられたそれに、さすがの董もあぐりと口を開いて啞然とした。

「なに？ この中から、当たりを見付けろっていう、ゲーム？」

「何を言ってるんですか。外れなんか用意しているわけじゃないでしょう。全部一級品ですよ」

董の半分本気の問いかけにさらりと答えたのは、お茶を飲みながらも書類と睨めっこしている皇帝陛下を差し置き、優雅に客人の向いのソファに腰掛けカップを傾ける、宰相閣下である。

多忙とはいえ要領のいい彼は、招待した兄夫婦を持て成す時間くらいは確保していたらしい。

そんなクロヴィスと眉間に皺を寄せたルドヴィークを見比べて、董が隣にくっついて座ったヴィオラントを見上げると、彼も些か呆れたような顔をしていて弟達を眺めていた。そして、妻の視線に気付くと、微かに苦笑を滲ませて彼女の髪を撫でた。

「確かに、ホワイトデーは三倍返しって言ったけどさ」

「そう聞いて本当に三倍ごときで留めるなど、男が廃るというものですよ」

確かにこちらの世界において、チョコレートと同じ物を意味するシヨコラという食べ物、高級茶葉にも匹敵する高価な嗜好品に分類される。原料である実は、グラディアトリアでは栽培されておら

ず、国内で流通しているものは全て農業大国コンラートからの輸入品である。

しかし、董が先月バレンタインのチョコレートを作るのに使ったのは、グラデディアトリアで仕入れた物ではなく、祖国日本の馴染みの企業の代物。同じくチョコレートを作る予定だった義姉の真子に購入を頼み、蔦執事セバスチャンが守る壁の穴を通して受け取ったのだ。

贈る男達が皆セレブであるという理由から、口の肥えた彼らの為にそれなりに上質なものを選んだが、それでも董の禁煙応援貯金箱が僅かに軽くなる程度の出費であり、何にせよ目の前のお返しは度が過ぎていた。

しかし、「こんなにいらないんだけど」と遠慮なくつれないことを言う年下の義姉に、宰相閣下はカップから唇を離して微笑んだ。

「私もルドもね、それなりの役職にあるのですから、収入は一般よりいいわけですよ。しかしながら、貯まる一方で使い道がなかなかない」

「ふうん」

「特に、我々はまだ養うべき家族もいませんから、貯まったものを投資する相手もない」

「あっそう」

「せっかくなので、貢ぎ甲斐のある方の為に散財するのも、たまには楽しいものですよ」

そういう次兄の言葉に、いまだ執務机から離れられない皇帝陛下も異存はないようだ。

董が伺うように視線を送ると、彼も肯定するように微笑んで見せた。

「妻が他所の男に貢がれるというのは、私としてはかなり複雑なの

だが。そなた達だから、まだいいようなもの。」「まあまあ、兄上。甲斐性のない弟達に、少し楽しみを分けて下さいよ」

そんな弟達の言い分に溜め息を吐いた長兄は、彼らの貢ぐ対象の少女を娶った男である。

ヴィオラントはほとんど癖のように、お気に入りのふわふわの黒髪を撫でながら、彼としては限りなく破格の甘い苦言を呈した。

大事な弟達のことであるから許せるが、溺愛する妻に貢ぐだの投資するだの言うのが他所の男であつたならば、二度とそのような戯れ言を口にできないよう、徹底的な排除も厭わないだろう。

そんなヴィオラントの苛烈な一面の存在を知りつつも尚、彼の弟妹に対する甘さも熟知しているクロヴィスは、兄が自分とルドヴィークの行いを咎めないことを確信していた。

そして、冒頭のセリフである。

「私は、実は妹が欲しかつたんですよ」

発言者は宰相クロヴィス・オル・リュネブルク公爵。

「何言い出すのよ、急に」

「だってね、私の上には偉大な兄上と個性的な姉上ばかりで、やつと下の兄弟ができたと思ったら、ルドは皇帝を継ぐ事が早くから決まっっていて、碌に甘やかすこともできなかったでしょう？ 何と云いますか、ただただ甘やかすだけの庇護対象というのは、癒しとして結構役立つですよね」

「孫に対する、祖父母の愛情と同じだな」

「ええ兄上、まさにそうです。育児の責任はのしかからず、愛でる事だけ楽しめる存在。スミレは、私にとってはそれにぴったり当て

嵌まるんですよね」

「でも私、妹じゃないよ。お姉ちゃんでしょー」

「はいはい、そうでしたね。スミレちゃんは我々の、ちっちゃなおねえちゃまでしたねえ」

「クロヴィス」

笑みを深めるクロヴィスに対し不貞腐れた董は、男達がそのぷっくりとした頬の愛らしさにやに下がっているとも知らず、ぶつぶう言いながら足元にあった大きな箱に手を掛けた。

「いいの？ほんとに全部もらっちゃうよ。後で返してって言っても、返してあげないからね！」

「もちろんですよ」

不満そうな顔をしながらも、彼女の小さな手はとても丁寧にリボンを解き、破らないように繊細な仕草で包装紙を開いて行った。

中から出てきたのは、可憐なドレスや美しい装飾品の数々、愛らしい動物を模したぬいぐるみ達、嗜好を凝らしたお菓子の詰め合わせなどなど。

物欲は、どちらかと言うと強くないタイプの人間であるが、やはり董もまだまだ十代の女の子。綺麗なものも、可愛いものも、美味しいものも、大好きなのだ。

最初はさも、「くれるって言っからもらってやるよ」という小生意気な様子で、プレゼントの山を崩しに掛かった少女が、中から現れる贈り物達を手についた途端、無意識にであろうが嬉しそうに頬を緩ませ、それを薔薇色に染めた愛らしい姿に、クロヴィスは好々爺のように満足気に目を細め、ルドヴィークはほっと溜め息を吐いて唇に柔らかな笑みを乗せた。

夫たるヴィオラントに至っては、箱から取り出したプレゼントの山に埋まっていく小さな妻を拾い上げ、可愛くて堪らぬというよう

に柔らかな頬にキスをした。

「ああ、いいですねえ。貢ぐことがこんな楽しいこととは、知りませんでしたよ」

「貢ぐとか、お腹が出て脂ぎったおじちゃんになってからしたらいいんだよ。なんで若いのにそんなに思考が枯れてるんだよ」

ヴィオラントの膝に抱かれた状態で、一通り全ての箱の中身を検分し終わった董は、結局はしゃいでした恥ずかしさを誤摩化するように、お茶のおかわりに舌鼓を打つクロヴィスをちろりと睨んで憎まれ口を叩くが、何故か相手は更に笑みを深めた。

「スマレには、兄上との間にたくさん子供を作っていただけで、その内の一人にリユネブルク家を継いでもらえれば、私の肩の荷も下りるというものですよ」

「は？」

「そう考えれば、今貴女に投資する事は、将来私の跡を継いでくれる子の為になるかもしれないわけで、うん、とても有意義な行為でしょう」

「って、クロちゃんは、結婚する気ないの？ 自分の子供に跡継がせたらいいじゃない」

「残念ながら、今の所予定はありませんねえ。平和過ぎて政略結婚で妻を迎える必要もないですし」

「婚活しなよ、婚活」

「いやですよ、そんな面倒くさいこと。ルドに勧めてあげて下さい」

「ルド、婚活しな」

「っ クロヴィス、ずるいぞ！ 私だつてまだ っ！」

「ああ、ルド、貴方まだ引き摺ってるんですか。全く往生際が悪いですねえ。ユウト殿と気が合うわけですよ」

「なんで、そこでうちのお兄ちゃんの名前が出て来るの？」

「ルドもユウト殿も、兄上と貴女の可愛い子供でも見れば、さすがに諦めもつくでしょう。というわけで、早々に着手して下さいね」

長兄と董の幸せを心から祝福しながらも、いまだ彼女に対する恋情を全て払拭できていないルドヴィークと、ヴィオラントの妹に対する愛情を認め確かな信頼関係を築き始めながらも、いまだ嫁にやるには早かったと無駄な後悔を燻らせている優斗。

クロヴィスに言わせれば、二人とも往生際が悪い事この上ないと呆れるところだが、しかし彼を嘲笑させる程愚かな事ではない。

不思議そうに首を傾げる董に、心の中でこっそり「この小悪魔め」と苦笑しつつ、彼女をしっかりと囲う腕の主に視線をやると、クロヴィスの敬愛する兄は微かに口の端を引き上げた。

「まあ確かに、今回のお返しは奮発し過ぎでしたね。では、その代わりと言ってはなんですが」

「なに？ その、勝手に商品送りつけて代金要求する、新手の詐欺みたいな言い回し」

「いえいえ、早く私に可愛い甥っ子が姪っ子を抱かせて下さいよ。それで、チャラにしましょう」

「チャラとか、そんなジャンクな言葉、何処で覚えたの？」

「おや。スミレ語録が今、王城で密かに流行していることを、知らないんですか？」

妻の弟達との遣り取りを、ヴィオラントは膝に抱いた彼女の黒髪を猫のように撫でながら、始終穏やかな表情で見守っていた。

少なくとも、董はそう思っていた。

そして、その後弟達に暇を告げ、後宮におわす皇太后陛下としばらく歓談して帰路につき、滞りなく就寝に辿り着いたはずだった。

しかし、柔らかく弾んだベッドの上で、少女に覆い被さる形で、密かに魔王は降臨したのだった。

「私も、そなたにたつぷりとお返しをせねばならんな」

「お返しなら、もうくれたじゃない」

日頃から董には貢ぎまくっているヴィオラントから、プレゼントなどとは今更であるが、彼はもちろん今朝一番にホワイトデーのお返しを献上していた。

美しい装丁の珍しい絵本をたくさん

「――グレイアトリアの文字を覚えた董は、毎夜就寝の前に、ベッドにござごろしながら絵本を読むのが日課となっていた。

コンラートから取り寄せた、色とりどりの花々

「――この朝、開花するように注文したそれらは、董自らの手で屋敷のあちこちに生けられ、その日の内に満開を迎えた。

レイスウェイク家の料理長に、当主自ら細かな依頼を施した、焼き菓子の数々

「――特に、董が好きだと言う“マカロン”なるものは、こっそり詳細を彼女の兄から聞き出して、料理長ヨゼフと試行錯誤を繰り返して完成させた逸品である。

それこそ、クロヴィスとルドヴィークの二人に貰ったプレゼントの山に匹敵する規模のものを、董は既にヴィオラントから受け取っているのだ。

そうだというのに、彼は瞳の奥に明らかにただならぬ光を宿しながら、「否」と甘い声で少女の耳に囁いた。

「弟達に引けを取ってはいらんからな」

「んん？」

「しかし、兄としては彼らの期待にも応えてやらねばなるまい」

「

」

「そなたにはそなた似の可愛らしい子供を。弟達には癒しとなる甥か姪を。是非とも早急に授けられるように、私は誠心誠意尽くすでしょう」

そうして董は、バレンタインデーに続きホワイトデーにも、がつりちゃっかり美味しく頂かれてしまうのであった。

結局、両日ともに一番いい思いをしたのは、おそらくヴィオラントで間違いないだろう。

薦姫は花道の先に

その日は夜遅くまで、グラディアトリアの王城は祝賀ムードに包まれていた。

何と言っても、この国一の英雄ともいえる先の皇帝、ヴィオラント・オル・レイスウエイク大公爵が、遂に生涯の伴侶を得たのであるから。

皇帝家の名を捨てた者としては異例であるが、婚礼式への参列者の顔ぶれと、新郎自身の過去の功績による世間の注目度に配慮し、レイスウエイク大公爵とシュタイアー公爵令嬢の祝宴は、王城の大広間にて行われた。

レイスウエイク家から王城までの道すがら、沿道に溢れて花道を作ったグラディアトリア国民の祝福を受け、馬車に揺られてやってきた新郎新婦は、そのまま既に準備を終えた式場に入った。

自ら立ち会い人として、上座で彼らを迎えた皇帝ルドヴィークは、長兄であるヴィオラントに手を引かれて入場した純白の花嫁に見蕩れ、隣に並んでいた次兄である宰相クロヴィスに肘で小突かれ、ようやく我に返って震える声で口上を述べた。

その少年皇帝の顔が真っ赤であったことを、彼の淡い恋心を承知の母と兄姉達は、見て見ぬ振りをしてやった。

この世界には、神殿や教会といった類いの、宗教的な建物も組織も存在しない。

だから、結婚の誓いをする相手は、神ではなく自らの伴侶とその縁者に、ということになる。

本日、司祭や神父の代わりに式を進行するのは、いまだ健在である前リユネブルク公爵。

先々代の皇帝フリードリヒの側室マジェンタの父、つまり、ヴィオラントとクロヴィスの祖父が務めた。

結婚式で注目されるのは、やはり新郎よりも新婦であろう。

もちろん、大陸一の美貌と名高いレイスウエイク大公閣下の正装には、未婚既婚を問わず全ての女性が熱い溜め息を禁じ得なかったが、そんな彼の視線を始終独り占めしていたのは、その傍らに咲いた一輪の花だった。

真っ白い花は、とても小さく華奢なのに、その存在感たるや凄まじい。

見る者の心を虜にするというのはこういうことなのかと、人々に思い知らせた。

身に纏うウェディングドレスもそれはそれは素晴らしく、新婦の養母であるシュタイアー公爵夫人が自ら縫い上げたのだという。

慎ましやかながらも上品に花嫁を彩るジュエリーは、新郎の義母である皇太后陛下からの贈り物。

珍しい色合いの艶やかな黒髪は、いっぱいの生花と共に結い上げられ、薄いベールが夫となる男の手により取り払われると、その下からは眩いばかりに可憐な少女が現れた。

あどけない容貌は、今日は薄く施された化粧で少し大人びて、けれど見る者を蕩けさせる愛らしさは変わらず、大きな稀色の瞳と薔薇色の頬が、集まった人々を例外なく魅了した。

そして、最も魅了された男は、互いに婚姻の誓約書にサインをした後、ようやくその瑞々しい唇に触れることを許されたのだ。

彼女に正式にプロポーズをし、その両親や兄にも認められてからこの日まで三ヶ月、彼は待った。

事実上は既に夫婦のように過ごしていながらも、名実共に堂々と彼女の夫と名乗れる日を、ヴィオラントは待ち焦がれていた。

とびきり可愛い彼の花嫁が、ようやく慣れてきたこの世界の

文字で、自らの名を誓約書に記した瞬間のあの喜びを、ヴィオラントは一生忘れないだろう。

厳かな雰囲気の中執り行われたのは婚姻式だけで、その後の祝宴はいろいろな意味で大騒ぎになった。

酒が入った隣国コンラートからのお客様は、元々の陽気に酒精が加わってエスカレートし、はめを外し過ぎて身重の王妃に叱られる場面も多々あり、けれど主役である花嫁がそれを見てきゃっきゃと喜んだので、アマリアスも怒りを鎮めた。

宰相クロヴィスは、さりげなく賓客に話を振りつつ外交に精を出すぬかりの無さだったが、義姉となった少女に遠慮なくワインを注がれ、苦笑しながら仕事を脇に片付けた。

ふわふわの花嫁に、知らずぼうつと見蕩れていた皇帝ルドヴィークは、新郎である長兄ヴィオラントに杯を差し出され、慌ててそれを受け取る。彼が一番上の兄と酒を飲み交わす機会は、今まで滅多になかった。

ヴィオラントにワインを注がれ、慌ててルドヴィークも注ぎ返す。そして、軽く互いの杯を打ち当てて乾杯すると、そつと優雅にそれに口をつけた兄に対し、ルドヴィークの口から自然に「おめでとうございます」と祝いの言葉が零れた。

その時、兄の端正な顔に広がったのは、とても懐かしい穏やかな笑みで、ルドヴィークの失恋の傷を柔らかな真綿が優しく包み込んでくれたような気がした。

そうして、目出度い宴はいつまでも続き、遂に日付が変わろうとする頃。

既に何人もの酔っぱらいを産出した大広間に客人を残し、主役の二人がようやく退室することになった。

宴の途中、実は董は三回のお色直しをされた。もちろん、面倒臭

がり屋の彼女が望んだわけではなく、周囲の者達の意向である。

一着目は純白のウェディングドレスで、これは先に述べた通りシユタイアー公爵夫人イメリアの力作。

二着目は、淡いピンクが基調の愛らしいドレス。皇太后エリザベスが、次女ミリアニスと相談してオーダーしたものだ。

三着目は、隣国コンラートの王妃となったアマリアスが作らせた。黒いドレスはそこはかない透け感が絶妙で、少女のあどけなさとし香の混在した姿は危うく、これを着ている間はヴィオラントが董を自分の側から放さなかった。

そして、最後の御召しかえ。四着目は、今日の婚礼式の進行を務めてくれた、前リユネブルク公爵からの贈り物だ。

世情と女心に疎い彼は、ドレスの選定事態は旧知であるレイスウエイク家の女官長にお願いしたが、亡き娘マジエンタに代わって、孫であるヴィオラントの大切な相手に、歓迎と感謝の気持ちを込めてそれを贈った。

マーサが作らせたのは、やはり董の美しいアメジストに似合いの淡い紫をフリルに使った、ふわふわシフォンの妖精の衣装のように可憐なティアドレス。

ヴィオラントが宴の喧噪から董連れ出した時、彼女が身に纏っていたのは、その四着目のドレスであった。

王城で生まれ育ち、しかも十年もの年月を主として君臨していたヴィオラントに、部屋への案内役はいらない。

形式上ついでこよとした侍女を断り、ふわあ小さく欠伸を零した新妻を抱き上げると、彼は与えられた客室に足を向けた。

その背に、待ったの声を掛ける野暮な輩は、今夜ばかりはいなかった。

なんと言っても、この後は、待ちに待った初夜である。

とはいえ、既にがつつり肉体関係を持っている二人にとっては今

更だが、欲しくて欲しくて堪らなかった少女を、ようやく名実共に妻にすることができた男には、この夜の逢瀬は特別感慨深いものになるだろう。

賓客用の部屋には、もちろん大きな浴室も備え付けられている。

既に浴槽にはたっぷりと熱い湯が張られ、タオルや着替えもきちんとして用意がなされていた。

ヴィオラントは部屋に入ると扉に鍵をかけ、真っ直ぐに浴室に向かう。

そうして、まるで幼稚園の保父さんのように、大きくバンザイをさせて新妻の衣服を脱がせると、手早く自分も身軽になって、もうひとつ大きな欠伸をした彼女を温まった浴室に連れ込んだ。

「……はあ、さすがに、疲れたねえ」

「ここぞとばかりに、着せ替え人形にされたな」

式や宴自体よりも、義母や義妹によって半ば強制的に行われた三度ものお色直しに疲れたらしい董は、むにやむにや眠い目を擦って化粧をされていたことを思い出し、甲斐甲斐しく世話しようとする夫の手を擦り抜け、浴室の壁際に用意されていた洗顔用の石鹸でメイクを落とした。

顔を洗うと、幾分気分もさっぱりした。

そうして、ほっと溜め息を吐いた彼女の小さな身体を絡めとり、まるっとその裸の上に泡を滑らせたヴィオラントは、今夜は悪戯な自分で自身諸共お湯を掛けて洗い流す。その間にせつせと髪は自分で洗った董を拾い上げ、ようやく湯船に浸かって落ち着いた。

「ヴィー、眠いよお」

「そう言うと思ったから、湯に誘ったんだ」

ちょうど良い温かさのお湯がぬくぬくと心地よく、背もたれ代わりのヴィオラントの胸に背中を預けて、董がとろんと微睡もうとしたのに気付くと、身体を洗う時は作業に徹していたはずの男の手が、明らかに不埒な目的を持って少女の肌を這った。

「ベッドに直行すると、睡魔にそなたを奪われる可能性が高いからな」

「でも、お風呂も体力奪うんだよあ？　ほーら、瞼が重くなってきた」

「それは、困るな」

全く困った様子のない声でそう言いながら、背後から回されたヴィオラントの大きな掌が、お湯の中で慎ましやかな乳房を包み込むと、彼の膝の上の妻は頬を薔薇色に染めて振り返った。

「初夜なのに、お風呂でなんて」

そう、恨みがましく述べた唇が、拗ねたように尖って愛らしく、ヴィオラントは遠慮なく吸い付く。

舌を割り込ませて温かな口内を味わいつつ、「後ほど、ベッドで仕切り直す」と言い訳のように囁いた。

温まった浴室の中で、始終呼吸を荒げられた董は、湯当たりしたように頭がくらくらした。

湯よりも熱い身体に抱き包められ、体内に蓄積された熱は一向に冷める気配がない。

激しい昂りと快楽に成す術もなく支配され、それが彼女の体力を無視して、一気に上へ上へと駆け上がる。

真っ白い頂点を見たと思った瞬間、それはぷつりと電源が切れたように、真っ暗闇にとって代わられた。

次に目を覚ました時には、既に董の身体は柔らかな夜着に包まれ、濡れた髪もきちんと濡かされていた。

「今日は勝負下着つけてたのに、ヴィーってば関心ゼロだし」
「うん？」

「赤ちゃんの服剥ぐみたいにな、ぽいぽい脱がしちゃうんだもん」

「ああ、私が興味があるのは、中身だけだからな」

「でも、せっかくだったのに……」

「ふむ。では逆に、下着姿に興奮されて、そなたは嬉しいか？」

「ん？ うーん……嬉しくない。ひく」

「そうだろう」

そうは言いながらも。

董が言う所の“勝負下着”の存在を、実はヴィオラントは、ちゃっかりしっかり鑑賞済みだったりする。

今日一日、大勢の相手に引っぱり回された彼の花嫁はお疲れで、逸る気持ちを無表情の下に隠し不埒な目的で浴室に連れ込んだ手に、大人しく衣服を脱がされてくれた。

ドレスを手際良く剥いだヴィオラントの目に飛び込んできたのは、普段の董が身につけているような、シンプルで可愛い小花柄や水玉模様の異世界の着ではなく、純白のレースとフリルの向こうに、計算し尽くされた割合で素肌が透ける、彼女のあどけなさに釣り合う色香が絶妙の逸品。

小さなショーツを支える、両脇の繊細なレースのリボンを解く時、みっともなく手を震わせなかった己を、ヴィオラントは褒めたいくらいだ。

因みに、初夜を迎える新郎の為に、エロカワイイ下着を董に進呈したのは、彼女の兄嫁となった真子である。

翌日、レイスウェイク家に戻ったヴィオラントが、野咲家のリビングで迎えてくれた彼女に、開口一番心からの感謝を述べると、その隣に居た妻の兄は何のことだと首を傾げたが、全て承知の義姉上様は、爽やかな笑みと共にグツと親指をおっ立てた。

薦姫の取り成し

「デイクレス兄さま、ごきげんよう」

「やあ、今日も可愛いね、僕のお姫様」

男性率約99パーセントの騎士宿舎の玄関前。

場違いにふわりと愛らしい花が咲いたように、その場にいた者達は一瞬錯覚した。

前触れもなく現れたのは、いつぞやも一度この場で騒動の発端となった人物。

そして、居合わせた騎士達はもうその正体を知っていた。

スマレ・ルト・レイスウェイク

珍しい黒髪と紫の瞳の、上流階級の子女達が愛してやまないドールのように可憐な少女が、実は騎士団第一隊長カーティス・ルト・シュタイアーと第二隊長デイクレス・ルト・シュタイアーの義理の妹君であり、更にこの国の先の皇帝にして現レイスウェイク大公爵閣下の奥方であるということ。

ちなみに当の大公爵ヴィオラントは、相も変わらず皇太后エリザベスの新しい盤遊びに付き合わされて、有無を言わさず義母の向いの席に張付けにされている。

先日騎士宿舎を訪れた際、無断であったこととばかりと彼にお仕置きを受けた董だったが、今回は騎士団副長である彼の妹ミリアニスを同行させることで何とか許しを得ていた。

ミリアニスは産休中の身であるが、家にじっとしているのは性にあわないらしく、夫である騎士団長オルセオロ公爵にくっ付いては毎日登城しているのだ。

「ミリアニス様にはご機嫌麗しく。こんな所で立ち話もなんですから、お茶でも如何ですか？」

二番目の義理の兄デイクレスは、誰よりも父シユタイアー公爵によく似ていると、董は思う。

董とミリアニスがアポなしで宿舍を訪ねても、驚いた顔をしたのは一瞬だけで、すぐさまその優しげなおもてに温和な笑みを浮かべ、スマートな仕草で淑女二人を不躰な男衆の視線から引き剥がした。

慌てふためき頭に血を上らせていた、前回の長兄カーティスの対応とは対照的であるが、董はそんな性格もタイプも違う、けれど優しく甘い義理の兄達が二人とも大好きだ。

「で、どうしたのかな？ スミレ」

「デイク兄にしばらく会ってなかったから、会いにきました」

「ううーん、それは僕としてはとっても嬉しいけれど……」

デイクレスが二人の淑女を案内したのは、騎士宿舍から一番近い場所にあるホールで、董の印象としてはヨーロッパな雰囲気のお洒落なオープンカフェである。

グラディアトリアの王城には、城に詰める者が食事をする大きな食堂の他にも、このようにいくつかお茶を飲める場所があつて、休憩中の侍女や騎士達も気軽に利用できるようになっている。

顔なじみならしい給仕の女性を呼び寄せ、デイクレスは手早く注文を済ませた。

侍女達の間で一番人気のフルーツたっぷりデラックスパフェを、可愛い義妹と敬愛する従姉上に、自分は優雅にダージリン。

「お腹を冷やすのは良くないかもしれませんが、たまにはいいでしょう？」と、目の前に運ばれてきたスウィーツの集大成に瞳を輝かせる妊婦ミリアニスに対し、父公爵そっくりの人当たりの良い笑みを浮かべながら、デイクレスはその隣でパフェの天辺の苺を頬張っ

た董に問いかけた。

「スミレちゃん、……何か、裏があるでしょ？」

「デイク兄が、キリキリ働いているか査察に来ました」

「うん、それから？」

「それから、とあるご提案にきました」

「うん？」

董は甘酸っぱい苺に頬を染めながらそれを咀嚼して飲み込むと、スプーンでクリームを一掬いして口に入れてから、おもむろに自分の胸元に片手を突っ込んだ。

これを見ていたのが上の義兄カーティスや皇帝ルドヴィークならば、顔を真っ赤にして「淑女のなんたるか」を説くところだが、デイクレスは全く頓着なしに涼しい顔で見守っているし、ミリアニスはパフエに夢中なので気付いてもない。

ちなみに、この場にヴィオラントがいたのなら、董の手が胸元に滑り込む前に阻止したことだろう。

董がお馴染み胸元ポケットから取り出したのは、折り畳まれた一枚の紙切れだった。

彼女はそれをテーブルの上でガザガザ開き、デイクレスに差し出した。

「んー、なにになに？ 第一回ごうこん参加者名簿？ “ごうこん”って何かな？」

「合同コンパ」

「うん、それは何？」

「男の子と女の子が寄り合って、ご飯を食べながら親交を深めて、上手くいけば恋人もゲットしちゃおう、っていうイベントのこと」
「へえ……」

董の話聞きながら、ディクレスは貴族の夜会とそう変わりがないものだなと思った。

夜会に訪れる年頃の独身男女の目的は、大体は伴侶探しであったりするのだから。

「それで、この“ごうこん”っていうのに、僕も何か関係があるのかな？」

「うん、ディク兄も出るんだよ。次のお休み、ちゃんと団長様に聞いて押さえてあるから」

「ええー」

「拒否権はないのです。大人しく従いましょう」

突然おかしいな提案をしてきた義妹に、ディクレスは困ったように苦笑を返しながら、僅かに蕩けた彼女のパフェのアイスを紅茶用のスプーンで掬って口に放り込んだ。彼は甘味も酒も、どっちもいける口だ。

そして、それに倣って反対側からアイスをつつき始めた董に、ディクレスは何故そんなことを言い出したのかと尋ねた。

すると、彼女はまるやかな愛らしい頬をぷくつと膨らませ、ピンク色の可愛い唇をつんと尖らせて答えた。

「だって、カーティス兄もディク兄も、全然お嫁さんもらう気ないじゃん？ それなのに、最近ダディとマミィが煩くヨメヨメ言わなくなったと思わない？」

「うん、そういえば……」

「その分、矛先がうちに向いちゃってるの。ダディなんか、早く跡継ぎ量産しろってうるさいんだから！」

「あー……それはそれは……」

ディクレスも、その兄カーティスも知らないことだが、ヴィオラ

ント・オル・レイスウェイク大公爵は彼らの父であるシュタイアー公爵ヒルディベルの婚外子である。

そんな彼に嫁いだのがシュタイアー公爵家の養女である董。

つまり、二人の間に出来た子供は、戸籍上でもヒルディベルの孫にあたるし、血の繋がりから見ても間違いなく孫にあたる。

「兄さま達二人ともが、このまま嫁も貰わず跡継ぎつくるつもりないんなら、私にそれを産ませようって企んでるんだよ、あの人達！」
「うん、スマレと閣下の子供なら、きつととっても可愛いだろうね。僕も兄上もたくさん貢ぐよ」

デイクレスが暢気にそう言っつて、董の全く膨らみの兆しもない薄い腹を目を細めて見やると、彼女は「そうじゃなくてっ」っと地団駄を踏んだ。

「うちの、いつ生まれるか分からないベビーちゃんに、皆して重荷背負わされて迷惑なのっ」

「冗談とも本気とも取れる口調で、リユネブルク公爵クロヴィスからも跡継ぎよろしくと言われてるし、仲良く妊婦となったアマリアスとミリアニスにも、我が子の嫁か婿にと期待がかかっている。

「そんな、ポンポンたくさん産めないし。兄さま達もちよつとは親孝行しなきゃダメだよ！」

「ううーん、耳が痛いなあ」

「とにかく、お見合いよりも気楽なはずだし、もしかしたらいい出会有いがあるかもしれないじゃない。女子も性格いい美人さん見繕ってあげるからさ。絶対出てね、デイク兄！」

「うーん、僕そいう構えてパートナー探してるの、苦手なんだよね……。どうしても、参加しなきゃダメかい？」

「ダメ。もし、すっぱかしたら」

デイクレスのちっちゃな義妹は、その稀少と名高い美しい紫の瞳を据わらせて彼を見た。

もちろん、そんなことをしても全く怖くも迫力もなく、むしろ見た目と仕草のギャップが堪らなくツボで、あの先帝閣下がいったいどんな顔して毎日この子と接しているのだろうと、彼はこっそり覗いてみたい気分になる。

「すっぱかしたらどうなるの？ スミレ」

「もう、デイク兄とは口きかない。何もかも、無視する。次からは空気として接する」

「……分かった。ちゃんと出るよ」

面倒臭いと迂闊に約束を反故にすれば、この可愛くて小悪魔な義妹の顔に泥を塗ることになり、せつかく仲良くなった彼女に嫌われてしまうのはデイクレスも避けたいので、仕方なく溜め息を吐きつつ名簿に自らサインした。

「うんうん、分かればよろしい」

「兄上のサインもあるけど……あの人は僕以上にこういうの苦手ですよ？ よく説得したね」

「カーティス兄さまには、私の付き添いで来てねって言うてある。

ああいう性格の人は、事前に伝えたと構えて失敗しちゃうから、直前に説明するくらいがいいの」

「うん、それってつまり、騙して連れてくってことだね」

「うまく導くって、言うてよね」

董とデイクレスは一滴の血の繋がりもない兄妹ながら、その時はそっくりな笑顔を浮かべて頷きあった。

同時にパフェを堪能し終わってスプーンを置いたミアニスは、二人とは対照的に純粹無垢な笑顔を満面にした。

その後、合コンの日時と場所をディクレスに念を押して、董はご満悦な様子のミアニスと共にヴィオラントの捕まっている皇太后陛下の私室に戻り、ようやく彼を解放してやった。

王城から帰宅し夕餉と入浴を済ませて、いつものように愛妻の黒髪を甲斐甲斐しく拭っていたヴィオラントは、彼女が広げた紙切れを後ろから覗き込んで瞳を瞬いた。

董が眠い目を擦りながら真剣に見つめているのは、もちろん“第一回合コン参加者名簿”と題された、参加者本人達の署名入りの書類である。

「スマレ、“ごうこん”というのは？」

「合同コンパ」

「うむ、それは何かな？」

「……うん、ヴィー、質問の仕方がデイク兄とそっくりくりだね。さすが兄弟。合コンっていうのはねえ、男女がご飯を食べながら親交を深めて、あわよくば恋人ゲットしちゃおうっていう会のことだよ」

「ほづ……」

ところで、件の合コン参加者名簿には、シュタイアー家の兄弟二人の他にもう一人、男性の名前が追加されていた。

「ルドヴィークも、参加させる気か？」

「うん」

そこに記されていたのは、この国の現在の最高権力者である、皇

帝ルドヴィークの名だ。

兄であるヴィオラントには、その筆跡を見れば本人がサインしたものと容易に知れた。

「あれが……よく納得したな」

「ううん、たぶんよく分かっていると思うけど、強引にサインさせたから。ルドってほんと、押しに弱いよね？」

「……」

皇帝ルドヴィークとシュタイアー公爵家の次期当主カーティスは、真面目で実直な性格がよく似ていると董は思う。従兄弟であるのだからある程度似ていてもおかしくないが、融通が利かないところまでそっくりだ。

だから董は、カーティス同様ルドヴィークも先入観を与えない方が上手くいくと踏んで、合コンの意味を詳しく話してはいなかったが、二人とも董が猫を被ってお願いすると最終的にはいうことを聞いてくれた。

「……カーティスもルドヴィークも、そなたにいいように扱われて些か気の毒に思えてくるな」

「誰かに尻叩かれなきゃ親孝行一つ出来ないのが悪いんだよ」

溜め息を吐きながら手櫛で優しく董の髪をとくヴィオラントに、彼女は心外なという風に頬を膨らませて振り返った。

「そのとばっちりで、変な期待を寄せられちゃってる身にもなってみてよ。私、一体何人子供産まなきゃなんないの？」

「何人でも大歓迎だが」

「じゃなくて、みんな養子にとられちゃっていいの？ よそのうちの跡取りさん、みんなうちの子っておかしいでしょ？」

「養子になど一人もやらぬぞ。何人産まれようと、誰一人譲つてやる気はない」

こちら心外なという風に片眉を跳ね上げたヴィオラントは、「ただ、将来その子等が成人を迎えた後、もしもそれぞれの家を継いでもいいと本人達が思うようになったなら、好きにさせても構わないがな」と続けた。

「逆に、もしも産まれた我が子がレイスウェイク家を継ぎたくないと言つならば、それでも構わない。この家名にそれほど思い入れがあるわけでもないし、それに我が子の自由が縛られるようなことがあつてはならない」

「うん、でもやっぱりこの家を守ってくれる子は欲しいよ？ 私の世界と繋がっている場所だし、その秘密もやっぱり守ってもらわなくっちゃ、お互いの世界の為にたぶん必要だと思う」

「そうだな。では、まずは一人、世界を繋ぎ守りを頼める次代を」

「うん」

「早急に、確保せねばな」

「ん……」

なんやかんやと理由を付けて、けれどそれはただの言葉遊びのよう。

愛妻の前でだけは近頃頻繁に弧を描くようになったヴィオラントの唇が、そつと彼女のそれに重なった。

湯の火照りの残る鮮やかに色付く少女の頬を彼の大きな掌が撫で、細い首筋を辿つて鎖骨をくすぐり、やがて胸元から忍び込んで柔らかなパフスリーブの中で丸く小さい肩を包む。

一方董は、甘く唇を啄むヴィオラントに従順に応えつつ、息継ぎの合間に巧みに交渉を持ちかけた。

「そうだ、ヴィー。あのね、合コンうちでやってもいい？」

「……」

「お城でやると、皇帝様狙いの外野から茶々が入るかもだし、シュタイアー家でやるとダディとマミイが大人しくしてないだろうし。この家が一番静かで邪魔が入らないでしょ？」

夫であり当主であるヴィオラントが、あまりこの屋敷に人が集まるのを好まないことを知っている董は、彼が渋るだろうことを予想した上で、相手が絶対に断れないであろう愛らしい様子で強請った。そうして、黙り込む彼を前に、甘い甘い声で魔法の言葉を口にする。

「ヴィー、お願い」

それを告げられたヴィオラントの返事は、いつも決まっている。彼は、最後の一押しとばかりに柔らかな唇を頬に押し当ててきた妻に溜め息を吐き、

「……そなたの好きにきなさい」

と、彼女の小さな耳に囁いてから、今度は深く深くその唇を塞いだ。

もう一つの最果て（前書き）

先に『最果てを求めて』を読了いただいた方が、内容が分かりやすいかと思えます。

もう一つの最果て

「ヴィー、自分で歩く」

「おとなしくしていなさい」

本日は、王城の研究室に用があつたらしいヴィオラントにくつ付いて、董は八歳になる一人息子シオンもともないやってきた。

渋るシオンを引き連れて、王城に張り巡らされた隠し通路の探検に出たまでがいいが、結局途中でヴィオラントに捕まり、現在お仕置き部屋まで連行されている最中である。

「そもそも、義母上の元でおとなしくしていると約束して、つれてきたはずだが？」

「だって、皇太后様におもちゃにされそうになったんだもん。青いおめめがキラキラしてたんだもん」

ヴィオラントは王城に着いた足で、そのまま後宮の奥の皇太后陛下の私室まで妻と息子を送ったのだが、用事を終えて迎えにいつてみると、二人ともその場所にはいなかった。

やれやれとため息を吐いて、心当たりを探そうかと思った時に、後宮の廊下でばったり会ったのが、末の弟であり現皇帝ルドヴィーク。

彼曰く、董とシオンは側室の部屋の隠し通路を通つて、おそらく騎士団寄宿舎内の第一隊長の私室に向かっているらしい。それは、いつぞやの皇帝の側妃が、愛人であつた当時の第一騎士隊長との逢い引きのために作らせた、秘密の抜け穴。

先日、息子のシオンと、董の実兄の息子であるスオウの二人が、王城探検と称して歩き回つたことで記憶に新しい。

確かにその話を聞いた時、董は「面白そう……」と呟いて、子供

達に羨ましそうな目を向けていたことには、ヴィオラントも気づいていた。

しかし、彼の妻は自他ともに認める結構なめんどくさがりやで、まさか本当に探検に出掛けたりはしないだろうと、ヴィオラントはどこか高を括っていたようだった。

ヴィオラントが腕の中に捕まえた董を見ると、出会った頃より長く伸びたふわふわの黒髪には、白い蜘蛛の糸が絡んでいた。

彼はかすかに眉をしかめると、手を伸ばしてそれを取り除き、彼女のドレスも軽く掌で叩いた。

幸い、弱冠八歳ながらもなかなか頼りになる息子シオンが、懸命に母の面倒をみてくれたおかげか、真つ暗闇の隠し通路の中で彼女が転ぶことも、埃だらけになることも免れたようだ。

ヴィオラントはその愛息を褒めた上、生け贄として皇太后陛下の元に送り込んだ。

聡い息子は、父がこれから母と何をしようと企んでいるのかを悟り、またしばらく二人が自分を迎えに来れないだろうことも予感して、呆れたような大人びたため息を吐いていた。

ヴィオラントにとって、グラディアトリアの王城は、生まれてから玉座を去るまで、二十六年もの長い時間を過ごした場所である。

警備の都合上、特に王宮内はほんの細かい部分まで熟知しており、もちろん穴場的な場所もたくさん知っている。

その一つが、庭園における東屋の一角であり、ヴィオラントと董はすでにそこでは何度か愛し合ったこともある。

しかし、今彼が向かっているのは、それとはまた別の場所。

長い回廊から少し細い通路に入り、そこからはくねくねと角をたくさん曲がった。

董がもしも今ここで置き去りにされでもしたら、自力で帰るのはどうにも無理そうだ。

もちろん、ヴィオラントが彼女を置き去りになどするわけもなく、相変わらず小柄な身体をしっかりと腕に抱き、そうしてようやく、一つの扉の前に辿り着いた。

「……ヴィー、帰ろうよ。ほら、遅くなると、マーサさん心配するよ?」

「マーサは心得ているから、案ずる必要はない。サリバンも然り。我が家の住人は、皆優秀だからな」

「……」

董の悪あがきも一蹴し、ヴィオラントはおもむろにポケットから鍵を取り出すと、目の前の扉を開けた。

「……あれっ?」

扉の向こうを見やった董は、思い掛けない光景にきょとんと首を傾げた。

王宮の中でもほとんど人通りのない通路を通ってここまでやってきたが、今も周囲にヴィオラントと董以外は誰もいない。

廊下には幾つもの扉があり、おそらくはそれなりに身分のある者のための客室が並んでいる一角のようで、別段賓客を迎えていない本日は使用する予定のない場所。

ヴィオラントが開いたのは、それらの中でも一番奥に位置する扉形も色も素材も、他の部屋の扉と全く同じで、特筆すべき部分はなかったが、開いてみてびっくり。

「……なにこれ?」

客室の扉を開けば、だいたい最初にリビングが広がっていて、その奥に寝室が用意されているのが一般的である。

しかし、なんと董の目の前には、いきなり階段が現れたのだった。戸惑う董に構うことなく、扉を潜ったヴィオラントはそれを閉じ、内側からガチャリと鍵をかけてしまった。

そうすると、窓のないその場所は真っ暗闇に包まれ、何も見えなくなつた董は自分を抱く男にしがみついた。

そんな彼女と違って暗闇などものともせず、ヴィオラントは危な

げない足取りでとんとんと階段を上っていく。

そうして上まで上り切ると、ようやく開けた場所に出た。

ヴィオラントは相変わらず董を抱いたまま、窓辺に近付きカーテンを開け放つ。

するとようやく、董にも部屋の全貌を見ることができた。

「ヴィー……ここ、なに？」

「絶対に、邪魔の入らない場所だ」

それほど、広い部屋ではない。

絨毯を敷き詰めた床の上には、背の低いテーブルが一つと、大きなソファが一つあるだけ。

真っ白い壁を飾る絵画もなければ、花をいける花瓶一つない。

窓は大きいのが一つあるだけで、テラスもない。

どう見ても、客室とは思えない様相で、言うなれば

「隠し部屋みたい……」

部屋の中をきよろきよろと見回し、ぽつりとそう呟いた董を、ヴィオラントはソファの上にそっと下ろした。

いやに、大きいソファだ。

無言のままのヴィオラントに靴を脱がされたので、董はその上に足を真っ直ぐに伸ばしてみたが、まだ余りある。

ちらりと後ろを振り返ってみれば、そちらにもまだ余裕はありそうで、おそらく董が寝転がってもだいぶ余るだろう。

ソファベッドのように背もたれがフラットになるなら、いつも寝ているベッドと大きさはいい勝負だろうか　などと、心の中で分析していた董は、旋毛の上に深々とため息を落とされて、上を見上げた。

そこには、彼女をまたぐ形でソファに両膝を乗せたヴィオラントが、かすかに眉間に皺をこしらえていた。

その理由を分かっている董は、肩をすくめて「えへ」と愛想笑いを浮かべてみる。

「……何か、私に言わなければならないことはないか？」

「……」

「スマレ」

もちろん、誤摩化されてはやらないヴィオラントは、目を逸らそうとした董の顎を掴んでそれを許さなかった。

彼の愛する妻は、見た目も中身もいまだ少女のようで、奔放で好奇心旺盛な性格は周囲をよく振り回す。

以前は、彼女の実兄がその最たる被害者であったが、こちらの世界に来てからは、彼女の魅力に取り憑かれたヴィオラントの二人の弟達に加え、義理の兄となったシュタイアー家の兄弟も、見事に振り回されている。

最近では、大人びた物言いをするようになってきた一人息子も、被害をこうむることが多くなってきた。

しかし、総じてそれらは、いわゆる罪のないわがままや悪戯ばかりで、最終的には笑って済ませられることばかりだ。

何ごとにも自由に振る舞っているようで、董はいろいろと弁えて生きている。

今日の探検にしても、隠し通路とは名ばかりで、いまやその存在は公然の秘密となっているし、出口も分かり切っている。

怪我をしたわけでも、迷って周囲に迷惑をかけたわけでもないのだから、それほど目くじらを立てることでもないのだが、ヴィオラントの眉間の皺はなくなるらない。

彼の妻は仕方なく、拗ねたようにちゃんと唇を可愛らしく尖らしながらも、小さな声で言った。

「……ごめんなさい」

「よろしい」

それに答えたヴィオラントの眉間からは、ようやく不穏な縦じわは消えたものの、董の上からどくつもりはないらしい。

彼は従順になった妻をソファに完全に寝かせると、片手を背もたれに押し当てたと思うと、おもむろにその手に力を込めた。

ガコッ……！！

「ぎゃあ！ ヴィー、こわしちゃだめじゃんっ！」

「前から壊れているんだ」

おそらくリクライニング機能などないであろう、アンティークで重厚な雰囲気のスファが、大きな音を立てて背もたれを倒し、かなり強引な感じでソファベッドに変身させられた。

突然のことに驚いて、思わずぴょんと跳ね起きそうになった董を、ヴィオラントは上に覆いかぶさることで阻んだ。

とたん、大きなベッドの上に組み敷かれる形となって、董は甘い予感に身じろいだ。

そんな彼女の頬に唇を寄せ、いまだ粉さえ叩かれぬ無垢な肌をペロりと舐めて、ヴィオラントは小さな耳にそつと囁くように口を開いた。

「ここはな、いつぞやの皇帝が愛した、女の部屋だ」

「……え？」

その言葉に、董は戸惑ったように再度部屋の中を見回した。

飾り気のない、こじんまりとした室内。テラスのない窓。

入り口の扉は客室にカモフラージュして隠され、長い階段は来るものを阻むようにそびえ立つ。

何より、皇帝の愛人の部屋だというのに、なぜ後宮から離れたこんな場所にあるのだろうか。

董の視線に問いたいことに気づいたのであろう。ヴィオラントは彼女の耳になおも囁いた。

「金を積んでも権力を振りかざしても、決して己に靡かなかった女を、皇帝は浚い閉じ込めたのだ」

「……」

「自分以外の者との接触を一切許さず、女をたった一人この部屋に監禁し、夜毎訪れては抱いた」

眉をひそめて聞いている妻を見下ろしながら、ヴィオラントはな

んと愚かな男の話だと思ったが、しかし今は少しだけ、その皇帝の気持ちが分かるような気がした。

愛しくて愛しくてたまらない女を、他の誰にも触れさせず、己一人で独占できるならば、どんなに喜ばしいだろうか。

彼女の美しいアメジストの瞳に己の目を映し、彼女の愛らしい声に己の名だけを紡がせ、彼女の小さな身体を己の香りだけで満たしてしまいたい。

「そんなことをしても、余計嫌われるだけだと思うけど」

「まあ、当然そうだな」

「それで、その女の人はどうなったの？」

ヴィオラントの内に渦巻く狂気など知らぬように、董はいっそ無邪気な様子で問う。

甘美な誘惑を抑え込むように、ヴィオラントはすっと瞳を閉じると、ひどく冷たい声でそれに答えた。

「狂って、窓から身を投げた」

「……！」

董の身体が、ヴィオラントの下でびくりと強張った。

それを押さえ付けるように、ヴィオラントはぐつと彼女に密着して覆いかぶさると、戸惑うように揺れる瞳の奥を真っ直ぐに覗き込みながら、

「そなたも、ここに閉じ込めてしまおうか？」

かすかに掠れた声で、そう告げた。

董が、ひゅつと息を飲む。

そして、次の瞬間眉間がぎゅつと寄せられ、紫の瞳が怒りもあらわにヴィオラントを睨み上げた。

変なこと言うな　と、一喝されると思った。

嫌だ　と、拗ねられると思った。

しかし、彼女が次に紡ぎ出したのは、ヴィオラントの予想とはかけ離れた言葉だった。

「閉じ込めるなら、レイスウェイク家の部屋にして」

「……」

「ヴィーは屋敷に帰ってしまうんでしょ？ ヴィーのいない時間を、私はどうやって過ごせばいいの？ ヴィーが来ない夜は、私はどうしたらいいの？」

「……スミレ」

「窓からは飛び降りないけれど、ヴィーがいないと、私寂しくて死んじゃう」

「……っ」

そう言った董の瞳にじわりと涙が滲んだのを見て、ヴィオラントは思わず力の加減も忘れて、彼女をぎゅっと抱きすくめた。

「ぐえっ……」

そうだ、董を閉じ込めるなんて、できるはずがない。

一時の甘美のために道を過てば、愛しい彼女からは笑顔は消え、声は失せ、手足は力をなくすだろう。

そんなことを、ヴィオラントが望むはずなどないのだ。

いうことを聞かない妻への、ちょっとした意趣返しのもりで吐いた、ただの戯れ言。

「すまない、嘘だ。そなたを、こんなところに置いてなどいくものか」

「うんうん、嘘なのは分かったから、力緩めて。ギブギブ、苦しいって」

董を閉じ込めるというのは冗談であつたが、この部屋がかつての寵妃の監禁場所だったのは本当の話だ。

そして、彼女が窓から身を投げたというのも、本当の話だったが

「しかし、死にはしなかった」

「それは……よかった」

この隠し部屋は、王宮の三階にある客室の回廊よりさらに階段を上っているので、おおよそ四階ほどの高さである。

しかし、たったひとつしかない窓のすぐ下は、なんと三階の部屋

のテラスになっていた。

「ちょうど、隣国パトラシーユの当時の王弟が、その部屋に泊まっていた。彼は女を見初めて国に連れて帰った」

「……監禁してまで困った皇帝さんが、よくそれを許したね？」

「罪もない女を監禁するなどという醜聞を、隣国の王族に知られてしまったのだ。それを口外させないために、彼の要求をのまざるを得なかったのだろう」

「……あっそう」

とにかく、今いる部屋が、怪談話で出てくるようないわく付きの場所ではないことが判明し、董はほっと胸を撫で下ろした。

意外に信心深い彼女は、ホラーな話題は結構苦手なのである。

ちなみに、なぜこの部屋の鍵をヴィオラントが持っていたのかというところ……

「幼い頃の私もシオンやスオウのように、ルータスやラウルと一緒に王宮を探検したものだ。この部屋は、その時に見つけた。鍵をくれたのは……」

「くれたのは？」

「……確か、義母上だったな」

「……」

幼いヴィオラント達は、秘密基地と称してこの隠し部屋で遊び、遊び疲れてうとうととしていたところを探しに来てくれたのは、当時宰相だったシュタイアー公爵ヒルディベルだった。

（あの時は、まだ彼が本当の父親だとは、知らなかったな……）

そう、懐かしい思いに浸っていたヴィオラントだったが、さりげなく董が自分の腕の中から逃げ出そうとしているのに気づき、がぶりつと肉食獣が獲物を捕えるように、彼女の首筋にかじりついた。

もちろん、実際には歯を立てたりしないのだが。

「うわんっ……こそばゆいっ！」

「まだ、お仕置きが済んでいないだろう」

「ごめんなさいって、言っただじゃん。よろしいって、言っただじゃん」

「だが、お仕置きをしないとは言っていない」

ちなみに、彼らが乗っている大きなソファだが。

これの背もたれを壊してリクライニング機能をプラスさせたのは、幼い頃のヴィオラント達だった。

「まさか、何十年も経って役に立つようになるとは、思いも寄らなかったな。こういうことを、確かそなたの世界では“因果応報”というのだな」

「いや、たぶん、なんか違うと思うし。もう一回、辞書で調べ直した方がいいと……」

董の抗議は、唇を塞いだヴィオラントの中に飲み込まれて、最後まで紡がれることはなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0638n/>

薦姫の箱庭

2011年9月23日22時43分発行